豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

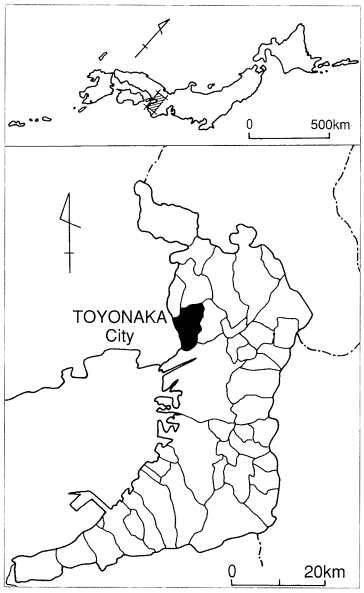
平成18年度(2006年度)

平成19年(2007年)3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成18年度(2006年度)



平成19年(2007年)3月

豊中市教育委員会

序　　文

豊中市は大阪府の北西部に位置し、西は兵庫県に接しています。県境を流れる猪名川から常に豊かな水がもたらされ、北方の千里丘陵にかつて広大な森林をひかえたこの地では、古くから人々の生活の場が育まれ、多くの歴史的遺産を受け継いできました。一方、商都大阪に隣接する関係などから、早くから大阪北郊のベッドタウンとしての開発が進められてきた結果、すみやかに埋蔵文化財の保護に取り組む必要がありました。しかし、近年では開発の勢いが落ち着いてきたものの、土地利用の形態が変化してきたことを受けて小規模開発が急増し、住宅の老朽化に伴う建て替えも依然として多く、埋蔵文化財保護について迅速な対応が求められています。

本書は郷土の文化財としての埋蔵文化財の重要性をふまえ、国ならびに大阪府の補助を受けて実施した緊急発掘調査の概要報告です。本書は、平成18年度に調査を実施した本町遺跡、金寺山廃寺、岡町遺跡、岡町北遺跡、岡町南遺跡、原田遺跡、および各遺跡における確認調査に加え、平成17年度後期に調査を実施した内田遺跡、および各遺跡における確認調査の成果も合わせて掲載しました。原田遺跡では原田城南城にともなう外堀を確認し、岡町南遺跡では古墳周濠や古代集落の一部が確認され、内田遺跡では新たに中世段階の遺構が確認されるなど、各遺跡で新たな知見が得られました。

永きにわたって受け継がれてきた貴重な歴史的遺産は、わたしたち現代に暮らす人間にとっても大切な知識をもたらしてくれます。本書が、郷土豊中の豊かな未来づくりに役立つことを願ってやみません。

調査の実施にあたっては、土地所有者、工事関係者、近隣の住民の皆様に、深いご理解と多大なご協力を賜りました。また文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が推進できましたことを、ここに厚く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げる次第です。

平成19年（2007年）3月31日

豊中市教育委員会
教育長　山元行博

例　　言

1．本書は、平成18年度国庫補助事業（総額7,000,000円、国庫50％、市費50％）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。また、平成17年度国庫補助事業として実施した内田遺跡第８次調査の成果を併せて収録するものである。

2．平成18年度事業として、平成18年４月４日から平成19年３月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。

3．発掘調査は、本市教育委員会地域教育振興課文化財保護係が実施した。

4．本書の作成にあたり、各章の執筆は各調査担当者が実施した。また、第Ｘ章は各調査担当者の見解をもとに、浅田が執筆した。
　なお、全体の編集を陣内が行なった。

5．各挿図に掲載した方位表記のうち、M.N.は磁北、Ｎは真北を、また表記のないものは、略北を示す。

6．挿図・本文中の土色表記の基準は、『新版標準土色帖 1994年版』に基づく。

7．挿図に掲載した出土遺物の縮尺は原則として１：４とする。

8．各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財の保護に対して深いご理解とご協力をいただいた。併せてここに明記し、深謝いたします。

平成17年度（平成17年10月以降）発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
内田遺跡	第８次	柴原３丁目107－１	294m²	服部聡志	2005年10月19日～11月30日

平成18年度発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
本町遺跡	第33次	本町３丁目105－14	16m²	陣内高志	2006年６月８日～６月23日
金寺山廃寺	第５次	本町８丁目112	10m²	陣内高志	2006年８月３日～８月７日
岡町遺跡	第２次	中桜塚２丁目282－１	55m²	陣内高志	2006年７月３日～７月31日
岡町北遺跡	第６次	岡町北２丁目８	64m²	橘田正徳	2006年５月15日～５月31日
岡町南遺跡	第３次	岡町南１丁目88－１	81m²	橘田正徳	2006年６月19日～７月12日
岡町南遺跡	第４次	岡町南２丁目1－28 1－29の各一部	65m²	陣内高志	2006年８月18日～８月31日
原田遺跡	第８次	原田元町２丁目184,186の一部	75.5m²	陣内高志	2006年４月４日～５月16日

目　次

第Ⅰ章　位置と環境　（陣内）
1．地理的環境 …… 1
2．歴史的環境 …… 1
第Ⅱ章　内田遺跡第８次調査　（服部）
1．調査の経緯 …… 5
2．調査地点の位置と環境 …… 6
3．調査の成果
（1）基本層序 …… 7
（2）検出した遺構と遺物 …… 7
4．まとめ …… 29
第Ⅲ章　本町遺跡第33次調査　（陣内）
1．調査の経緯 …… 31
2．調査の概要
（1）基本層序 …… 31
（2）検出した遺構 …… 32
（3）出土遺物 …… 33
3．まとめ …… 34
第Ⅳ章　金寺山廃寺第５次調査　（陣内）
1．調査の経緯 …… 35
2．調査の概要
（1）遺跡の概要 …… 37
（2）基本層序 …… 37
（3）検出した遺構と遺物 …… 37
3．まとめ …… 38
第Ⅴ章　岡町遺跡第２次調査　（陣内）
1．調査の経緯 …… 39
2．調査の概要
（1）基本層序 …… 40
（2）検出した遺構と遺物 …… 41
3．まとめ …… 42
第Ⅵ章　岡町北遺跡第６次調査　（橘田）
1．調査の経緯 …… 43
2．調査の概要
（1）基本層序 …… 44
（2）検出した遺構と遺物 …… 45
3．まとめ …… 45
第Ⅶ章　岡町南遺跡第３次調査　（橘田）
1．調査の経緯 …… 47
2．調査の概要
（1）基本層序 …… 48
（2）検出した遺構と遺物 …… 49
3．まとめ …… 54
第Ⅷ章　岡町南遺跡第４次調査　（陣内）
1．調査の経緯 …… 55

2．調査の概要
（1）基本層序 ……55
（2）検出した遺構と遺物 ……56
3．まとめ ……59
第Ⅸ章　原田遺跡第８次調査　（陣内）
1．調査の経緯 ……61
2．調査の概要
（1）基本層序 ……63
（2）検出した遺構と遺物 ……63
3．まとめ ……67
第Ⅹ章　確認調査の成果　（浅田）
確認調査の概要……69

挿　図　・　表　目　次

（第Ⅰ章　位置と環境）
第１図　市内遺跡分布図 ……2
第２図　調査地点と周辺の地形 ……4
（第Ⅱ章　内田遺跡第８次調査）
第３図　調査範囲図（1：400） ……5
第４図　調査地位置図（1：5,000） ……5
第５図　周辺地形と既調査地点（1：10,000） ……6
第６図　調査区平面・土層断面図（1：100） ……8
第７図　堀　土層断面図（1：30） ……9
第８図　溝１、２、堀　出土遺物（1：4） ……10
第９図　石仏配置図（1：30） ……11
第10図　溝１南端部及び礫敷遺構平面・断面図（1：20） ……12
第11図　石仏実測図（１）（1：8） ……13・14
第12図　石仏実測図（２）（1：8） ……15・16
第13図　礫敷遺構他　出土遺物（1：4） ……19
第14図　土坑１平面・断面図（1：30） ……20
第15図　土坑１出土遺物（1：4） ……21
第16図　土坑３、４平面・断面図（1：60） ……22
第17図　土坑４～７出土遺物（1：4） ……23
第18図　土坑７平面・立面図（1：30） ……23
第19図　土坑８、９平面・断面図（1：30） ……24
第20図　井戸１平面・断面図（1：20） ……26
第21図　井戸１出土遺物図（1：4） ……26
第22図　井戸３平面・断面図（1：30） ……27
第23図　柱穴・ピット出土遺物（1：4） ……28
（第Ⅲ章　本町遺跡第33次調査）
第24図　調査範囲図（1：200） ……31
第25図　調査地位置図（1：5,000） ……31
第26図　調査区平面・断面図（1：40） ……32
第27図　出土遺物（1：4） ……33
（第Ⅳ章　金寺山廃寺第５次）
第28図　調査範囲図（1：250） ……35

第29図　調査地位置図（1：5,000）……35
第30図　調査区平面・断面図（1：40）……36
第31図　出土遺物（1：4）……38
（第Ⅴ章　岡町遺跡第２次調査）
第32図　調査範囲図（1：200）……39
第33図　調査地位置図（1：5,000）……39
第34図　調査区平面・断面図（1：60）……40
第35図　沼状地形断面図（1：30）……41
第36図　出土遺物（1：4）……42
（第Ⅵ章　岡町北遺跡第６次調査）
第37図　調査範囲図（1：300）……43
第38図　調査地位置図（1：5,000）……43
第39図　調査区平面・断面図（1：80）……44
（第Ⅶ章　岡町南遺跡第３次調査）
第40図　調査範囲図（1：200）……47
第41図　調査地位置図（1：5,000）……47
第42図　調査区平面・断面図（1：80）……48
第43図　柱穴出土遺物（1：3）……49
第44図　建物１平面図（1：40）……50
第45図　建物２・３平面図（1：40）……50
第46図　建物４平面図（1：40）……51
第47図　土坑１平面・断面図（1：40）……52
第48図　土坑１出土遺物（1：3　※10は1：2）……53
（第Ⅷ章　岡町南遺跡第４次調査）
第49図　調査範囲図（1：200）……55
第50図　調査地位置図（1：5,000）……55
第51図　調査区平面・断面図（1：60）……56
第52図　出土遺物（1：4　※5は1：2）……58
第53図　桜塚古墳群の分布（1：10,000）……59
（第Ⅸ章　原田遺跡第８次調査）
第54図　調査範囲図（1：200）……61
第55図　調査地位置図（1：5,000）……61
第56図　調査区平面・断面図……62
第57図　溝１出土遺物（1：4）……63
第58図　堀平面図（1：40）……64
第59図　堀出土遺物（1：4　※1～3は1：3）……66
第60図　土坑１出土遺物（1：4）……66
第61図　原田城南城復元図（1：2,500）……67
（第Ⅹ章　確認調査の成果）
第１表　確認調査一覧表……69
第62図　確認調査地点位置図……70
第63図　トレンチ掘削状況……71
第64図　トレンチ断面図……71
第65図　トレンチ掘削状況……71
第66図　トレンチ断面図……71
第67図　トレンチ掘削状況……71

第68図　トレンチ断面図 ……71
第69図　トレンチ掘削状況 ……71
第70図　トレンチ平面・断面図 ……71
第71図　トレンチ掘削状況 ……72
第72図　トレンチ断面図 ……72
第73図　トレンチ掘削状況 ……72
第74図　トレンチ断面図 ……72
第75図　トレンチ掘削状況 ……72
第76図　トレンチ断面図 ……72
第77図　トレンチ掘削状況 ……72
第78図　トレンチ断面図 ……72
第79図　トレンチ掘削状況 ……73
第80図　トレンチ断面図 ……73
第81図　トレンチ掘削状況 ……73
第82図　トレンチ断面図 ……73
第83図　トレンチ掘削状況 ……73
第84図　トレンチ断面図 ……73
第85図　トレンチ掘削状況 ……73
第86図　トレンチ平面・断面図 ……73
第87図　トレンチ掘削状況 ……74
第88図　トレンチ断面図 ……74
第89図　トレンチ掘削状況 ……74
第90図　トレンチ断面図 ……74
第91図　トレンチ掘削状況 ……74
第92図　トレンチ断面図 ……74
第93図　トレンチ掘削状況 ……74
第94図　トレンチ平面・断面図 ……74
第95図　トレンチ掘削状況 ……75
第96図　トレンチ断面図 ……75
第97図　トレンチ掘削状況 ……75
第98図　トレンチ断面図 ……75
第99図　トレンチ掘削状況 ……75
第100図　トレンチ平面・断面図 ……75
第101図　トレンチ掘削状況 ……75
第102図　トレンチ断面図 ……75
第103図　トレンチ掘削状況 ……76
第104図　トレンチ断面図 ……76
第105図　トレンチ掘削状況 ……76
第106図　トレンチ断面図 ……76
第107図　トレンチ掘削状況 ……76
第108図　トレンチ断面図 ……76
第109図　トレンチ掘削状況 ……76
第110図　トレンチ断面図 ……76
第111図　トレンチ掘削状況 ……77
第112図　トレンチ断面図 ……77
第113図　トレンチ掘削状況 ……77

第114図　トレンチ断面図 …… 77
第115図　トレンチ掘削状況 …… 77
第116図　トレンチ断面図 …… 77
第117図　トレンチ掘削状況 …… 77
第118図　トレンチ断面図 …… 77
第119図　トレンチ掘削状況 …… 78
第120図　トレンチ断面図 …… 78
第121図　トレンチ掘削状況 …… 78
第122図　トレンチ断面図 …… 78
第123図　トレンチ掘削状況 …… 78
第124図　トレンチ断面図 …… 78
第125図　トレンチ位置図 …… 78
第126図　トレンチ断面図 …… 78
第127図　トレンチ掘削状況 …… 79
第128図　トレンチ平面・断面図 …… 79
第129図　トレンチ掘削状況 …… 79
第130図　トレンチ断面図 …… 79
第131図　トレンチ掘削状況 …… 79
第132図　トレンチ断面図 …… 79
第133図　トレンチ掘削状況 …… 79
第134図　トレンチ断面図 …… 79
第135図　トレンチ掘削状況 …… 80
第136図　トレンチ平面・断面図 …… 80
第137図　トレンチ掘削状況 …… 80
第138図　トレンチ平面・断面図 …… 80
第139図　トレンチ掘削状況 …… 80
第140図　トレンチ断面図 …… 80

図　版　目　次

図版１　内田遺跡第８次調査
（１）遺構検出状況（北区）
（２）遺構完掘状況（北区）
図版２　内田遺跡第８次調査
（１）遺構検出状況（南区）
（２）遺構完掘状況（南区）
図版３　内田遺跡第８次調査
（１）堀（西から）
（２）堀　東断面
（３）堀　西断面
図版４　内田遺跡第８次調査
（１）溝１と礫敷遺構（北から）
（２）溝１　石蓋の状況（東から）
図版５　内田遺跡第８次調査
（１）溝１　石蓋北端部の被覆粘土の状況（西から）
（２）溝１土層断面（東から）
図版６　内田遺跡第８次調査
（１）土坑１、溝１、溝２、土坑６（北から）
（２）土坑１土層断面（北西から）
図版７　内田遺跡第８次調査
（１）土坑４（北から）
（２）土坑４土層断面（東から）
図版８　内田遺跡第８次調査
（１）土坑７（南東から）
（２）井戸１（南から）
図版９　内田遺跡第８次調査　出土遺物

（1）溝1・2、堀出土遺物（第8図）
図版10　内田遺跡第8次調査　出土遺物
（1）溝1出土石仏（第11図）
図版11　内田遺跡第8次調査　出土遺物
（1）溝1出土石仏（第12図）
（2）礫敷遺構出土遺物（第13図）
図版12　内田遺跡第8次調査　出土遺物
（1）土坑1出土遺物（第15図）
（2）土坑4～7出土遺物（第17図）
図版13　内田遺跡第8次調査　出土遺物
（1）井戸1出土遺物（第21図）
図版14　内田遺跡第8次調査　出土遺物
（1）柱穴、ピット出土遺物（第23図）
（2）その他出土遺物（第13図）
図版15　本町第33次調査
（1）調査区全景（北から）
（2）土坑1断面（南から）
図版16　金寺山廃寺第5次調査
（1）調査区全景（南東から）
（2）出土瓦
図版17　岡町遺跡第2次調査
（1）調査区西半部（南から）
（2）調査区西半部
溝、ピット掘削状況（東から）
図版18　岡町遺跡第2次調査　出土遺物
（1）調査区東半部 沼状地形（南から）
（2）出土遺物
図版19　岡町北遺跡第6次調査
（1）調査区全景（西から）
（2）ＳＰ1断面
図版20　岡町南遺跡第3次調査
（1）1区全景
（2）2区全景
図版21　岡町南遺跡第4次調査
（1）調査区全景（南から）
（2）古墳周濠全景（東から）
図版22　岡町南遺跡第4次調査　出土遺物
（1）円筒埴輪・朝顔形埴輪
（古墳周濠出土）
（2）紡錘車（古墳周濠出土）
図版23　原田遺跡第8次調査
（1）調査区東半部（北から）
（2）溝1検出状況（北から）
図版24　原田遺跡第8次調査
（1）調査区西半部
（堀検出状況・北から）
（2）調査区西半部
（堀検出状況・西から）
図版25　原田遺跡第8次調査
（1）堀南壁断面（北から・分層前）
（2）堀南壁断面（北から・分層後）
図版26　原田遺跡第8次調査　出土遺物
（1）溝1出土遺物
（2）堀出土遺物

第Ⅰ章　位置と環境

1．地理的環境

大阪市北郊に所在の豊中市は、西は猪名川を介して兵庫県と接しており、旧国名では摂津国に属する。近世以前は大都市近郊の農村であったが、明治43年の箕面有馬電気軌道（現在の阪急電鉄宝塚線）開通を契機に宅地化が進み、現在では面積約38km²の市域中に約40万人もの人口を擁する北摂有数の住宅都市にまで発展している。こうした発展に至った背景としては名神高速道路や阪神高速道路などの幹線道路や大阪空港など陸空の交通における利便性の高さが考えられる。

一方地形に目を転じると、豊中市は北から南に向かって標高が低くなる特徴を有しており、島熊山付近の最高地点（海抜約100m）から最も低い大島町付近（海抜１m以下）にかけておよそ100mの比高差を有する。具体的には市北部は千里丘陵と刀根山丘陵と呼ばれる２つの丘陵地、続いて中部は主に千里丘陵から派生する中・低位段丘を中心とした豊中台地、南部は猪名川水系、天竺川、高川の沖積作用によって形成された平野部といった、三区分が可能である。

今回報告する８件の調査のなかで、第Ⅱ章で報告する内田遺跡は市北部の刀根山丘陵の一角、千里川右岸に形成された河岸段丘（低位段丘）上に立地し、他の７件（６遺跡）は豊中台地上、千里川左岸に形成された河岸段丘（最低位～中位段丘）上に立地する。

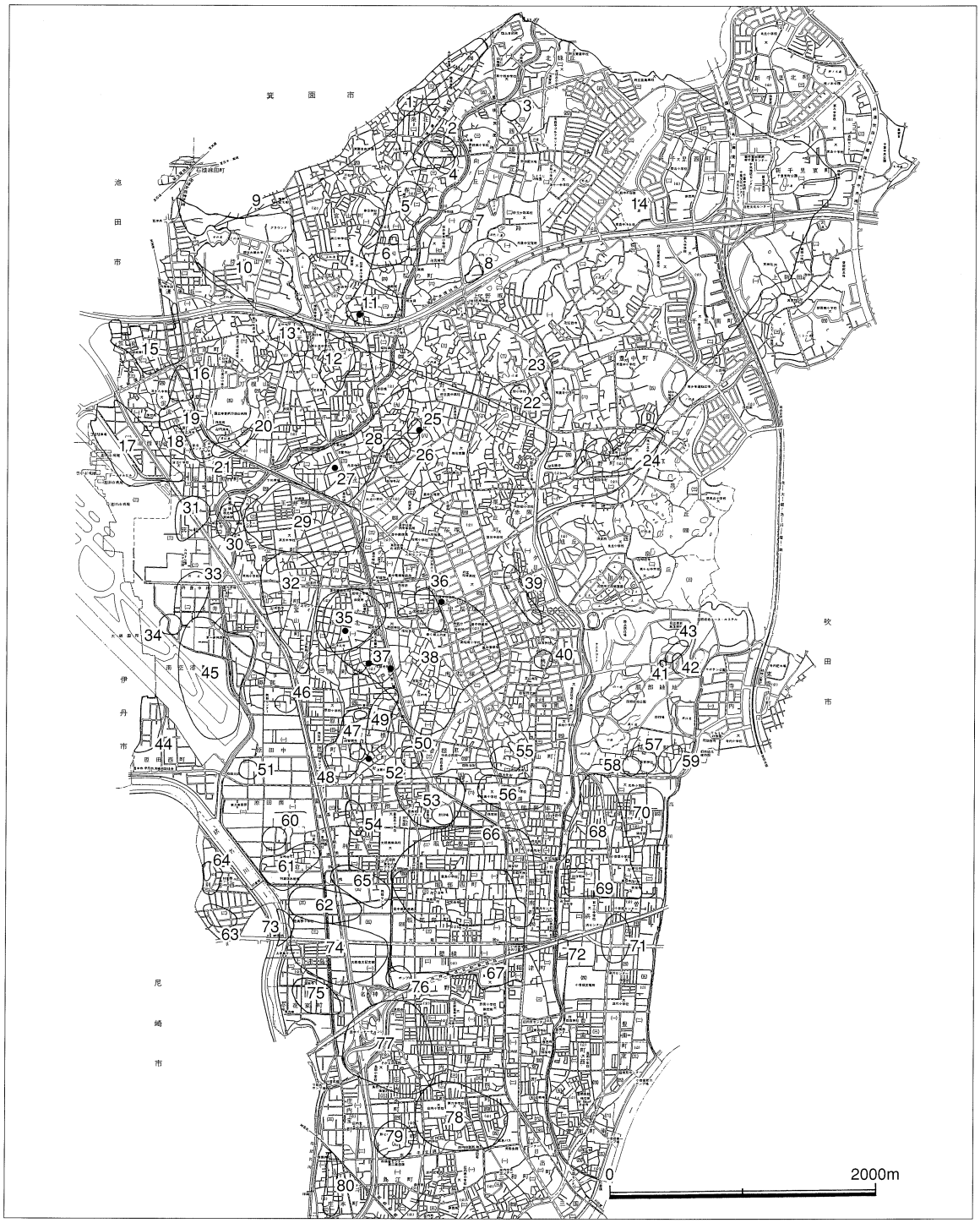
2．歴史的環境

ここでは今回報告する遺跡の時期・動向に限定して、集落の動向を中心に述べていく。

内田遺跡　千里川上流域の丘陵地帯では縄文時代の遺構または遺物が確認されており、野畑遺跡（中～後期）、野畑春日町遺跡（中～晩期）、内田遺跡（後期）、柴原遺跡（晩期）などでは縄文集落が存在した可能性が考えられる。その後の内田遺跡では、古墳後期後半に桜井谷窯跡群の須恵器工人集落が突如あらわれ、７世紀初頭、ちょうど桜井谷窯跡群の衰退に同調するかのようにして廃絶していく姿も明らかになってきた。奈良時代以降の遺跡の実態は不明な点が多かったが、従来の河岸段丘端部付近とは異なる今回の調査地（第Ⅱ章）では、新たに中世段階の遺構が確認されている。

本町遺跡・金寺山廃寺　豊中市域における弥生集落は弥生中期以降次第に低地から台地上に進出することとなり、千里川流域では新免遺跡がその好例として挙げられる。新免遺跡は弥生中期段階で居住域・墓域を有する拠点集落としての性格を有する。一方新免遺跡と東接する本町遺跡も弥生中期段階が集落の初現とみられるが、新免集落からの分村程度とみられその格差は歴然としている。本町遺跡が本格的な盛期を迎えるのは古墳後期以降である。その背景として柴原遺跡、新免遺跡等とともに、千里川上流域一帯に展開した桜井谷窯跡群で生産された須

2．歴史的環境



1.太鼓塚古墳群
2.野畑春日町古墳群
3.野畑遺跡
4.野畑春日町遺跡
5.少路遺跡
6.武蔵国岡部藩安部氏桜井谷陣屋跡
7.桜井谷石器散布地
8.羽鷹下池南遺跡
9.待兼山古墳
10.待兼山遺跡
11.内田遺跡
12.柴原遺跡
13.北刀根山遺跡
14.桜井谷窯跡群
15.蛍池北（宮の前）遺跡
16.蛍池東遺跡
17.蛍池西遺跡
18.蛍池遺跡
19.麻田藩陣屋跡
20.南刀根山遺跡
21.御神山古墳
22.上野遺跡
23.青池古墳
24.熊野田遺跡
25.金寺山廃寺
26.新免宮山古墳群
27.金寺山廃寺塔利柱礎石
28.本町遺跡
29.新免遺跡
30.箕輪東遺跡
31.箕輪遺跡
32.山ノ上遺跡
33.勝部北遺跡
34.走井遺跡
35.岡町北遺跡
36.岡町遺跡
37.岡町南遺跡
38.桜塚古墳群
39.下原窯跡群
40.長興寺遺跡
41.梅塚古墳
42.埴輪散布地
43.大坂城鉄砲奉行支配焔硝蔵跡
44.原田西遺跡
45.勝部遺跡
46.勝部東遺跡
47.原田城跡（北城）原田城跡（南城）
48.原田遺跡
49.曽根遺跡
50.曽根東遺跡
51.原田中町遺跡
52.曽根埴輪窯跡
53.豊島北遺跡
54.曽根南遺跡
55.城山遺跡
56.服部遺跡
57.若竹町遺跡
58.石蓮寺廃寺
59.寺内遺跡
60.利倉北遺跡
61.利倉遺跡
62.利倉南遺跡
63.利倉西遺跡
64.椎堂の前遺跡
65.服部西遺跡
66.穂積遺跡
67.穂積村囲堤
68.小曽根遺跡
69.春日大社南郷目代今西氏屋敷
70.北条遺跡
71.小曽根南遺跡
72.上総国飯野藩保科氏浜陣屋跡
73.上津島川床遺跡
74.上津島遺跡
75.上津島南遺跡
76.穂積ポンプ場遺跡
77.島田遺跡
78.庄内遺跡
79.島江遺跡
80.庄本遺跡

第１図　市内遺跡分布図

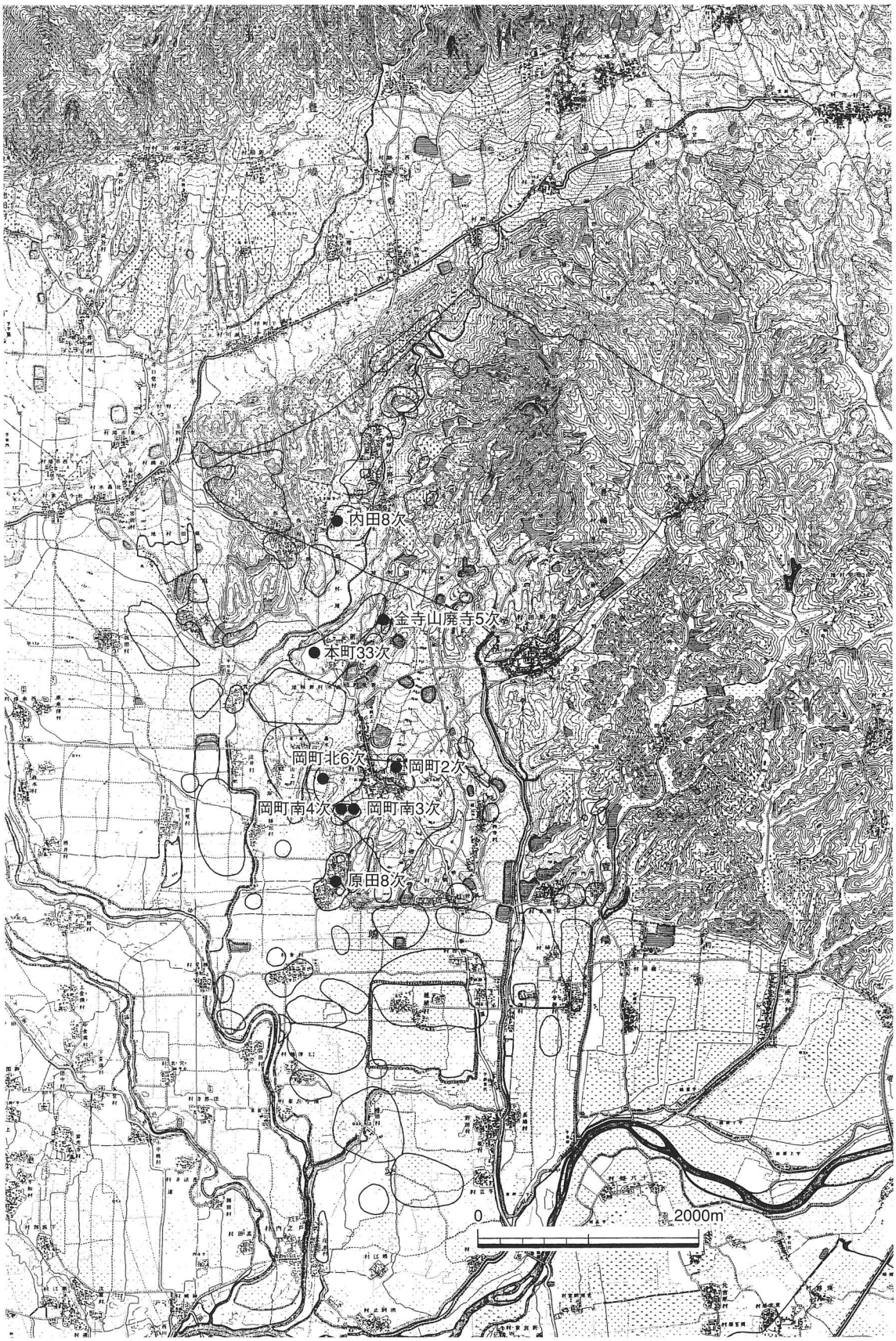
恵器の選別作業に関与した集落であったことが考えられる。飛鳥時代の本町遺跡は、大形建物や瓦など一般の集落とは性格を異にする遺構・遺物が検出されており、有力者層の居宅・寺院等の所在が推察される。さらに本町遺跡東方に存在が伝えられる白鳳寺院金寺山廃寺も本町遺跡と密接な関わりをもっていた可能性がある。本町遺跡は山田寺式軒丸瓦の出土で知られる金寺山廃寺に関連する施設が存在したことも考えられる。

岡町遺跡・岡町北遺跡・岡町南遺跡　弥生中期以降、低地の拠点集落（勝部遺跡、小曽根遺跡）では分村化が進み、新たなムラは次第に丘陵上に進出するようになる。近年の岡町北遺跡の調査からは分村化したムラの一端をうかがい知ることができよう。

古墳時代前期後半、豊中台地に突如出現する大石塚古墳、それに続く小石塚古墳は桜塚古墳群の開始を告げるものであった。同古墳群は少なくとも40～50基の古墳が存在したとみられるが、今では５基が現存するのみである。近年、桜塚古墳群内では南部を中心に新たな古墳発見例が相次いでおり、桜塚古墳群と範囲を共有している岡町南遺跡では中期古墳とともに古墳後期集落も確認されており、桜塚古墳群衰退後間もなくして集落の発生が確認される。古墳時代以降、古代～中世にかけての集落の動態は判然としないが、近年、岡町北遺跡、岡町南遺跡において奈良～平安頃の集落の一部が確認されており、盛衰はあるものの豊中台地上における集落の営みが明らかになりつつある。

大坂と西国街道を結ぶ能勢街道や伊丹に通じる伊丹街道、桜塚街道が結節する近世岡町は原田神社を中心として大きく発展を遂げたことが知られているが、近年の岡町遺跡の調査によって近世岡町に先行する中世集落（鎌倉～戦国時代）の存在が明らかになってきた。近世以前、当地に善行寺と呼ばれる寺院の存在が史料からうかがえ、今後の調査では、中世岡町集落の範囲や存続時期、善行寺との関係などについての究明が期待される。

原田遺跡　段丘の末端に立地する原田遺跡は、弥生中期または後期が集落の初現とみられ、後期末頃で一旦衰退するようである。文献によるとその後11世紀末になって原田郷に関する記事が登場し、15世紀後半には原田氏の居館としての原田城が成立していたことがうかがえる。原田城には北城、南城が存在し、近年の発掘調査によって北城の成立は15世紀代、南城のそれは16世紀代、一方廃絶はいずれも16世紀末～17世紀初頭頃とみられている。さらに北城では一部で土塁の痕跡が確認されるなど、徐々にではあるが築城当時の姿が明らかになりつつある。今回報告する調査地は南城堀割りの範囲内に位置することから、南城の成立～廃絶に関わる知見が得られるものと期待された。

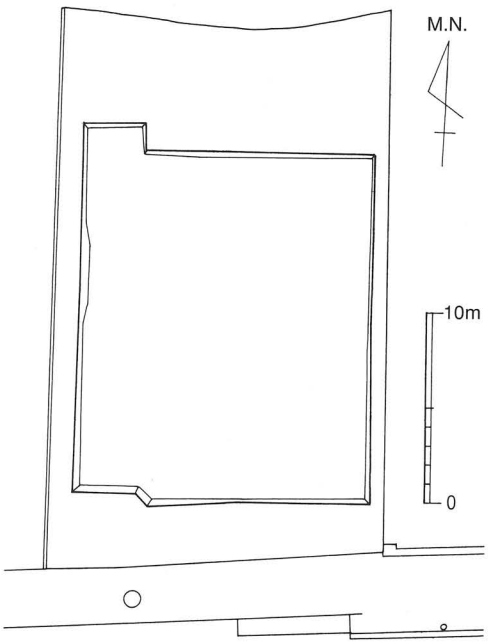


第２図　調査地点と周辺の地形

第Ⅱ章　内田遺跡第８次調査

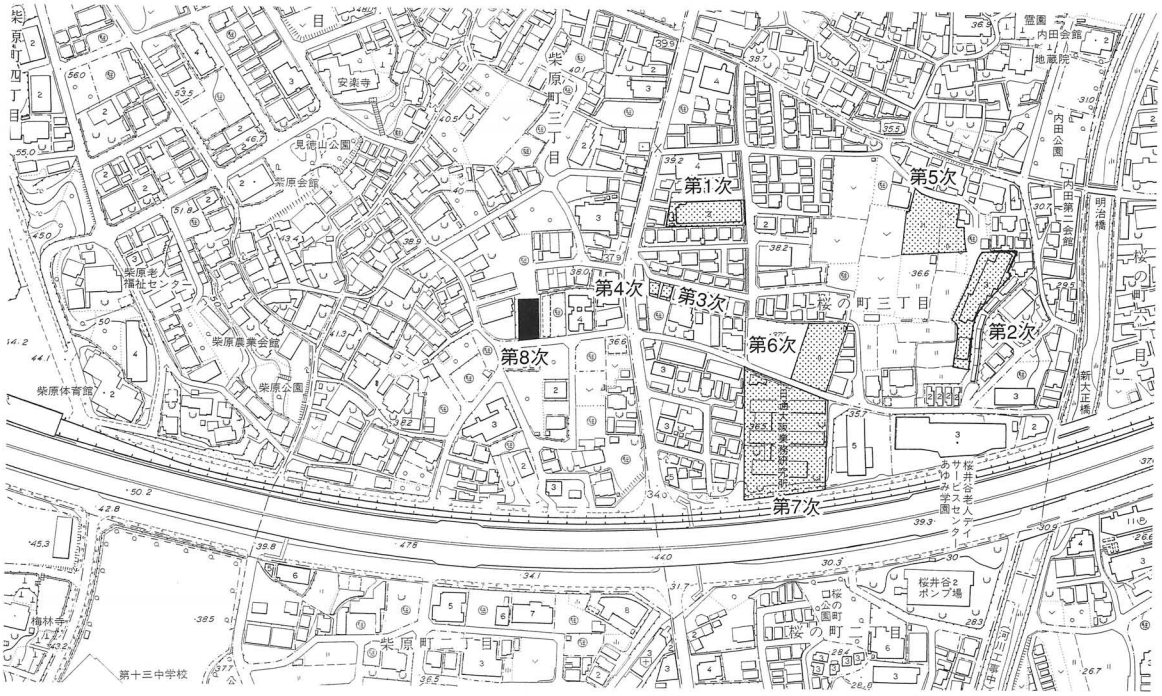
１．調査の経緯

平成17年（2005年）８月12日、豊中市柴原町３丁目107－１における共同住宅建設に伴う発掘届が提出された。それを受けて同年９月27日に遺跡の存否を確認するための確認調査を実施した。３ヶ所のトレンチ調査の結果、中央部のトレンチからは柱穴ならびに溝か土坑と見られる遺構が、南側トレンチからは土坑とおぼしき埋土が確認された。計画される建物の基礎は、現地表から約１ｍのベタ基礎が予定されていることから、遺構が損壊を受けることは明らかであり、事前の発掘調査が必要と判断された。この結果をもとに、施主側と協議を行った結果、平成17年（2005年）10月19日から11月30日まで、43日間の調査期間を得て、基礎掘削範囲を対象とした発掘調査を実施する運びとなった。



第３図　調査範囲図（１：400）

敷地面積515m²のうち、基礎工事に伴う発掘対象面積は294m²とした。調査区の全面を一度に

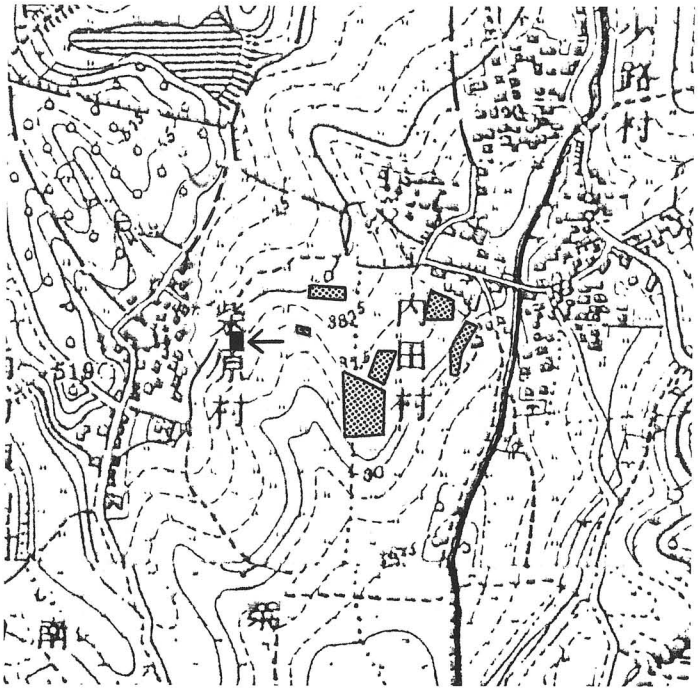


第４図　調査地位置図（１：5,000）

調査をするには排土置き場の確保が困難なため、調査区を北区と南区に分割し、北区の調査完了後に南区の調査にかかるものとした。

2．調査地点の位置と環境

千里川中流域の、いわゆる桜井谷に向かって張り出す段丘は、開析谷に挟まれながらいくつかの尾根地形となって千里川の両岸に連続している。内田遺跡はそのような段丘地形のひとつに立地し、柴原村集落と内田村集落のほぼ中間、東西200m、南北250mの台形状を呈する幅広い尾根地形全域を占めている。また遺跡の範囲は、尾根南西を限る開析谷を越えて、さらに南側の尾根にかかる付け根とも言える位置をも含んでおり、今回の調査地点はちょうどその付近、遺跡としては最も西端に位置する（第５図）。



第５図　周辺地形と既調査地点（１：10,000）
（アミは１～７次調査、矢印は今次調査）

これまでに内田遺跡で行なわれた７次にわたる調査は、いずれも遺跡を南北に縦断する府道箕面豊岡線の東方で行われたものである。府道は、上に述べた開析谷に沿って縦走していることから、過去７次の調査はいずれも上に記した段丘尾根の範囲内で実施されたものであることがわかる。したがって今回の調査は、同じ遺跡内ではあるが、これまでの調査地点とは異なる地形条件のもとで行なう初めての調査ということになる。

過去７次の調査では、縄文時代後期、弥生時代後期、古墳時代後期～飛鳥時代の各時代の遺構が検出されている。縄文時代については、上の段丘末端付近、すなわち千里川を見下ろす段丘崖の直上付近において、土器を伴う土坑数基が見つかっているに過ぎず、さほど大きな集落は想定できない。弥生時代についても、これまでにまとまった遺構は検出されていない。特筆されるのは古墳時代後期～飛鳥時代（６世紀後半～７世紀初頭）の集落であり、掘立柱建物と竪穴住居から構成される千里川中流域としてはおそらく最大規模の集落であると目され、新免、本町遺跡（５世紀末～６世紀後半）に次いで桜井谷窯跡群における窯業生産に直接関与した集落であった可能性が高い。今回の調査では、飛鳥時代以前の明確な遺構は皆無であり、あらたに中世後期を主体とする遺構、遺物を検出したことから、同一遺跡のエリア内ではあるが、各時代において遺跡の立地や性格を異にしていたことが判明したといえる。

３．調査の成果

（１）基本層序

当調査地点は、木造２階建てアパートの基礎解体の際に大きな撹乱を受けていたため、本来の層序は部分的に残存するに過ぎない。とくに調査区の西辺と東辺では、南北方向の撹乱が遺構面にまで達しており、図示できるほどの層序は存在しなかった。比較的残りのよい北区南端（調査区南北の中央ライン）の断面で基本層序を見ると、現地表から10cmの深さで厚さ約20cmの耕作土層があり、その下に厚さ５cm程度の床土、さらにその下には中世後期の遺構廃絶後の耕作土層と見られるにぶい黄色シルトが遺構面全体を覆っていたと見られる。この中世耕作土層を除去した後の段丘層上面には、南北方向に走る幅約20cmの鋤溝が多く検出されたことから、中世後期遺構の廃絶後、間もなく当地点は耕作地に変化したものと推定される。

（２）検出した遺構と遺物

今回検出した遺構の大半は、共伴する出土遺物から14世紀～16世紀の、いわゆる中世後期に属するものである。ただし数は少ないが、弥生時代後期と見られるピットの他、古墳時代後期の須恵器や須恵質陶棺などが散見される点から、主として東方に展開する当該期集落の一部が当調査地点周辺にまで広がりをもっていたことは明らかである。

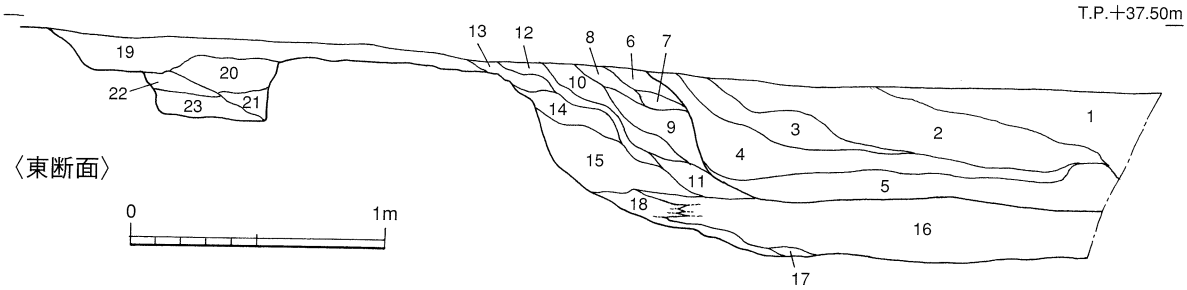
中世後期に属する遺構として、堀、溝、土坑、井戸、柱穴などがある。以下、主な遺構と遺物について取り上げる。

堀　調査区の南端付近に東西に掘り込まれたもので、検出長約15m、幅約３m（推定）、深さ0.9mを計る。調査当初、東西に走る水路かとも推測されたが、調査区東端において途切れており、他の遺構の状況を勘案して堀跡と判断した。南側の肩部は検出していないが、東端部の下端の形状から大きく南にはずれるとは考えられず、３m（10尺）程度の幅を想定した。堀の形状は東西にほぼ直線的で、肩部堀形の傾斜は部分によって異なるが、比較的急角度に掘り込まれている。底部は約1.7mの幅で平坦に掘られ、底のレベルは東西で大きな変化はない。堀形の上端は崩落による若干の形状変化が認められるが、下端のラインは掘削当初の形状をそのまま残している。とくに東端部分は明瞭なコ字状を呈し、上端の形状も本来は下端と同様にコ字状に整形されていたものと推測される。

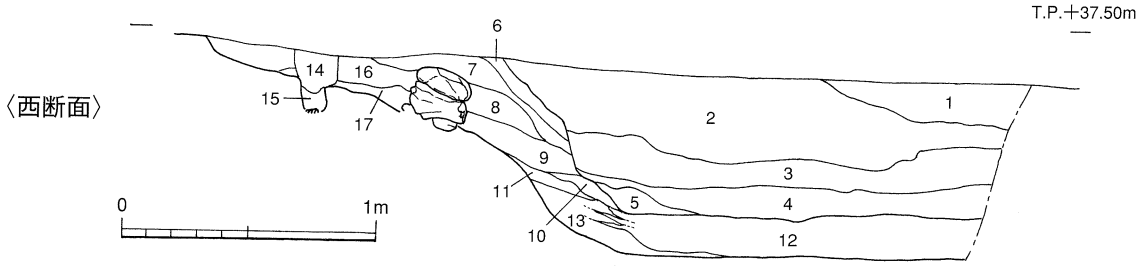
埋土についてみると（第７図）、東断面１～４と西断面１～３は地山ブロックを多量に含んだ埋め戻し土である。これらは比較的層厚が厚く、一気に埋め戻されたような状況を示す。その下の褐灰色粘土は、滞水環境を示す自然堆積層である。これら中央部分の土層は水平もしくは緩やかな傾斜であるのに対し、それより北側の肩部付近の土層は傾斜が急で層厚が薄い。両者の境界付近に微妙ではあるが上部からの切り込みラインが認められたことから、堀がある程度埋まった後に再度掘り直された可能性が高い。なお最下層である東断面16～18、西断面12、13

1．撹乱・整地土
2．灰オリーブ（7.5Y4/2）シルト
3．灰オリーブ（7.5Y4/2）礫混シルト
4．灰色（7.5Y4/1）シルト。耕作土。
5．黄褐色（10YR5/8）シルトににぶい黄橙色（10YR6/3）シルトブロックを含む
6．にぶい黄色（2.5Y6/3）シルトに地山粘土ブロックを20％含む。
7．にぶい黄色（2.5Y6/3）砂混シルトにわずかな地山粘土ブロックを含む。

第６図　調査区平面・土層断面図（１：100）



1．地山の明黄褐色（2.5Y7/6）粘土を主体に褐灰色（10YR6/1）シルトと黄褐色（10YR5/6）シルトブロックからなる混合土。
2．褐灰色（10YR6/1）シルトに黄褐色（10YR5/6）シルトと地山の明黄褐色（2.5Y7/6）粘土のブロックを多量に含む。
3．黄褐色（10YR5/6）シルトに褐灰色（10YR6/1）シルトと地山の明黄褐色（2.5Y7/6）粘土のブロックを20％含む。
4．地山の黄色～明黄褐色（2.5Y6/6～8/6）粘土に褐灰色（10YR6/1）シルトと黄褐色（10YR5/6）シルトを40％含む。１～４は埋め戻し土。
5．褐灰色（10YR5/1）粘土にマンガン粒25％を含む。滞水環境を示す泥土の自然堆積。
6．黄褐色（10YR5/6）極細粒砂。
7．黄褐色（10YR5/6）極細粒砂。小礫を微量に含む。
8．黄褐色（10YR5/6）極細粒砂
9．黄褐色（10YR5/6）極細粒砂に地山の明黄褐色（2.5Y7/6）粘土を50％含む。
10．黄褐色（10YR5/6）極細粒砂に褐灰色（10YR6/1）シルトブロックを10％含む。
11．黄褐色（10YR5/8）シルトに褐灰色（10YR6/1）極細粒砂ブロックを25％含む。
12．灰白色（10YR7/1）粘土に地山の明黄褐色（2.5Y7/6）粘土ブロックを30％含む。
13．黄橙色（10YR7/8）極細粒砂に細礫を少量含む。
14．にぶい黄褐色（10YR7/3）極細粒砂。
15．明黄褐色（10YR6/8）シルトと褐灰色（10YR6/1）の混合土。
16．褐灰色（10YR5/1）粘土にマンガン粒を30％含む。滞水環境を示す泥土の自然堆積。
17．15に褐灰色（10YR6/1）粘土が60％混じる。
18．灰黄褐色（10YR6/2）細粒砂にマンガン粒を20％含む。
19．明黄褐色（10YR6/8）シルトと褐色（10YR4/6）シルトの混合土。
20．黄褐色（10YR5/6）シルト
21．褐色シルト（10YR4/6）シルト
22．黄褐色（2.5Y5/6）シルト～極細粒砂
23．黄褐色（10YR5/6）極細粒砂に地山ブロックを15％含む。



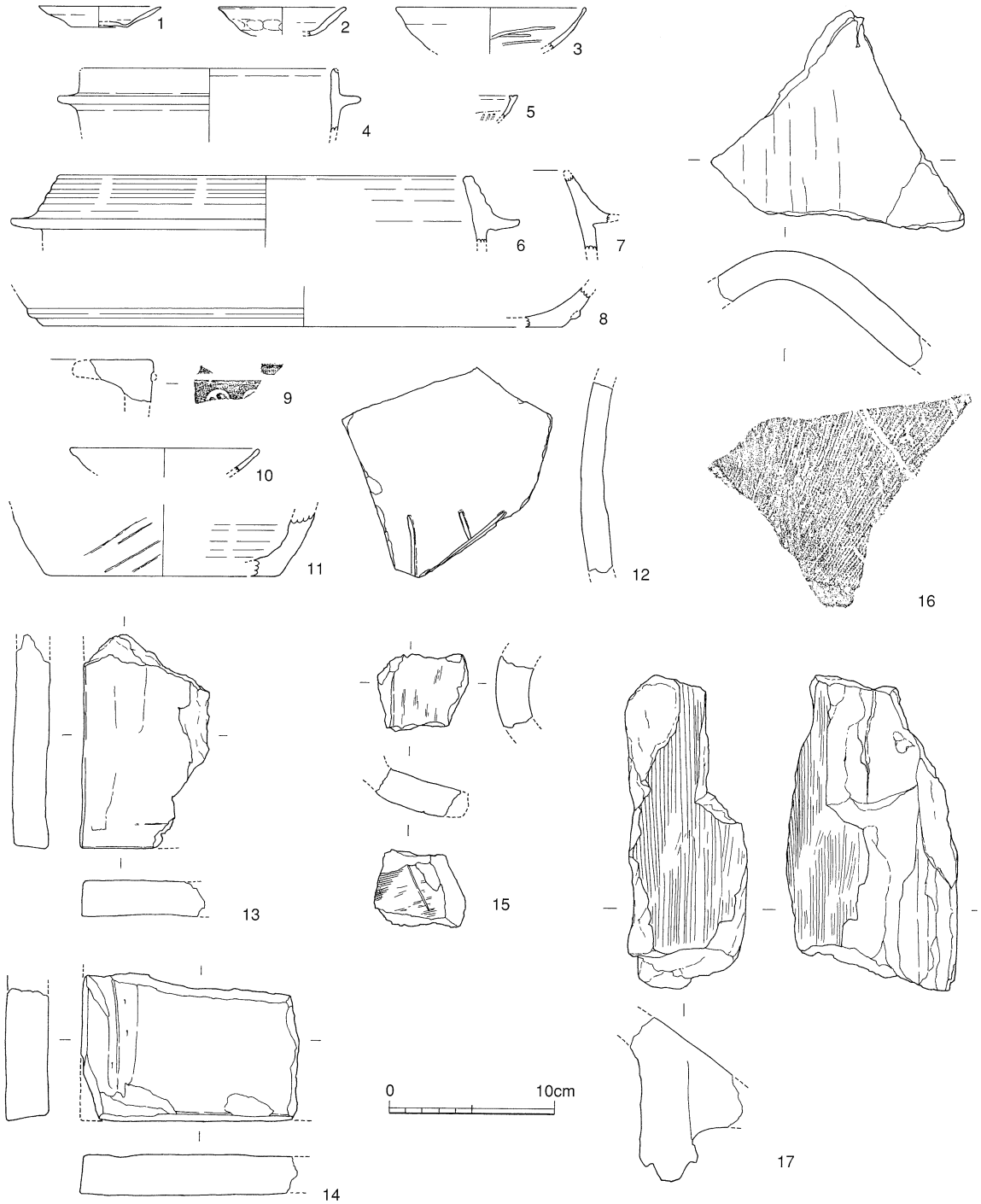
1．東断面の１に同じ
2．東断面の２に同じ
3．東断面の３に同じ
4．東断面の５に同じ
5．４に砂が混じる。
6．褐灰色（10YR6/1）シルトに黄褐色（10YR5/6）シルトを30％含む。
7．黄褐色（10YR5/8）極細粒砂に細礫を少量含む。
8．灰黄褐色（10YR6/2）シルト
9．明黄褐色（10YR6/8）極細粒砂に小礫をわずかに含む。
10．灰黄褐色（10YR6/2）細粒砂にマンガン粒を20％含む。
11．黄褐色（10YR5/8）シルトに褐灰色（10YR6/1）極細粒砂ブロックを25％含む。
12．東断面の16に同じ
13．灰黄褐色（10YR6/2）細粒砂に灰白色（2.5Y8/1）細粒砂を50％含む。
14．灰褐色（10YR6/1）極細粒砂
15．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂
16．黄褐色（10YR5/8）極細粒砂
17．灰黄褐色（10YR6/2）極細粒砂

第７図　堀　土層断面図（１：30）

は、堀底部に最初に堆積した滞水状況を示す粘土層である。

当遺構は、調査区の中で途切れること、事項で取り上げる溝１、２や礫敷遺構などとの配置関係から中世居館の南側に掘り込まれた堀の可能性が高いものである。また上部の埋め戻し土から出土した若干の遺物は、居館自体の廃絶時期を推定させる根拠になるものであるが、15～16世紀の特徴を認める以外、厳密な時期は不明である。

遺物は主に１～４の埋め戻し土から出土した（第８図）。遺構の規模に比較して、遺物量は極めて少ない。とくに自然堆積と見られる最下層から遺物が皆無であったことは、堀内環境の維持に相当な配慮がなされていたことを示すものとして興味深い。遺物はいずれも破片であり、おおむね15～16世紀代に属する。６、７は土師質の羽釜、８は風炉の底部と見られる。瓦質で



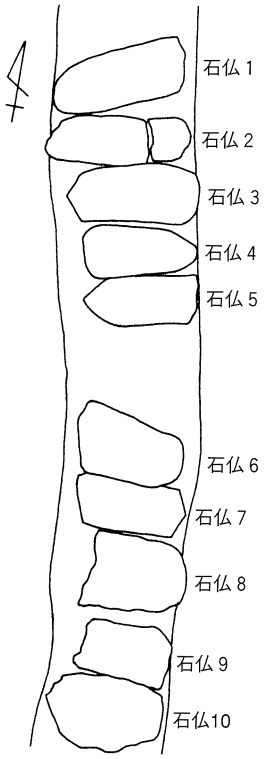
第８図　溝１、２、堀　出土遺物（１：４）

底部直上に１条の突帯を付ける。９も奈良火鉢の一種で、浅鉢Ⅵ類[注1)]に相当する。上端面からやや下に突帯の剥離した痕跡があり、突帯の下に巴文とみられるスタンプが施される。10は瓦器椀の口縁部破片である。11は備前焼の壺底部で、底部復元径約14cmを計る。12は備前甕の破片で、ヘラ描き文から体部上半から肩部付近に相当するか。13、14は塼である。13は厚さ２cm、焼成は良好で赤褐色を呈する。14は厚さ2.5cmで焼成はあまく、瓦と同様暗灰色を呈する。15は

丸瓦の玉縁の破片とみられ、厚さ２cmで凹面に布目が残る。16は雁振瓦で厚さ２cm、凸面はナデ調整、凹面に布目が残る。17は古墳時代後期の須恵質陶棺の蓋側縁付近の破片である。上面は粗いハケ調整が施され、口縁部下端は身と組み合うような形状に作られる。

溝１　調査区の東端で検出した南北に走る溝である。全体の検出長13.3mで、北端部へ行くほど浅くなり、先細りの形状から、それより北側は削平により消失したとみられる。溝の南端は堀と直角方向に取り付き、その位置は堀の東端に正確に一致する。明確な切り合いは認められず、溝１と堀は同時存在の可能性が高い。溝１の南端から約2.8mの範囲において、溝を覆うように石仏10体を含む石材が蓋石として置かれていた。石仏のうち２体は像の彫られた正面を下にして置かれ、像の頭部方位は東西のいずれもあり、必ずしも規則性は見出しがたい。蓋石上と石間には目詰めの粘土が意図的に貼られており、密閉性を高める工夫が施されていた。したがって石仏による石蓋は、表面上は見えていなかった可能性が高い。溝は幅の広い中央付近での断面観察の結果、明らかに掘り直しがなされていた。新しい溝は旧の溝より４cm程度深く掘られ、南端は溝２との合流部付近で途切れていることから、掘り直しの可能範囲はこの部分までであったと思われる。溝の幅は新しい方が25～45cm、旧の方が50cm前後を計る。深さは、新旧いずれも北側で約20cm、南側で60cmを計り、溝２合流部と堀の間で堀に向かって深さを増す。

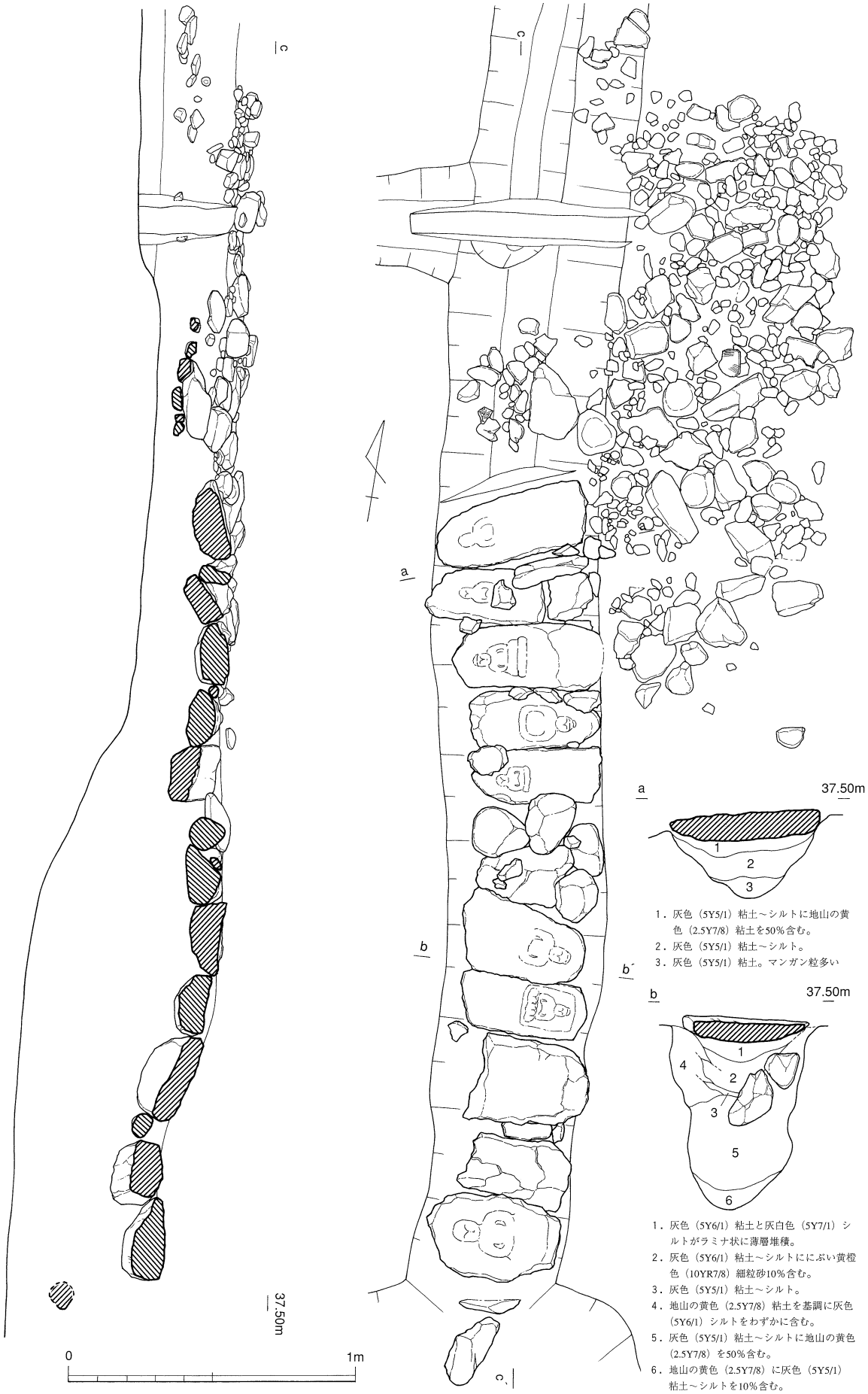
溝１の埋土を見ると、溝２との合流部より北側では２層に分かれ、新旧の溝ともに灰黄褐色粘土～シルトである。一方南側では、深度の深い石蓋下部の断面（第10図右下）によると、埋没過程は２段階に分かれる。すなわち礫敷遺構の礫が一部崩落しながら下層部４～６が堆積した後、上層部に相当する幅30cm、深さ25cmの空間が残る段階、つまり溝としての機能を維持している段階で蓋石が設置された可能性が高い。したがって、遺構の順序は、溝１の掘削、礫敷遺構、下層の堆積、蓋石設置、北側部分の掘り直し、の順序となろう。



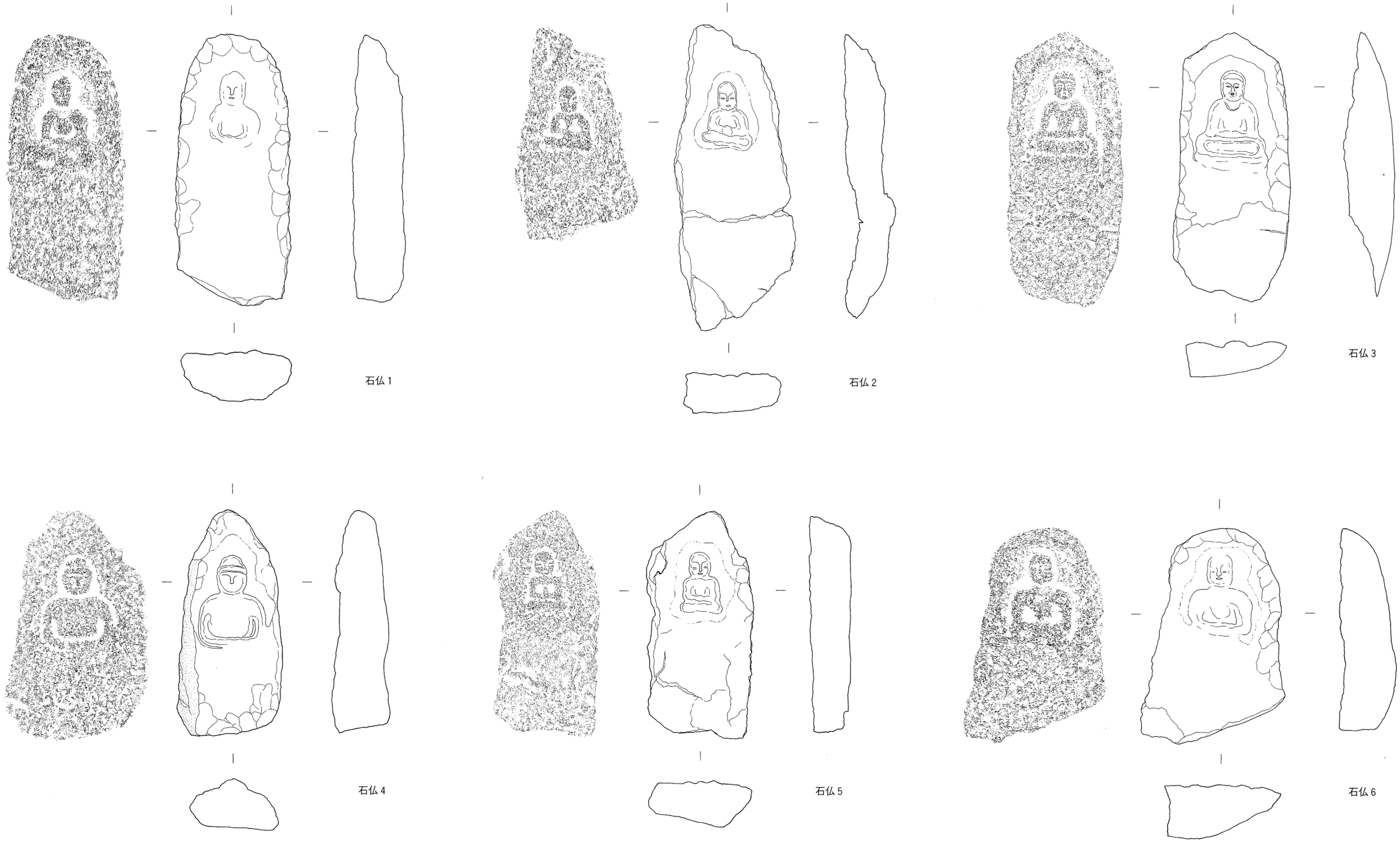
第９図　石仏配置図
（１：30）

溝１の出土遺物として、土師皿と瓦器の小片（第８図１～３）がある。１の土師皿は復元径７cm前後でヘソ皿の形状を呈し、底部より屈曲して口縁部が立ち上がる。２の土師皿は復元径８cm前後で底部にナデによるにぶい段を有する。１、２ともに淡い赤褐色を呈する。３は瓦器椀の破片で、復元径11.4cm、内外面ともに灰白色を呈し、内面に粗いヘラミガキを有する。

以上の他、溝１南端の蓋石として使用された石仏10体がある（第11、12図）。いずれも花崗岩を使用するもので、石材の色調、石質、像容、彫刻、石材加工、頭部形状など個々の特徴を観察すると数種類に分類が可能である。まず、使用石材の色調を見ると大きく２種に分かれる。一つはカリ長石が卓越し、結晶粒が大き



第10図　溝１南端部及び礫敷遺構平面・断面図（１：20）



第11図　石仏実測図（1）（1：8）

第12図　石仏実測図（２）（１：８）

番号	高さ	最大幅	最大厚	分類	彫　刻	石材加工	頭部加工	石　材
1	54.7	23.2	10.5	A2	浅い	丁寧	円頭（加工）	花崗岩（ピンク系）
2	61.9	23.7	8.3	A4	浅い	粗	尖頭状（未加工）	花崗岩（ピンク系）
3	54.6	23.1	10.2	B	深い（龕）	丁寧	圭頭（加工）	花崗岩（白色系）
4	45.5	21.1	11.5	C	深い	丁寧	尖頭（加工）	花崗岩（白色系）
5	45.2	21.2	9.4	A4	浅い	粗	尖頭状（未加工）	花崗岩（ピンク系）
6	43.4	29.3	11.1	A1	浅い	粗	円頭（未加工）	花崗岩（ピンク系）
7	43.7	21.8	12.0	B	深い（龕）	丁寧	圭頭（加工）	花崗岩（白色系）
8	44.3	33.4	7.6	A1	浅い	粗	圭頭状（未加工）	花崗岩（ピンク系）
9	42.2	24.7	11.7	A3	やや深い	粗	平頭状（未加工）	花崗岩（ピンク系）
10	50.7	30.5	11.2	A1	浅い	粗	圭頭状（未加工）	花崗岩（ピンク系）

石仏一覧表（法量の単位はcm）

くピンク系を呈するもの（１、２、５、６、８、９、10）、今一つはカリ長石が少なく斜長石が卓越する白色系を呈するもの（３、４、７）である。専門家による石材鑑定を経ていないが、後者は花崗閃緑岩と見られ、３、７は結晶粒が大きく、４は非常に小さい。前者のピンク系を呈する花崗岩は、六甲山系から北摂山系に産するものと見て相違なかろう。

像の種類は、いずれも阿弥陀如来座像とみられる。記念銘を刻したものはないが、溝１を含む各遺構の年代から、およそ15世紀末頃より以前のものと推定される。個々の法量や特徴については一覧表に譲ることとし、主として石材の色調と像容を軸に以下のように分類を行なった。

Ⅰ．ピンク系

A1…像容は腕より上部を表現し、大きく肩の張る体部をもつ。彫りは全体に浅く、顔面の表現は不明瞭である。衣の表現があるものとないものがある。石材は全体に未加工で、頭部の形状は円頭、圭頭、尖頭を志向する（６、８、10）。

A2…像容は腕より上部を表現する。A1に似るが、肩の張りは小さい。彫りは全体に浅く、顔面の表現も不明瞭である。下面以外は、ハツリにより舟状に丁寧に整形する。頭部は円頭状につくる（１）。

A3…像容は膝部は不明瞭ながらも、座像全体を表現する。彫りはA1、2に比べ深い。部分的にハツリによる整形を行なうが、未加工部分が多く、もともと方柱形の石材を使用している。頭部は水平な未加工面そのままである（９）

A4…像容は座像全体を表現する。座像の表現は、肩があまり張らず小さくまとまり、彫りはA1、2に比べるとメリハリがある。目鼻など、顔面の表現も、A1～3のいずれより明瞭である。石材は幅が狭く長いものを使用し、全体的に未加工部分が多い（２、５）。

Ⅱ．白色系

B…頭部が圭頭状を呈する板碑型の石仏である。石龕状に彫り込んだ中に像を表現し

ており、像容は台座（蓮華座）を伴う全身座像である。彫りは深く丁寧で、頭部には肉髻の表現を伴い、表情もふくよかである。未加工部分を残すが、ほぼ全体に加工が及ぶ（3、7）。

C…像容は腕より上部を表現し、肉髻を表現する丸い頭部に、肩の張る大きな上体を表現する。彫りはやや深く丁寧であるが、顔面や衣の表現は乏しい。石材は半円柱状で、側面から裏面にかけて風化面がそのまま残る。他の石仏が、板状石材の平坦面に像を彫り出すのに対し、半円柱状の凸面に像が掘り出される。尖頭を志向する（4）。

以上の分類は、各要素間において一定の組み合わせ関係が見られ、作風ともいうべき個性が見い出せる。工人差、もしくは工人集団間の差のいずれかを示すものと見て相違なかろう。

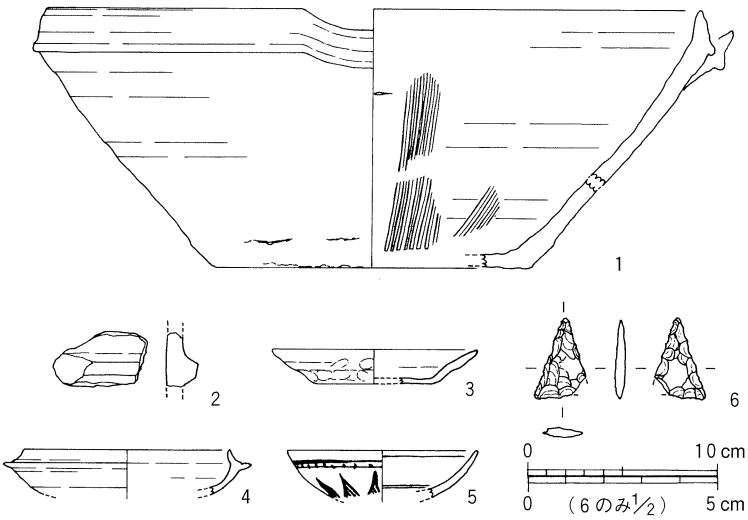
溝2　堀の北側に約3m離れて平行に掘り込まれた、幅20～35cm、深さ約15cm前後を計る小規模な溝である。東端は溝1と合流し、それより東側には伸びず、切り合いも認められない。したがって溝1と2は一体で機能していた可能性が高い。埋土は灰黄褐色シルト～極細粒砂で、溝1の埋土と大差はない。溝1、2、堀の配置には、強い計画性が看取され、また土坑など他の遺構との重複関係から、2本の溝は当調査地点でも新しい段階の遺構と推定される。

出土遺物として、土師質羽釜と緑釉陶器の破片（第8図4、5）がある。4は土師質羽釜で直立する口縁部と短い鍔を有する。5は緑釉陶器のおろし皿で、口縁部付近にのみ施釉が見られ、内面に3本の櫛目を有する。

土塁　堀、溝1、溝2が一体で営まれた遺構であるとすれば、本来堀と溝2の間には土塁が設けられていた可能性が高い。土塁の存在を考えさせる要素として、堀と溝2が一定の間隔（10尺）をおいて平行に掘られていること、土の流入を防ぐ石蓋の設置が堀と溝2の間に限られていること、溝1の掘り直しの南端が溝2の合流点までにとどまること、堀の埋め戻し土に、土塁の盛り土と見られる地山粘土ブロックを多量に含む土が投じられていること、の4点があげられる。しかしながら、後に述べる土坑7の石積みが、土塁構築の直前に行なわれたものとみなせば、土塁の直下に位置する土坑7より新しい土坑9や柱穴がいつ、どのような性格を持って掘り込まれたのか、理解しがたい部分も存在する。いずれにせよ土塁そのものの存在を層序的に確認できない以上、状況証拠のみから土塁の存在を主張するには限度があるといえよう。

礫敷遺構と土橋　溝1の東側、南北2.5mの範囲で地山直上に敷設された礫敷である。礫は3、4cm大の小礫から40cm大の塊石まで大きさにばらつきが見られる。礫に混じり若干の土器片や埴輪片が使用されていた。当初礫を充填した土坑を想定したが、付近の撹乱が地山直上にまで達している状況から、礫敷は本来もっと広い範囲に施されていたものと推定される。また溝1に礫の一部が転落している状況から、礫敷は溝1と同時に敷設されたものである可能性が高い。溝1の南端が、ちょうど堀の東端に一致し、溝1の東側に礫敷が敷設されている状況から、堀が途切れた東側は、地山を掘り残した土橋となっていた可能性が高い。そして礫敷遺構

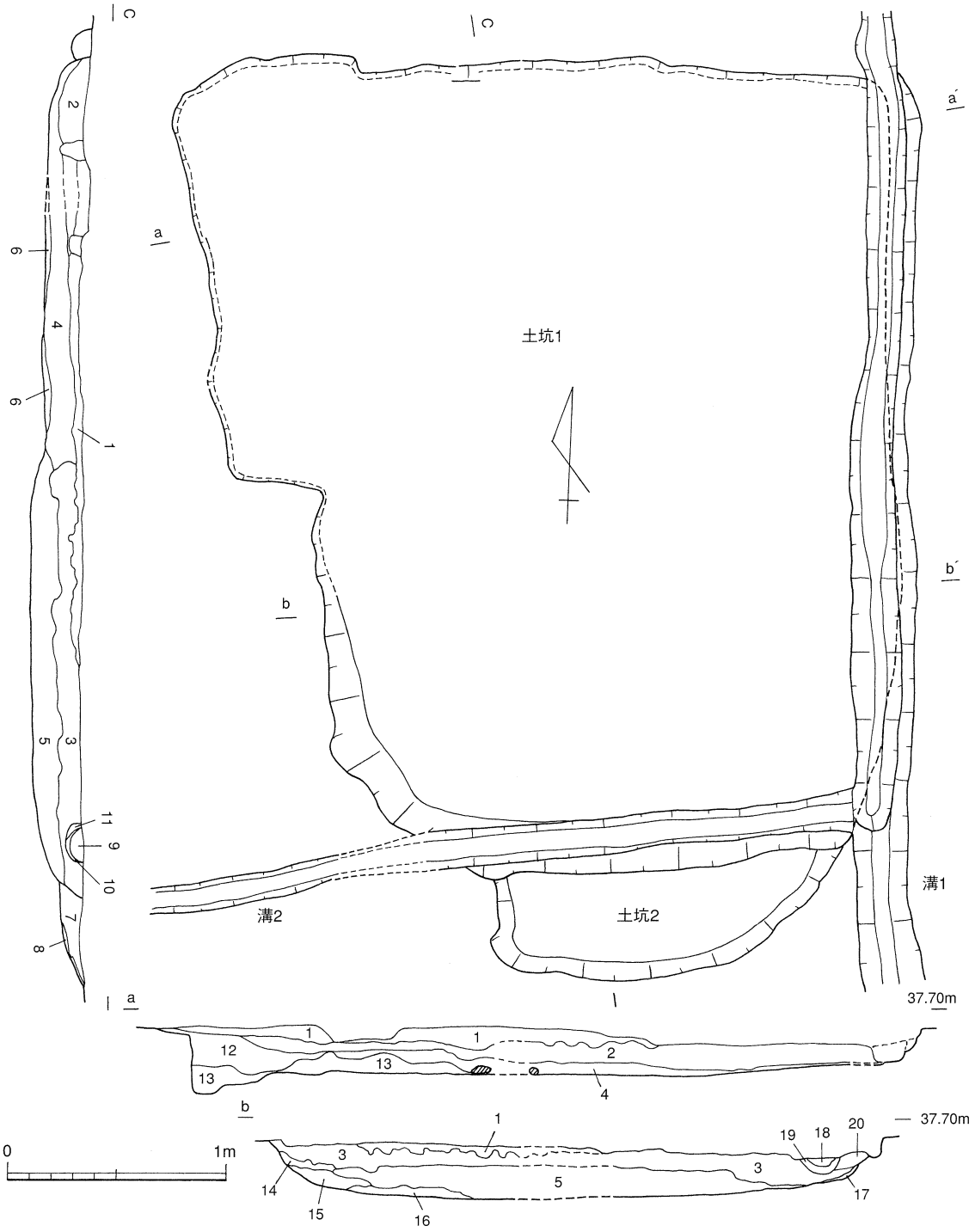
は、南側の土橋から居館内部につづく通路に敷設された、舗装を目的とした礫敷であったと推定される。とすれば堀の東端部付近にある２個の柱穴は、居館入り口に設けられた門扉などの構造物に伴うものであろうか。以上の想定は、将来の東側隣接地の調査によりあらためて検証されるべきと考える。



第13図　礫敷遺構他　出土遺物（１：４）

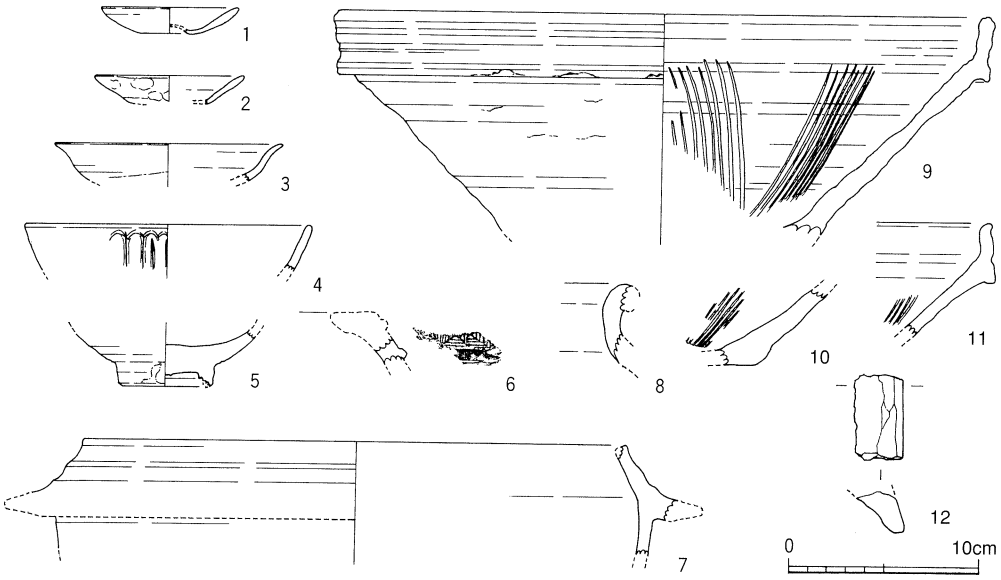
礫敷出土の遺物として備前焼摺鉢、埴輪片がある（第13図１、２）。１は備前焼摺鉢で、接合関係にない破片５点からなる。焼成、色調、調整から同一個体と見て相違なく、口縁部、底部、片口部の各破片が揃う。復元径34.4cm、器高13.7cmを計り、内外面ともくすんだ青灰色を呈する。口縁部は断面三角形を呈し、口縁部下端は斜め下方に短く突出する。真っ直ぐに開く体部の内面には、11本を単位とする摺目が施されている。全体としてシャープなつくりで、間壁分類Ｂ期[注2)]、乗岡分類５a期[注3)]に比定され、15世紀後半の所産と見られる。２は円筒埴輪の突帯付近の破片である。内外面ともに淡い橙色を呈し、調整は磨滅のため不明。突帯の形状から中期古墳に伴うものであろう。

土坑１　南北7.6m、東西6.5mの規模を有する大型の土坑である。形状は、北、東、南の３辺は方位にほぼ一致し、直線的に掘り込まれるが、西辺は中央付近で直角に曲がり、南側が幅を減じている。北辺も、西端から1.7mのところにわずかな曲がりがある。掘削の角度は、部分によって異なるが、ほぼ垂直から45度の傾斜を持ち、深さは40～50cmで、底部の形状はほぼ平坦である。埋土は、肩部に近い周辺部で最下層に褐灰色の粗砂が1cmの厚さで流入している以外は、おおむね地山の黄褐色粘土ブロックを多量に含む土で一気に埋め戻されている。このことから土坑１の自然堆積は、最下層の粗砂の流入程度にとどまり、掘削後さほど永い時間を経ずに機能を停止し、埋め戻されたものと推定される。当遺構の性格は判然としないが、東辺が溝１のラインとほぼ一致すること、南辺が溝２とほぼ一致することから見て、土塁および土橋につづく通路をすでに意識して掘削されたものであることは明白である。換言すれば、溝１、２のいずれもが土坑１の埋没後に掘削されていることから、溝の掘削以前に、すでに土塁および土橋にいたる通路が存在したことを示すものといえる。土橋から居館内部に入り、最初に視覚に入る大型の不整形土坑の性格はなお判然としないが、西辺に見られる特異な形状から強いて可能性をあげるならば、園池遺構などについても考慮すべきかと思われる。なお埋土の上から掘り込まれた遺構は、数個の小ピットを除くとほとんど皆無であった。また底部から古い時期



1．にぶい黄橙色（10YR6/3）シルトに明黄褐色（10YR6/8）地山粘土ブロックを15%程度含む。マンガン粒10%。地山による埋め戻し土、整地土。
2．にぶい黄橙色（10YR6/3）シルトに明黄褐色（10YR6/8）粘土ブロックを20%程度含む。マンガン粒５%。地山による埋め戻し土。
3．明黄褐色（10YR6/6）粘土～シルトでほとんどが地山による埋め戻し土。
4．にぶい黄褐色（10YR5/3）砂混シルトに地山粘土ブロックを15%程度含む。
5．にぶい黄色（2.5Y6/3）砂混粘土～シルトに地山粘土ブロックを40%含む。
6．黄褐色（2.5Y5/3）砂混粘土～シルト地山粘土ブロックを50%含む。
7．にぶい黄橙色（10YR6/4）極細砂～シルトに灰白色（10YR8/2）細砂を含む。
8．にぶい黄橙色（10YR7/2）細粒砂。掘削後最初に流れ込んだ堆積土。
9．灰黄褐色（10YR6/2）極細粒砂。溝２の埋土。
10．灰黄褐色（10YR5/2）シルト。溝２の埋土。
11．にぶい黄褐色（10YR5/3）極細粒砂～シルト。溝２の埋土。
12．にぶい黄橙色（10YR6/3）砂混シルトに地山粘土ブロックを25%程度含む。
13．明黄褐色（10YR6/8）粘質シルトににぶい黄褐色（10YR5/3）シルトブロックを15%程度含む。地山の土が過半。
14．黄褐色（2.5Y5/3）シルトに地山粘土ブロックを25%含む。マンガン粒10%。
15．明黄褐色（10YR6/8）粘土に灰黄色（2.5Y6/2）粘土ブロックを10%程度含む。
16．にぶい黄色（2.5Y6/3）砂混粘土～シルトに地山粘土ブロックを10%含む。
17．にぶい黄橙色（10YR7/2）細粒砂。土坑２の８層と類似。
18．灰黄褐色（10YR5/2）砂混シルト。掘り直し後の溝１埋土。
19．灰黄褐色（10YR5/2）粘土～シルト。掘り直し後の溝１埋土。
20．灰黄褐色（10YR5/2）粘土。溝１の埋土。

第14図　土坑１平面・断面図（１：30）



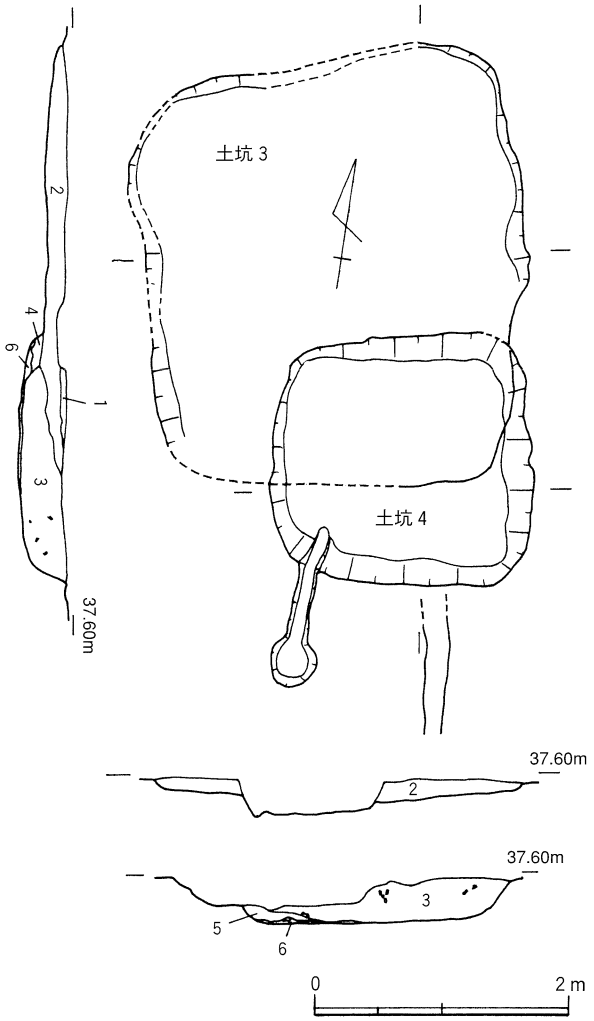
第15図　土坑１出土遺物（１：４）

の遺構がまったく検出されなかったのは、土坑の掘削深度が深く、仮に存在したとしても掘削時に削除されてしまったことによるものであろう。

土坑１は、遺構の規模に比して遺物量は少ない。備前焼の摺鉢などを除くと、大半は小片である。土師皿、中国製陶磁器、備前焼、瓦質土器、瓦片等がある（第15図１～12）。１は復元径7.2cm、高さ1.4cmの土師皿で、底部はヘソ皿状にくぼむ。２は復元径7.6cm、器高1.5cmで、底部から屈曲して口縁部が外反する。３は青磁の皿で、復元径11.8cm、体部下半は無釉である。４は青磁の碗で、復元径14.6cm、外面に蓮弁文を有する。５は青磁の碗で、底部径4.5cm、高台内面は無釉である。６は瓦質の奈良火鉢の小片である。浅鉢Ⅴ類[注1)]に相当し、口縁部外面の突帯間にスタンプ文を有する。７は瓦質の羽釜で、復元径28.2cm、有段の口縁をもつ。８は備前焼の壺の口縁部破片である。口縁端部は玉縁状に肥厚する。９は備前焼の摺鉢で、口径34cm、器高は12.5cm前後と推定される。直線的に開く体部から口縁帯がほぼ直立し、口縁帯外面には鈍い凹線が複数はしる。口縁帯下端の突出は比較的シャープである。８本を単位とする摺目は１cmあたり2.5本でやや粗い。10は備前焼の摺鉢底部、11は備前焼の摺鉢で、幅広い口縁帯はほぼ直立し、外面に１条の凹線をめぐらせる。備前焼はいずれも胎土が精良で堅緻に焼き締められ、明赤褐色の色調を呈する。９、11ともに乗岡分類５ｂ期[注3)]の特徴を有し、15世紀末葉に比定される。12は丸瓦の側縁の破片と見られる。凸面は燻しにより黒灰色を呈する。

土坑２　土坑２は、土坑１と切り合う遺構で、重複関係から明らかに土坑１より古い。埋土は土坑１と同様、最下層に薄い粗砂が流入し、上層は一気に地山粘土ブロックを含む土で埋め戻されている。おそらく土坑１と同一の目的で掘り込まれたものと推定されるが、掘削後、短期間で埋め戻され、あらたに南辺を北側に後退させ、土坑１として再度掘り直されたものである可能性が高い。溝２との位置関係から、この掘り直しも土塁を意識した行為と見て取れよう。

土坑３　東西3.1ｍ、南北3.5ｍ、深さ16cmを計る平面長方形の土坑である。埋土は褐灰色極



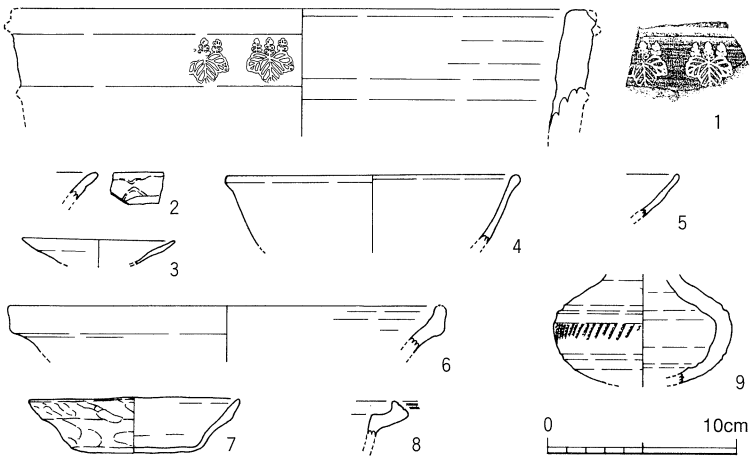
１．褐灰色（10YR5/1）シルト
２．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂。他の遺構に見られない埋土。
３．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂、赤褐色の焼土や壁土、明黄褐色の地山粘土ブロックの混合土。埋め戻し土。
４．褐灰色（10YR4/1）シルトに焼けた壁土や炭を多量に含む。
５．黄褐色（10YR5/8）シルトに灰黄褐色（10YR5/2）シルトブロックを30％含む。
６．黒色（10YR2/1）木炭層。薄い灰白色シルトを何層もはさむ。

第16図　土坑３、４平面・断面図（１：60）

細粒砂で、同質の埋土は他のどの遺構にも認められない。出土遺物は皆無で、明確な時期、性格等は判然としない。ただし遺構の方位が土坑１の西辺、堀、溝２などと共通しており、近い時期に営まれた遺構と考えられる。重複関係から土坑４埋没後の遺構である。

土坑４　東西、南北とも２ｍを計るほぼ平面正方形の土坑である。埋土は大きく２層に分かれ、４～６の下層が埋没した後、大きく掘り直しが行なわれ、その後一気に地山粘土ブロックを含む３層で埋め戻しが行なわれたものと推定される。最下層６は黒色の木炭層で、焼土を含む。４は褐灰色シルトに焼けた壁土や炭、灰などを多量に含む。上層の３層も、地山粘土ブロックの他、赤褐色の焼土や壁土を多量に含むシルト層である。また土坑南西コーナーには、長さ0.96m、幅17cm、深さ約16cmの溝が付設され、その南端部は直径38cmのピット状を呈する。ピット状の部分の深さは18cm程度で、溝よりほんの少し深いといった程度である。いずれにせよ溝及び小穴は土坑と一体のものであることは明らかであり、火の使用を目的とした土坑の性格から、土坑内の排水・排湿対策のために設けられた施設と推定される。ただし土坑４の性格を推定する要素として、排水用の溝・ピットを有すること、最下層の木炭層の存在があげられるものの、掘形の底部や周囲に強い加熱の痕跡はとくに認められなかった。木炭層からの出土遺物も皆無のため、火を用いた何らかの行為が想定できる以外、具体的な性格は不明である。あるいは居館内で不要となった廃棄物の一時的な焼却施設のようなものであろうか。また上層の埋め戻し土から出土した炭、灰、焼けた壁土については、これと同様なものが井戸１や土坑１、ＳＰ－65など広い範囲の遺構から出土しており、必ずしも土坑４との関連を想定することはできない。むしろ焼けた壁土などの出土は、これらを含む遺構の同時期性を示すとともに、居館内部で一定規模の火災が発生していたことを示す。

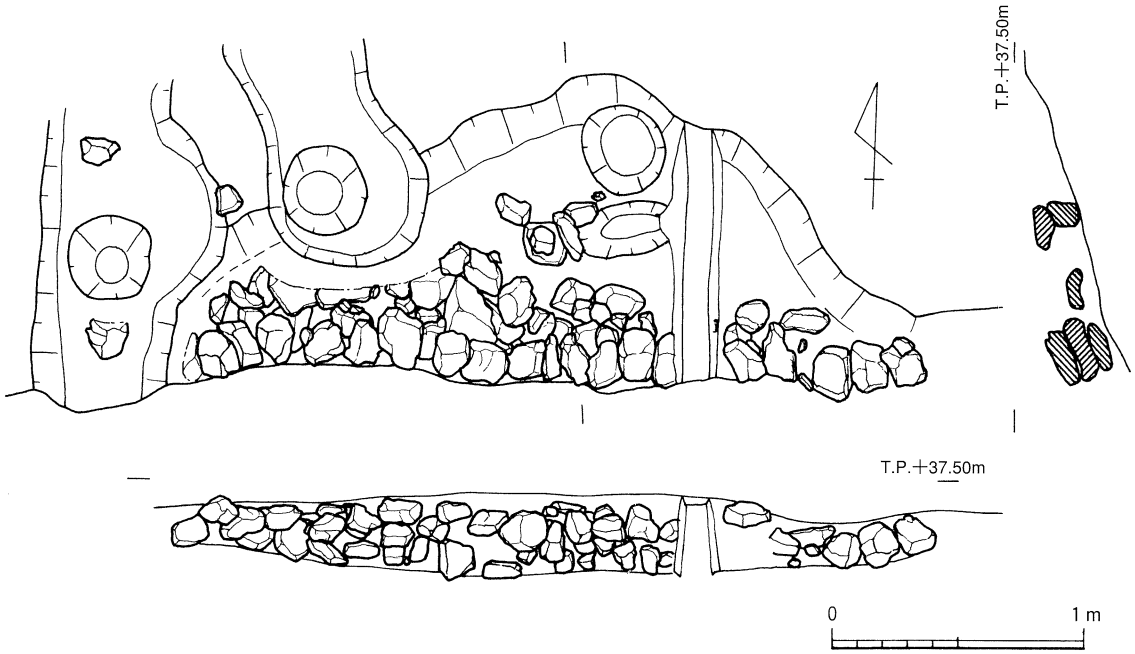
土坑４からの出土遺物は、多量の壁土の他、瓦質の火鉢、青磁、土師皿の破片がある（第17図１～３）。１は瓦質の火鉢で、復元径32cm、器厚1.6cmで、口縁部外面におそらく２条の突帯を付し、その間に五七桐文のスタンプを押す。２は青磁碗の口縁部破片で、蓮弁文の先端部が確認できる。



第17図　土坑４～７出土遺物（１：４）

土坑５　東西5.3m、南北7.5mを計る隅丸長方形の土坑である。深さは10cm程度で、褐色シルトを埋土とする。規模、形状、方位から土坑３、４との関連が窺われるが、具体的な性格は不明である。土坑と重複する柱穴の多くは土坑の埋没後に設けられ、また溝２は明らかに土坑よりも新しい。下に述べる理由から、柱穴の多くは堀や溝よりも先行すると考えられるため、土坑５は調査区内の遺構の中でも比較的古い時期に属するものと考えられる。第17図９の須恵器は６世紀後半の所産であるが、当該期に属する他の遺構は明確でないため、必ずしもこの遺構の時期を示すものとすることはできない。

土坑６　土坑２と堀の間から検出された土坑である。南側は堀によって切られているが、幅は最大で3.9m、深さは15cm前後を計り、明黄褐色～褐色シルトを埋土とする。遺構の重複関係

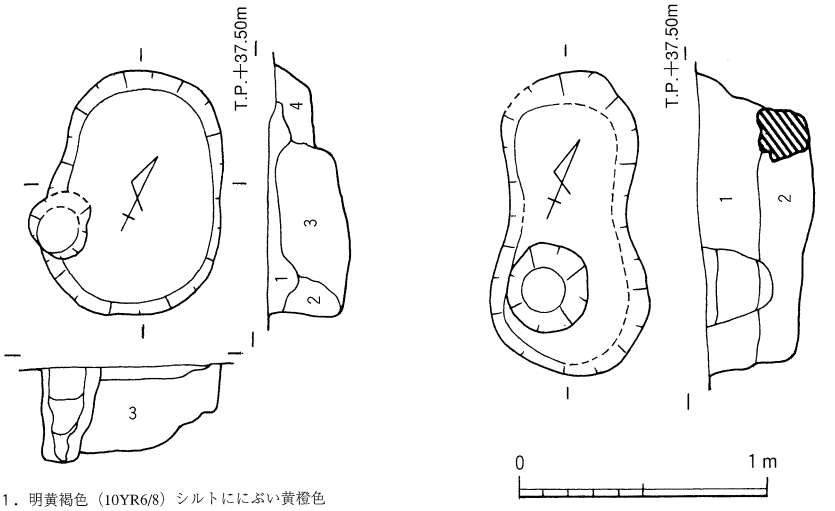


第18図　土坑７平面・立面図（１：30）

から見ると、土坑６は堀や柱穴列の柱穴よりは古い。土坑２のほぼ南側に位置するが、埋土の質が全く異なるため、関連性は薄いとみられる。東播系の須恵器と瓦器片を含むことから、調査地点では最も古い、14世紀代に属する中世遺構である可能性が高い。

出土遺物として土師皿、青磁碗、瓦器椀、須恵器鉢がある（第17図３～６）。３は土師皿で、復元径8cm、磨滅のため詳細不明。４は青磁碗で、復元径15.2cmを計る。５は瓦器椀の破片で口縁端部外面にのみ燻しがかかる。６は東播系の須恵器鉢で、復元径22.6cm、口縁部は内弯して立ち上がり、端部は肥厚して丸くおさめる。森田編年第Ⅲ期第２～３段階[注4]、荻野編年のⅣ期[注5]に比定されよう。

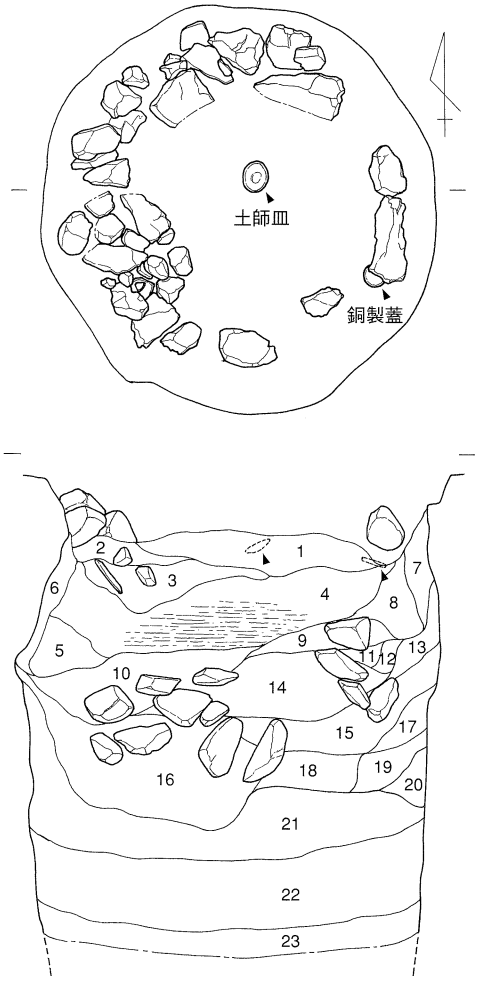
土坑７　土坑６と同様、堀と切り合う土坑である。本来の規模は不明だが、検出した範囲は東西3.2m、南北1.2mを計る。深さは南端で35cmを計り、黄褐色極細粒砂を埋土とする。土坑南端には堀の肩部ラインに沿う形で石積みがなされていた。径10～20cm大の礫をほぼ垂直に２～３段に積み上げ、裏込めにも同様な礫を使用している。当初、土坑７を堀肩部の崩壊部分と認識し、石積みを堀の補修跡と見たが、土塁の盛り土とともに崩壊した地山の形状としては不合理な形状を示している。むしろ、堀の掘削以前に土坑が存在し、堀の掘削と同時に土塁を築成するにあたり、凹所となっている土坑の縁にのみ基礎固めとして石積みを施したものとする方が妥当性が高いと見られる。ただしこのような解釈を前提とすれば、堀の項でも述べたように、土坑７の埋土上から掘り込まれた土坑９や柱穴は、土坑７を埋め戻して土塁を築く直前に掘られたか、土塁の上から掘られたか、あるいは土塁を崩して堀を埋め戻した後に掘られたかのいずれかとなろう。調査区南西にある柱穴列１は明らかに堀掘削より以前の遺構であるが、堀の北側に集中する他の柱穴の大半も、確実に堀以前と見る積極的な根拠はない。むしろ堀肩部に沿うように並ぶ柱穴列は、堀以前の建物跡と見る以外に、土塁構築上の技術的な工夫、もしくは土塁に代わる何らかの防禦・区画施設に関連するものであった可能性も残している。この点についても、今後、



1．明黄褐色（10YR6/8）シルトににぶい黄橙色（10YR6/3）シルトブロックを30%含む。
2．黄褐色（10YR5/8）シルトににぶい黄橙色（10YR6/3）シルトブロックを25%含む。
3．２にほぼ同じ。にぶい黄橙色（10YR6/3）シルトブロック30%含む。
4．にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質シルト。

1．明黄褐色（10YR6/8）シルトと褐灰色（10YR5/1）シルトの混合土。
2．灰黄色（2.5Y6/2）と明黄褐色（2.5Y6/8）シルトの混合土。

第19図　土坑８、９平面・断面図（１：30）



1．灰黄褐色（10YR5/2）灰土に明黄褐色（2.5YR6/8）の地山粘土を30％含む。焼土を多量に含む。
2．黄褐色（2.5Y5/2）シルトに明黄褐色（2.5Y6/8）の地山粘土をわずかに含む。
3．黄褐色（2.5Y5/3）シルト。
4．黄褐色（2.5Y5/3）シルトを基調に灰オリーブ（5Y5/2）シルトがラミナ状に水平堆積。
5．明黄褐色（2.5Y6/8）粘土。地山と同質。
6．明黄褐色（2.5Y6/6）粘土。地山と同質。
7．にぶい黄橙色（10YR6/3）粘土。
8．黄褐色（2.5Y5/3）粘土に黄色（2.5Y7/8）地山粘土ブロックを25％含む。
9．黒褐色（2.5Y3/1）～黄灰色（2.5Y5/1）灰土。巨礫含む。
10．黄灰色（2.5Y6/1）粘土～細粒砂。巨礫含む。
11．灰黄褐色（10YR4/2）粘土。
12．灰黄褐色（10YR5/2）粘土。
13．黄色（2.5Y7/8）粘土～細粒砂。地山と同質。
14．黄褐色（2.5Y5/4）シルト～細粒砂。巨礫含む。
15．灰色（5Y5/1）粘土～シルト。マンガン粒多量。巨礫含む。
16．灰色（5Y5/1）粘土。巨礫含む。
17．明黄褐色（2.5Y6/8）粘土と灰白色（7.5Y8/1）の混合。地山と同質。
18．暗黄灰色（2.5Y5/2）粘土。マンガン粒多量。
19．灰白色（N7/1）粘土。
20．17と同質。
21．灰白色（N7/1）粘土。これより以下は遺物をほとんど含まない。
22．灰色（N6/1～5/1）粘土。
23．黒褐色（2.5Y3/2）シルト。植物遺体を多量に含む。

0　1m

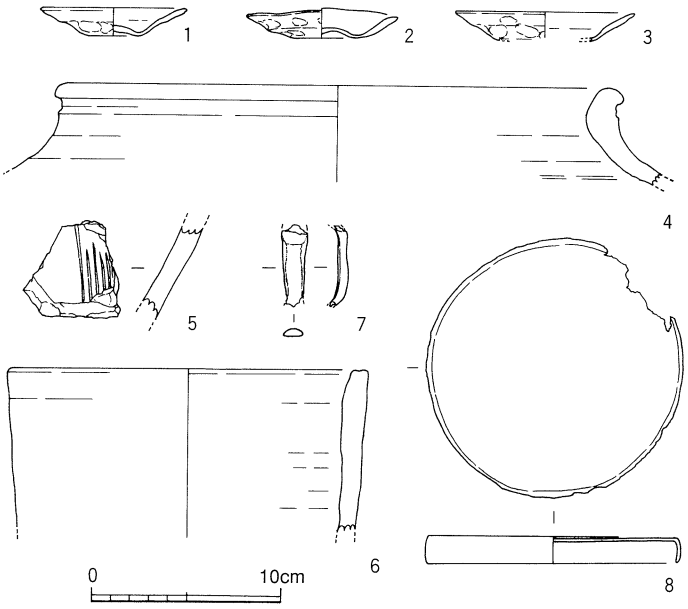
第20図　井戸１平面・断面図（１：20）

周辺部の調査に解決を委ねたい。

出土遺物として、土師皿、土師器鍋がある（第17図７、８）。７は完形に近い土師皿で、径11.4cm、器高3cmを計る。強いナデ調整により、口縁部が大きく屈曲して段をなす。８は土師器鍋の口縁部破片で、いわゆる鉄鍋型とされるものである。[注6)]

土坑８、９　堀の北側で検出した２基の土坑である。土坑８は長径98cm、短径68cm、深さ33cmを計り、埋土は黄褐色シルトを主体とする。土坑９は長径1.22m、短径64cm、深さ47cmを計り、明黄褐色～褐灰色のシルトを埋土とする。土坑の底部北端から20cm大の礫が出土した。土坑８とともに目立った出土遺物もなく、性格は判然としない。

井戸１　直径1.03～1.08m、深さ２m以上を計る平面円形の素掘り井戸である。埋土の状況が不安定なため、1.3mの深さで掘削を中止した。掘削当初から最上層において５～25cm大の礫石が円形に回るように検出され、石組みの井戸かとも想定されたが、礫石は積み上げられた様子もなく、結果的には井戸の埋没過程で流入したものと判断した。埋土は大きく３層に分かれる。21～23は灰白色粘土～黒褐色シルトで、ほぼ水平な自然堆積である。うち23には多量の植物遺



第21図　井戸１出土遺物（１：４）

体が含まれていた。つぎに２～20は礫を挟みながら堆積した混じりけの少ない粘土～シルトである。とくに４層は灰オリーブのシルトがラミナ状に水平堆積しており、井戸が永らく窪みとして残り、滞水状態を維持しながら徐々に堆積・埋没したと推定される。そして検出した最上層は、灰黄褐色の炭、灰、焼土（壁土）や地山ブロックを多量に含み、おそらく最後まで残っていた井戸の窪みを埋め立てた土と見られる。この土層から第21図２の完形土師皿と、７、８の銅製品が出土した。

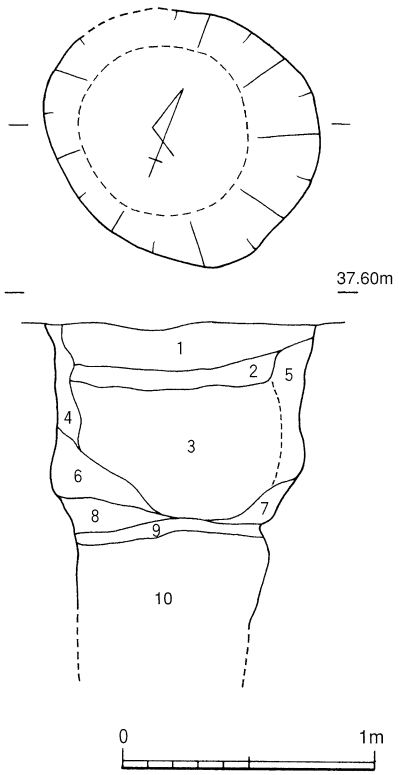
井戸内に流入した礫石は人為的に一気に投入されたものではなく、埋土の状況からかなり時間をかけて自然的に流入したものと判断した。居館内という生活空間において、こうした礫石が何らかの用途に使用されていて不思議はないが、ある場所からこの地点まで運ばれて、一定の時間をかけて徐々に落ち込んでいく状況というのは少し考えにくい。可能性としては、井戸の上部にはもともと石組みによる囲いがあって、井戸の機能が衰微していく過程で、石組み自体もメンテナンスを受けることなく、徐々に井戸内に崩落していったのではなかろうか。積極的な根拠はないが、一案として提示しておきたい。

出土遺物として土師皿、瓦質土器、土師質土器、銅製品がある（第21図１～８）。１は土師皿で径7.5cm、器高1.4cmを計る。２、３と同様にヘソ皿の形状を呈し、口縁部はナデにより大きく屈曲して段をなす。２は完形の土師皿で、径7.9cm、器高1.6cmを計る。１に比べると粗雑なつくりで、底部からの屈曲は鈍く、全体に厚ぼったくシャープさに欠ける。３の土師皿は復元径9.4cmで、底部から屈曲して立ち上がる口縁部を有する。４は瓦質の甕で、復元径28.2cm、体部から短く外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめるが、外面直下に強いナデによる明瞭な段を有する。鋤柄分類の甕Ⅲ-１[注1)]に比定され、15世紀後半から16世紀初頭の年代が与えられている。５は瓦質土器の摺鉢破片である。器厚１cmで、櫛目を５条確認できるが、使用によりかなり磨滅している。６は土師質の鉢で、復元径18cmを計る。体部から口縁部に向かって直線的に伸び、口縁端部はややくぼんだ平坦面につくる。７は残存長2.1cm、幅7mm、器厚3mmで、断面は薄い蒲鉾状を呈する銅製品である。弓状に緩くカーブし、両端部ともにさらに強くカーブする形状から、掛け金具のようなものであろうか。８と近接して出土している点から、一体の製品である可能性が高い。８は蓋と見られる銅製品で、径6.7cm、器高7.5mm、器厚1mmを計

る。つまみもなく、極めてシンプルなつくりのもので、大きさと形状から経筒の蓋などが想起される。７と一体のものであることを前提に、今後類品を探す必要があろう。

井戸２　調査区の北端部付近で検出した直径1.15m、深さ1.8m以上を計る。半裁しながら掘削を進めたが、底部付近に達する時点で断面が崩壊し、断面実測ならびに写真撮影は断念せざるを得なかった。掘削途中の観察によると、井戸は中央付近で袋状に広がり、底部に向かってすぼまる形状を呈していた。埋土は上部1.2mほどが地山粘土ブロックを多量に含む埋め戻し土、下層は青灰色粘土～シルトの自然埋積土であった。出土遺物は皆無であったため時期は不明であるが、中世に属する他の遺構とは埋土が全く異なり、おそらく近世の耕作に伴う素掘り井戸とみられる。

井戸３　直径0.98m～1.1m、深さ約1.85mを計る素掘り井戸である。埋土は大きく２層に分かれ、10層の植物遺体を含むオリーブ黒色粘土が自然埋積した後、井戸周壁が徐々に崩落し、大きな窪みとなった中央部を一気に地山の黄色粘土ブロックで埋め戻している。出土遺物がなく時期は不明だが、埋土の質から、他の柱穴などと同様、中世後期に属する可能性が高い。

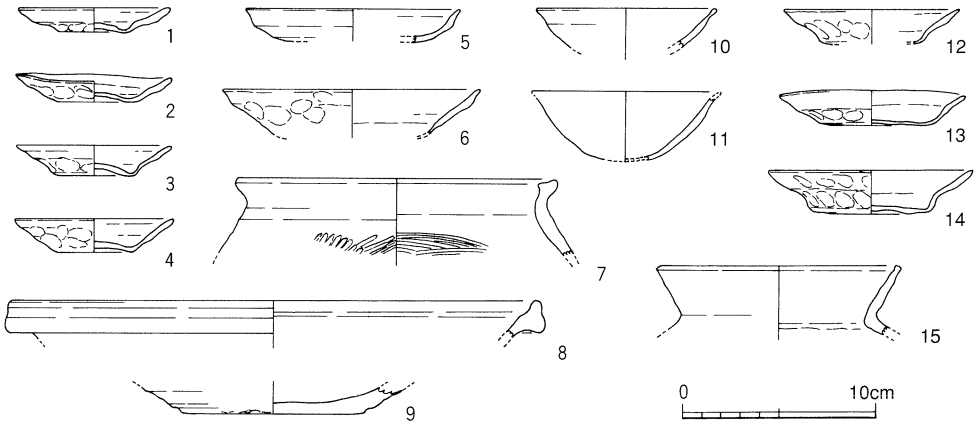


1．灰黄褐色（10YR6/2～5/2）シルト～細粒砂。
2．地山の黄色（2.5Y8/6）粘土ブロックと灰白色（7.5Y6/1）粘土ブロック混合土80％に灰白色（2.5Y7/1）シルトを混じる、埋め戻し土。
3．地山の黄色粘土ブロックと灰白色粘土ブロック混合土50％に灰色（7.5Y6/1）シルト～砂を混じる、埋め戻し土。
4．灰黄褐色（7.5Y6/2）粘土～シルト。
5．4とほぼ同。
6．灰白色（5Y8/1）粘土に灰色（5Y4/1）粘土が混じる。
7．6とほぼ同じ。
8．灰白色（5Y8/1）砂混粘土。
9．黄橙色（10YR7/8）粘土。
10．オリーブ黒色（5Y3/2）粘土、植物遺体を含む。

第22図　井戸３平面・断面図（１：30）

柱穴・柱穴列　柱穴と見られるピットは調査区のほぼ全体に分布する。確実に柱痕が観察されたピットだけでも66個を数えることができ、調査区内において建物、柵、塀などの構造物が存在したことは明らかである。分布傾向としては、柱痕が確認でき、40cm以上の深さを有するしっかりした柱穴は、調査区南部、とくに南西部に集中している。中には、明らかに列状の配置をとるものがある一方、規則的な配置を見出しにくい柱穴も存在する。これについては、柱穴の分布が南西部に偏りをもつ点から、関連する柱穴がさらに調査範囲外にはずれることによるのかも知れない。いずれにせよ今回の調査範囲内で、建物全体が判明する柱穴配列は皆無であり、今後、隣地での調査状況を見極めながら慎重に検討する必要があろう。

柱穴列１は調査区南西部において南北に並ぶ４個の柱穴で、柱間は1.6～1.9mを計る。最も南側の柱穴は、明らかに堀の埋土で切られていることから、堀掘削以前の遺構であることは明らかである。これが建物にともなう遺構であれば、調査区西側及び南側に向かって遺構が広がっていた可能性が高い。これと同様に、堀肩部北側に東西に並ぶ柱穴列も、堀・土塁以前の建物



第23図　柱穴、ピット出土遺物（1：4）

遺構の一部であれば、さらに南側に向かって展開していたと考えられる。堀検出時に、重ねて堀の埋土上面での精査を実施したが、近世以降の耕作に伴う杭状のピット以外、明確な遺構を検出することはできなかった。このことから、調査区南部に集中する柱穴の多くは、なお土塁や区画施設に伴う構造物である可能性を残すものの、堀を伴う居館成立以前の遺構である可能性が高いと考える。なお、堀掘削以前の柱穴列1は、各柱穴とも埋土のほとんどが地山ブロックの埋め戻しによるものであり、生活面になお遺物包含層が形成されていない段階に営まれた、遺跡としては初期の遺構とみられることも、以上の想定を裏付けるものといえる。

柱穴・ピットから出土した遺物として、土師皿、瓦器椀、土師質土器、東播系須恵器、弥生土器がある（第23図1～15）。1～4はSP－12から出土した土師皿で、いずれもヘソ皿の形状を呈する。1は復元径7.8cm、器高1.3cmを計る。底部から体部が大きく屈曲して開き、口縁部との間に強いナデによる段が生じている。2はほぼ完形で、径8.2cm、器高1.4cmを計る。底部と体部の間の屈曲の程度は1に比べると鈍い。手づくねによる段が生じている。3は復元径8cm器高1.6cm程度で、1と同様の特徴を有する。4は約3分の2を残存する破片で、径8.2cm、器高1.8cmを計る。底部の窪みは浅く、体部と口縁部の間の段も見られない。1～4は径7.8～8.2cmにおさまり、大きさに規格性が認められる。5～8はSP－89から出土した。5は土師皿で復元径11cm、器高1.7cmを計る。丸い体部から外反する口縁部を有する。6は土師皿で復元径13.5cm、おそらく水平な底部から体部が直線的に開くと見られる。7は土師質の鍋で、播丹型V期[注6)]に比定され、15世紀後半の所産とされる。8は東播系摺鉢の口縁部破片で、復元径27.4cm、丸みを帯びたぶ厚い口縁帯をつくる。森田編年の第Ⅲ期第4段階[注4)]に比定され、15世紀前半の所産と見られる。9はSP－130から出土した東播系摺鉢の底部である。底径9.4cmで糸切りの痕跡を残し、内面は使用による磨滅が著しい。10はSP－36出土の瓦器椀の小片である。復元径9.4cmで、口縁部は強いナデにより段をなし、全体に灰白色を呈する。11はSP－58から出土した瓦器椀の破片で、10cm程度の径を有すると見られる。丸い体部からやや外反気味の口縁部を有し、内外面の一部に燻しが残る。12はSP－139から出土した土師皿で、復元径9.1cm、器高1.8cmを計る。底部より大きく屈曲し、体部に手づくねによる指頭痕が顕著である。13はSP－188から出土

した土師皿で、完形に近く径9.6cm、器高1.9cmを計る。底部はややくぼみ、体部が鈍い稜をもって立ち上がる。体部と口縁部の間にナデによる段を有する。14はSP－95から出土した土師皿で、復元径10.6cm、器高2.3cmを計る。わずかにくぼむ底部から大きく屈曲して体部が外反する。指頭痕を顕著に残す。15はSP－17から出土した弥生時代後期の甕である。当ピットは暗褐色シルトを埋土とし、他の遺構とは大きく様相を異にする。当該調査地点周辺にも、弥生時代の遺構が存在することを証する遺物である。

なお、遺構検出時に出土した若干の遺物について触れておく（第13図３～６）。３は土師皿で径11.8cm、器高２cm。底部は平底で、体部と口縁部の間に強いナデによる段が生じている。４は須恵器杯身で、復元径10.8cm、７世紀初頭頃の所産である。５は中国産磁器の皿で、径9.9cm、小野分類の染付皿C群皿Ⅰ類[注8)]に相当し、体部下半に芭蕉文をめぐらす。15世紀後葉から16世紀前葉の所産とされる。６の石鏃はサヌカイト製で、長さ2.1cm、基部推定幅1.5cmを計る。

４．まとめ

以上、調査の成果について述べてきたが、最後に要点を記し、まとめとしたい。

今回検出した遺構は、一部弥生時代を除くと、大半が中世に属するものである。遺構として堀、溝、土坑、井戸、柱穴、礫敷遺構があり、時期は14世紀から16世紀前半の約２世紀間に及ぶと推定される。調査面積に比して出土遺物が少なく、遺跡の動向を克明に跡付けることは難しいが、編年上の位置づけが明らかな一部の遺物や遺構の切り合いなどから、遺跡の動向を大略記すと以下のようになる。

まず、当地点において中世遺構が最初に営まれたのは14世紀代と見られる。瓦器椀の小片ならびに東播系須恵器を根拠とするが、当該期にさかのぼる明確な遺構、遺物は少なく、この時期における遺跡の性格は判然としない。ただし調査区南西部や堀北側に集中する柱穴の多くが、堀掘削以前のものであるとすれば、居館成立以前の集落、もしくは堀を伴わない段階の居館の存在を示すものといえる。また礫敷遺構の礫の一部に転用されていた備前焼の摺鉢は、15世紀中頃～後半の特徴を示し、この時期にもなお遺構が存続していたことは確実である。ただ礫敷以前の遺構と見られる土坑１が、同じく備前焼の年代観から15世紀末葉頃に比定される点からすれば、当資料は前代遺物の混入の可能性が高い。

つぎに時期の明らかな遺構として土坑１がある。その性格はなお判然としないが、埋め戻し土から出土した備前焼摺鉢は15世紀末葉頃に比定され、当遺構の廃絶（埋め戻し）の時期を示す。また、土坑１埋土の大半が地山粘土ブロックを多量に含む埋め戻し土であることは、土坑１の存続期間が極めて短期であったことを示している。その平面形、とくに東辺と南辺の形状は、この段階においてすでに土橋に続く通路及び土塁の存在を示唆しており、おそらく15世紀後半頃までには、堀、土塁を伴う居館が成立していた可能性が高い。

そして土坑１が機能を停止し、整地が行なわれた15世紀末葉頃、すでに存在した堀、土塁に

加え、新たに溝１、２、礫敷遺構が計画的に配置されることにより、居館としての本格的な構えが整備されたものと推定される。

堀と土塁をともなう居館が15世紀後半までには成立していたとして、はたしてその後いつまで存続したかについては、堀からの出土遺物に関する情報が極めて少なく、明確にはしがたい。しかし、井戸１をはじめ他の遺構から出土した遺物において、確実に16世紀後半に下るものが見られないことから、おそらく16世紀前半のうちには居館としての機能は停止され、堀は土塁を崩して埋め立てられ、その後は、耕作地へと変化したものと推定される。

一方、出土遺物について見ると、中国製磁器や国内産陶器、奈良火鉢などの出土は、広範な物流の存在を示唆する。遺跡は、猪名川河口付近の海浜エリアでも、あるいは荘園内中心村落でもなく、どちらかといえば谷水田を生産基盤とした山あいに位置するが、東に旧箕面街道、西に柴原集落を南北に通過する村道があり、これらの道を介し、当地が流通の末端に位置づけられていた可能性は高い。また少量ではあるが雁振瓦を含む瓦の出土は、調査区周辺に相当規模の瓦葺き建物の存在を、また塼の出土は、塼列建物（蔵）の存在を想起させる。さらに銅製品の出土は、居館内に何らかの仏教的施設の存在を窺わせる。

溝１の石蓋に転用された石仏は、遺構の年代から15世紀末葉以前に比定され、当地域における室町期の石仏の年代観の一端を明らかにした。それとともに、居館の整備以前より、付近に存在したであろう墓地の整理および墓石の転用を可能とした人物像の存在を強く示唆する。

調査地点は、「桜井谷村大字柴原全図」によれば、字土井にあり、西に字門ノケ、北に字東出口の字名がみえる。土井は「土居」に由来し、小領主層の居館の所在を窺わせる。『今西家文書』にある『神供料所摂州豊嶋郡桜井郷本田帳』（永享元年、1429）には、桜井郷内の豊嶋郡条里14～16条において、内田、芝原、川（河）端など耕作に関係した地元武士層の名が見える。うち芝原、川端は興福寺の代官職をつとめ、芝原は３町３反余という桜井郷最大の耕作面積を保持した。[注9)] 今回の調査地点は、明治18年仮製地形図に示された柴原村集落の東端からやや離れたところに位置するものの、別に字土井垣内と示される内田村集落との関係から、柴原集落に含まれるとみて差し支えなかろう。今回検出した堀などの遺構が、中世居館の一部と見て大過なければ、芝原氏がその本貫に営んだ地元支配の拠点であった可能性は高いとみられよう。

注

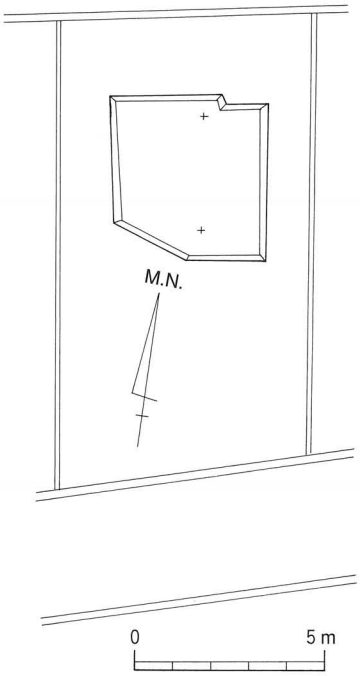
1）立石堅志「奈良火鉢」『概説　中世土器・陶磁器』中世土器研究会編　1995
2）間壁忠彦『備前焼』ニューサイエンス社　1990
3）乗岡実「備前焼擂鉢の編年について」『第３回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会．2000
4）森田稔「中世須恵器」『概説　中世土器・陶磁器』中世土器研究会　1995
5）荻野繁春「須恵器系陶器の編年と生産技術の展開『中世窯業の諸相－生産技術の展開と編年』2005
6）岡田章一・長谷川眞『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会　2004
7）鋤柄俊夫「大阪府南部の瓦質土器生産（２）」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ　日本中世土器研究会　1989
8）小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』NO.2　日本貿易陶磁研究会　1982
9）末中哲夫「第２章中世の豊中」『豊中市史』第１巻　豊中市史編纂委員会・豊中市役所　1961

第Ⅲ章　本町遺跡第33次調査

1．調査の経緯

当調査区は、豊中市本町３丁目116に所在する。平成18年３月31日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて平成18年４月８日に確認調査を行ったところ、地表下45～50cmで土師器・須恵器片を含む遺物包含層を確認し、地表下55～60cmで遺構面を確認した。申請地では個人住宅の建設が予定されていたが、それに伴う基礎掘削時の地盤改良深度が遺構の損壊を免れないことが判明したため、協議の結果、本調査を実施することとなった。

調査は平成18年６月８日から平成18年６月23日にかけて実施し、調査面積は建築対象面積である16m²であった。

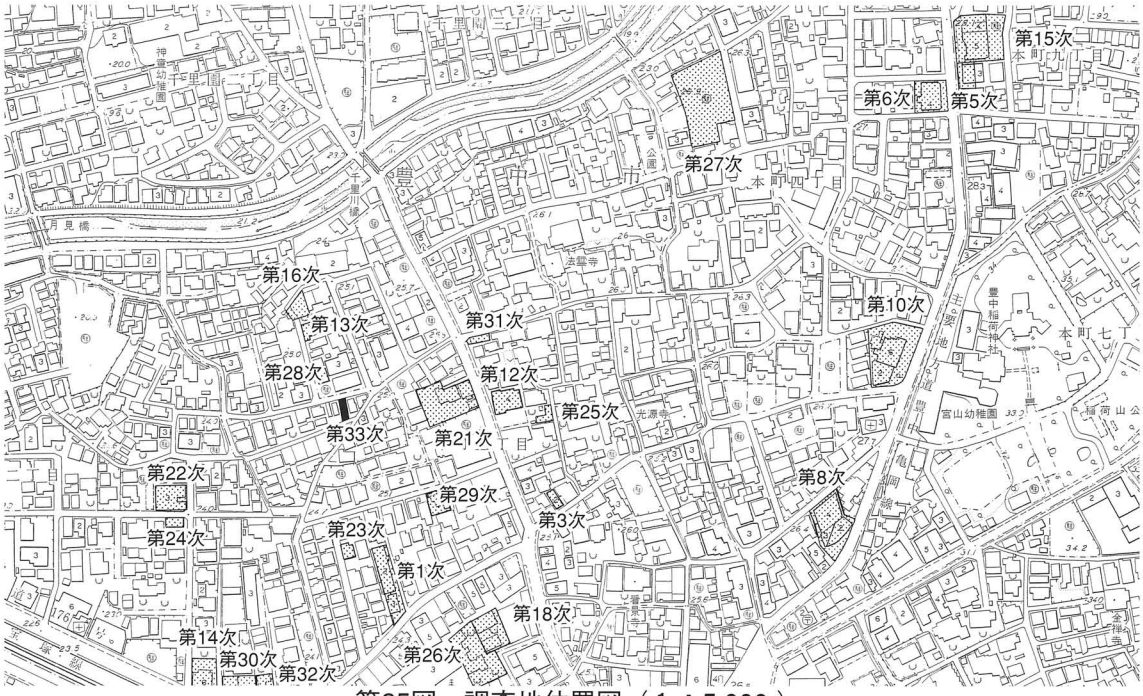


第24図　調査範囲図（１：200）

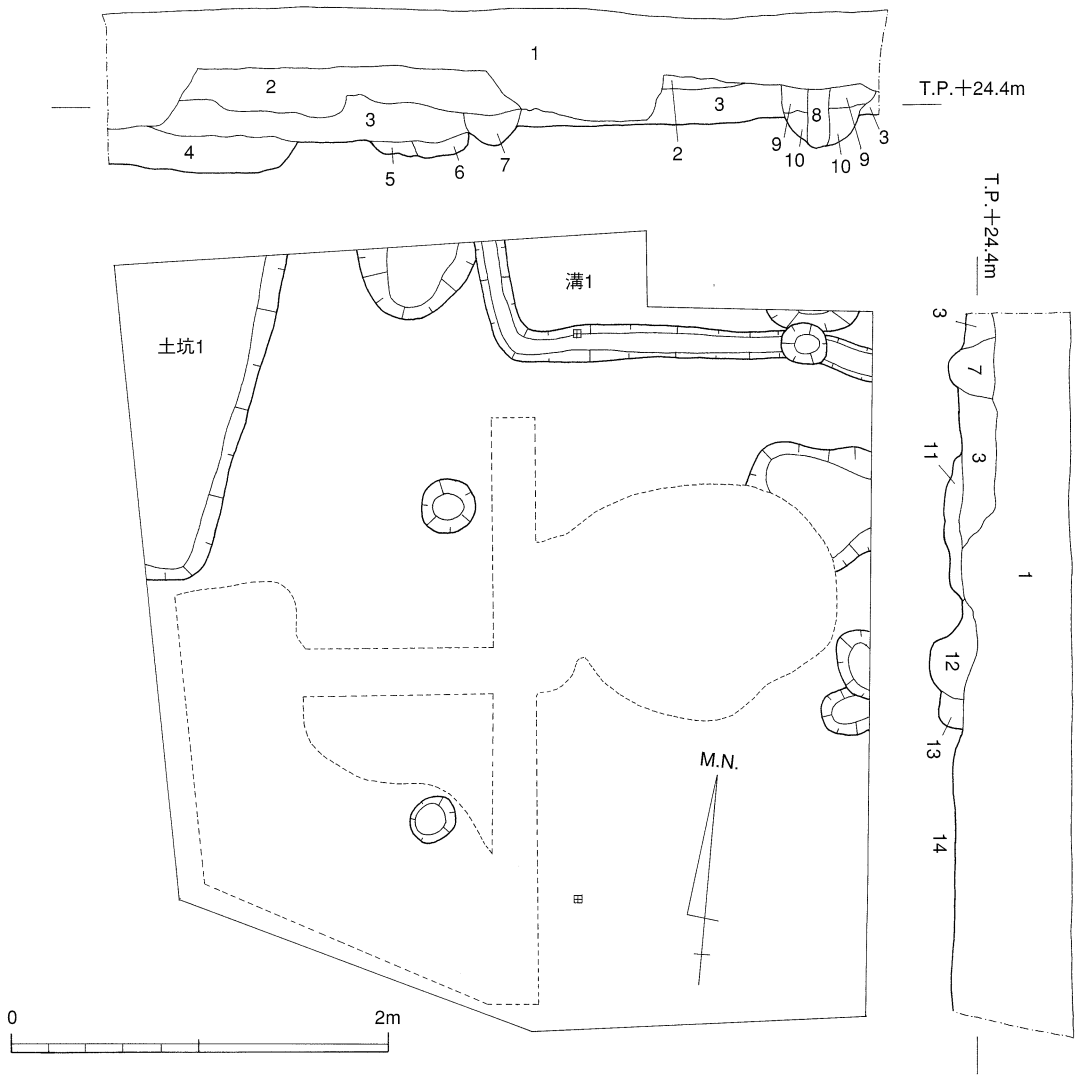
2．調査の概要

（1）基本層序

当該調査区における基本層序は概ね４層に大別される。第１層は現代の盛土である。第２層は黄褐色細粒砂～極細粒砂であり、旧耕作土とみられる。第３層の暗褐色シルト層は、弥生土器・土師器・須恵器等



第25図　調査地位置図（１：5,000）



1．現代の盛土。　2．黄褐色(2.5Y5/6)極細粒砂～細粒砂。　3．暗褐色(10YR3/3)シルト。礫(直径５cm以下)を少量含む。弥生～古墳時代の遺物包含層。　4．黒褐色(7.5YR3/1)シルト～極細粒砂。礫(直径３cm以下)を多く含む。　5．にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトと基盤層の混合土（１：１）。　6．黒褐色(10YR8/2)シルト～極細粒砂。　7．黒褐色(10YR8/2)シルト。　8．黒褐色(10YR2/3)シルト。柱の抜き取り痕か。　9．黒褐色(10YR2/3)極細粒砂～シルト。基盤層ブロック(直径５～10cm)を少量含む。　11．にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト～極細粒砂。礫(直径～３cm)を少量含む。　12．黒褐色(10YR3/2)極細粒砂～シルト。礫(直径～３cm)を少量含む。炭化物を微量含む。　13．黒褐色(10YR3/2)極細粒砂。基盤層ブロック(直径５～10cm)を多く含む。炭化物を微量含む。　14．明黄褐色(10YR7/6)シルト。礫(直径～３cm)を多く含む。当該調査区の基盤層。

第26図　調査区平面・断面図（１：40）

の遺物包含層である。古墳時代後期以降に形成されたものと考えられる。第４層の明黄褐色シルトは当該調査区の基盤層に相当する。今回は、第４層上面において遺構を検出し調査を実施した。以下、検出した主要な遺構ならびに遺物について、その概要を述べていく。

（２）検出した遺構

溝　１　調査区北側で検出した直角に曲がる溝である。検出幅約15cm、５cm程度の深度を有する。竪穴住居の壁溝である可能性も考えられるが、調査面積の制約、出土遺物の皆無など、遺構の性格ならびに掘削時期の判断材料に乏しく詳細は不明である。

土坑１　調査区北西部で検出した。検出幅は90cm以上、深度は約20cmをはかり、ほぼ平坦な基底面を有する。コーナー部分もほぼ直角に屈曲することから、竪穴住居の一部である可能性が考えられるが、それに伴う柱穴や壁溝等が確認できず、断定できるまでには至らない。埋土は黒褐色極細粒砂（～シルト）の単一層で構成され、須恵器・土師器砕片を含むものであったことから成立時期としては古墳時代後期のものと考えられる。

その他の遺構　他にピット５基、土坑状遺構２基を確認しているが、いずれも深度が浅く、調査範囲による制約等から他の遺構との有機的な関連を見い出すことができなかった。

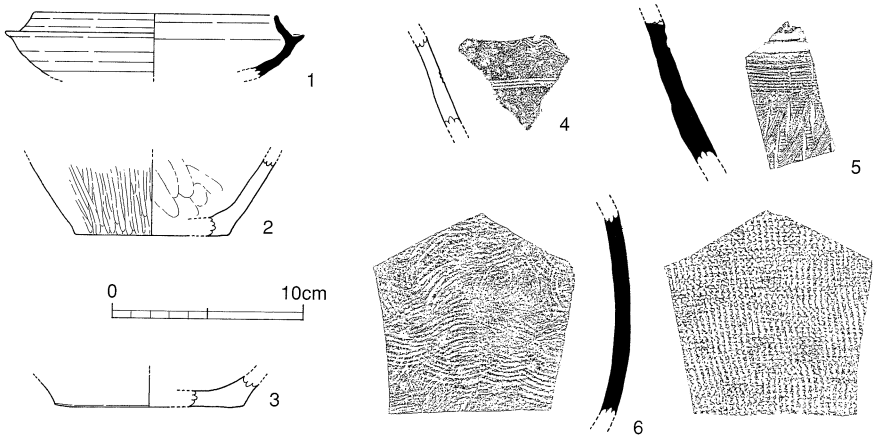
（３）出土遺物

遺物収納コンテナにして１箱分出土したが、その大半は土坑１出土のものであり、これに続いて遺物包含層（第３層）出土のものが占めた。よって、ここでは主に土坑１出土遺物の特徴についての報告を行う（第27図）。

３～６が土坑１出土の遺物である。３は弥生中期の甕もしくは壷形土器の底部片であろう。底部直径は約10cmである。内外面ともに摩滅が著しく調整は不明である。４は砕片であるが弥生中期の壷形土器の頸～胴部片であろう。外面に櫛描文が施される。６は須恵器大甕の体部に相当しよう。外面に格子目タタキ痕、内面には同心円文の当て具痕が明瞭にみとめられる。５は須恵器器台の脚部片とみられる。外面には沈線ならびに波状文が施される。

１は遺物包含層出土の須恵器杯身砕片である。復元直径は12.7cmをはかり、形態的には６世紀後半代の特徴を有しているものとみられる。２は弥生中期の甕もしくは壷形土器の底部であろう。底部直径は8.0cmをはかり、外面は縦方向のミガキを施す。内面の調整技法は摩滅のため不明である。

これら遺物の帰属時期は概ね弥生時代中期から古墳時代後期間に収まることから、ここで取り上げることができなかった他の遺構ならびに遺物の帰属時期についても、同様の時期幅内に収まるものとみられる。



第27図　出土遺物（１：４）

3．まとめ

今回の調査は調査面積の制約があったものの、弥生時代中期～古墳時代後期の集落の一部を検出することができた。遺構・遺物の中心時期が古墳時代後期であったことは周辺の調査成果を追随するものであり、古墳時代後期における本町集落の範囲を特定するうえでまた一つ貴重な情報を得ることとなった。以下ではその成果について紹介する。

まず旧地形についてであるが、当該調査区における基盤層は西側に向かって徐々に下がっていることから、西側に谷地形が所在した可能性が考えられる。今回の調査区よりやや北方の第28次調査地点では、調査地の南側に小規模な谷地形を想定しているが、こうした所見は今回の調査成果と矛盾せず、むしろ谷地形が所在する可能性がより高くなったといえよう。そして、今回の調査地点が古墳時代後期の集落範囲としては縁辺部であったことも合わせて想定されよう。このことは遺構の密度や出土遺物の量からも推測が立つ。

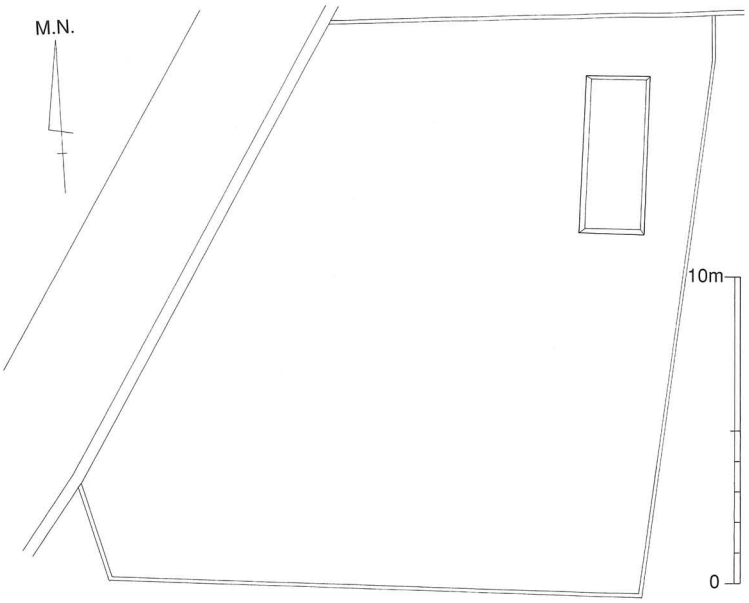
次に出土遺物に注目すると、砕片とはいえ弥生中期の土器片が目立った。今回当該時期の遺構は未検出であったが、周辺に弥生中期の遺構が所在する可能性が高い。このことは、今回の調査地点を中心として半径50m以内の調査地点のうち、第21次、第23次調査地点においても弥生中期の遺構または遺物が確認されており、それらの分布範囲をみる限りある程度の面的な広がりが想定できる。

以上、限られた調査範囲のために全容が解明できなかった遺構の詳細については、今後、周辺における調査によって補完されていくこととなろう。よって調査地周辺の開発に対しては慎重な対応を期すべきである。

第Ⅳ章　金寺山廃寺第５次調査

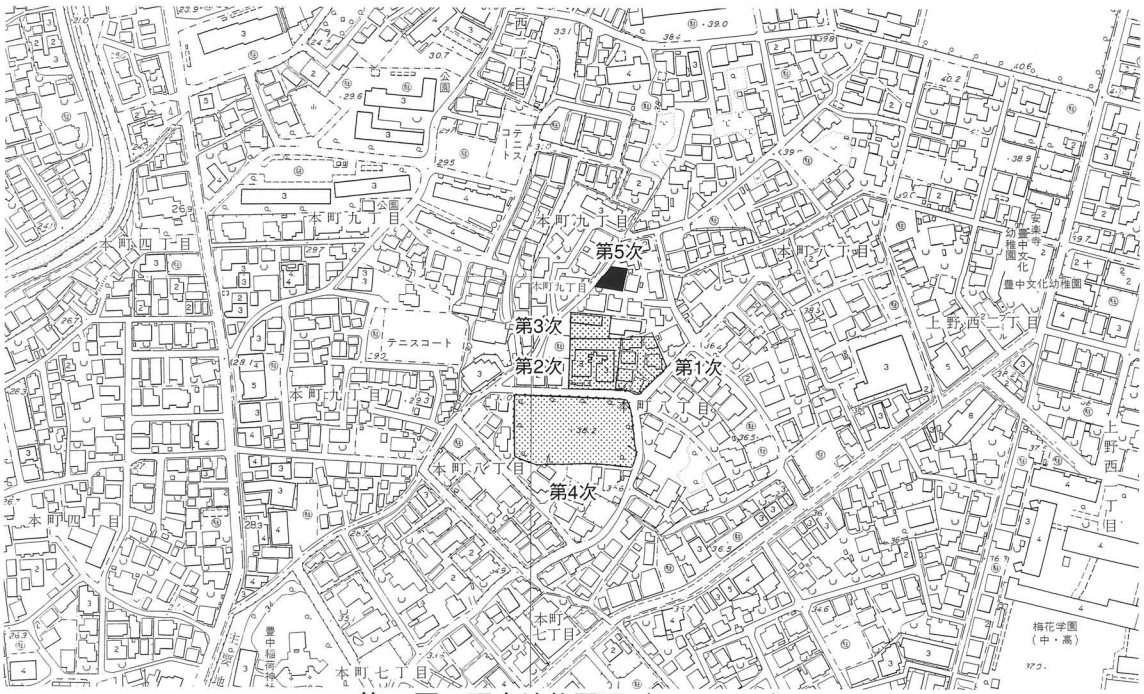
１．調査の経緯

当調査区は、豊中市本町８丁目112に所在する。平成18年７月10日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて平成18年７月12日に確認調査を行ったところ、地表下30～70cmで古瓦片を含む遺物包含層を確認した。申請地では個人住宅の建設が予定されていたが、それに伴う地盤改良深度が遺物包含層にまで及ぶことが判明したため、協議の結果、古瓦の出土状況を確認するための本調査を実施することとなった。

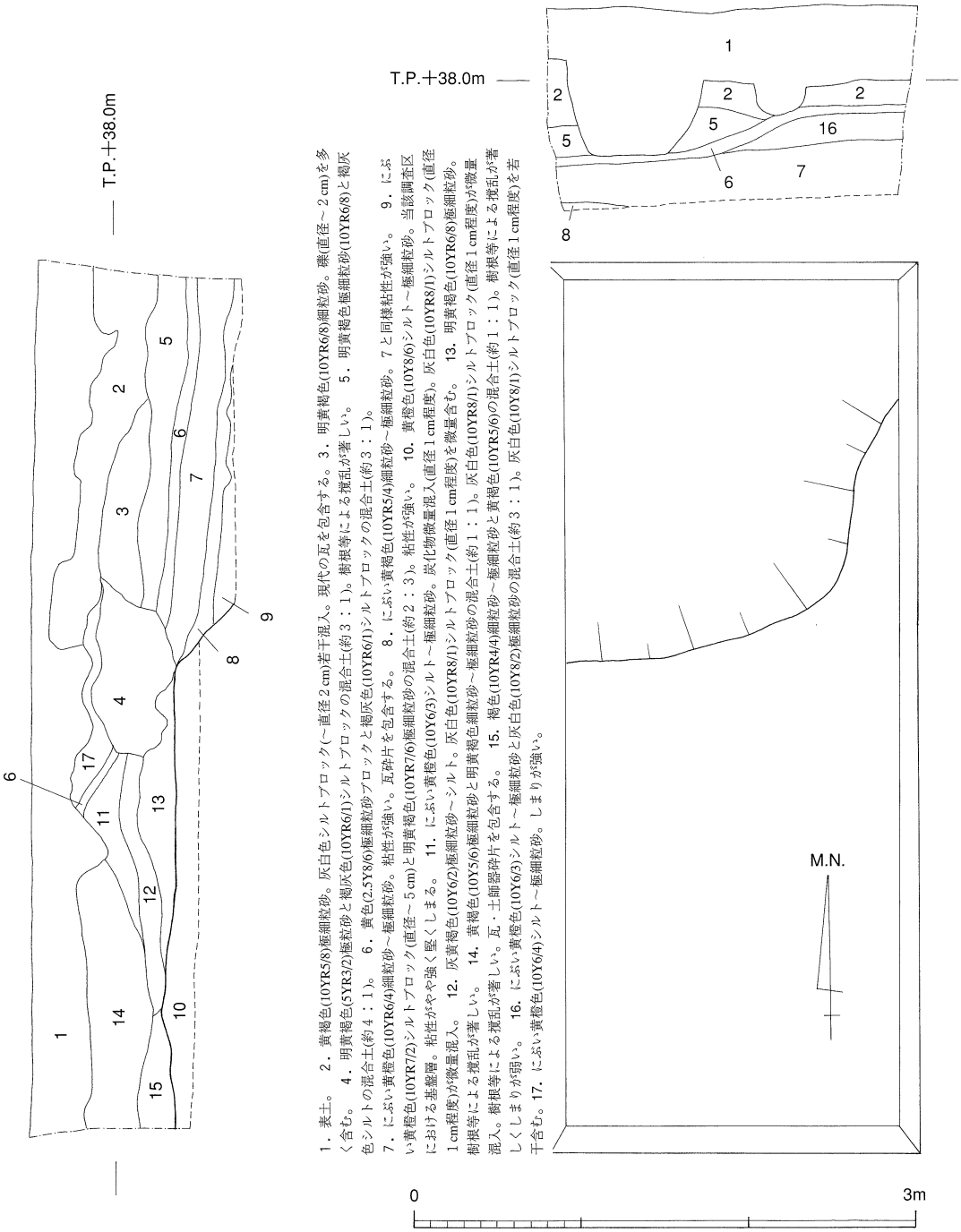


第28図　調査範囲図（１：250）

調査は平成18年８月３日から平成18年８月７日にかけて実施し、調査面積は確認調査成果を考慮し、建築対象面積のうち古瓦片の包含層を確認したトレンチ周辺の10m²であった。



第29図　調査地位置図（１：5,000）



1．表土。　2．黄褐色(10YR5/8)極細粒砂。灰白色シルトブロック(～直径2cm)若干混入。現代の瓦を包含する。3．明黄褐色(10YR6/8)細粒砂。礫(直径～2cm)を多く含む。　4．明黄褐色(5YR3/2)極粒砂と褐灰色(10YR6/1)シルトブロックの混合土(約3：1)。樹根等による攪乱が著しい。　5．明黄褐色極細粒砂(10YR6/8)と褐灰色シルトの混合土(約4：1)。　6．黄色(2.5Y8/6)極細粒砂ブロックと褐灰色(10YR6/1)シルトブロックの混合土(約3：1)。
7．にぶい黄橙色(10YR6/4)細粒砂～極細粒砂。粘性が強い。瓦砕片を包含する。　8．にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂～極細粒砂。7と同様粘性が強い。　9．にぶい黄橙色(10YR7/2)シルトブロック(直径～5cm)と明黄褐色(10YR7/6)極細粒砂の混合土(約2：3)。粘性が強い。　10．黄橙色(10YR8/6)シルト～極細粒砂。当該調査区における基盤層。粘性がやや強く堅くしまる。　11．にぶい黄橙色(10Y6/3)シルト～極細粒砂。炭化物微量混入(直径1cm程度)。灰白色(10YR8/1)シルトブロック(直径1cm程度)が微量混入。　12．灰黄褐色(10Y6/2)極細粒砂～シルト。灰白色(10YR8/1)シルトブロック(直径1cm程度)を微量含む。　13．明黄褐色(10YR6/8)極細粒砂。樹根等による攪乱が著しい。　14．黄褐色(10YS/6)極細粒砂と明黄褐色細粒砂～極細粒砂の混合土(約1：1)。灰白色(10YR8/1)シルトブロック(直径1cm程度)が微量混入。樹根等による攪乱が著しい。瓦・土師器砕片を包含する。　15．褐色(10YR4/4)細粒砂～極細粒砂と黄褐色(10YR5/6)の混合土(約1：1)。樹根等による攪乱が著しくしまりが弱い。　16．にぶい黄橙色(10Y6/3)シルト～極細粒砂と灰白色(10YR8/2)極細粒砂の混合土(約3：1)。灰白色(10YR8/1)シルトブロック(直径1cm程度)を若干含む。17．にぶい黄橙色(10Y6/4)シルト～極細粒砂。しまりが強い。

第30図　調査区平面・断面図（1：40）

２．調査の概要

（１）遺跡の概要

金寺山廃寺は通称豊中段丘のほぼ中央部、千里川左岸の中位段丘末端部、標高約37mの場所に立地する。江戸時代文化年間に本町８丁目121番地から寺院の塔心礎とみられる礎石が発見され、現在、看景寺（豊中市本町所在）が所蔵している。この地域はかつて「塔岡」と呼ばれ、また「金寺山」の字名が残っている。ここで採集された瓦については、藤澤一夫氏（故人）が『豊中市史』第一巻（昭和36年）おいて考察・報告しており、その中では飛鳥山田寺系の軒丸瓦と重弧文の軒平瓦の組み合わせで始まり、平安時代初期までの型式を含むことが記されている。

昭和53年以降、４次にわたる発掘調査を実施し、これによって古代寺院関連遺構は勿論のこと、古墳時代終末期頃の埋葬施設、近世から近代の用水・耕作遺構、防空濠跡等の所在が明らかになっている。今回の調査地点は既往の調査地よりも北方に位置し、遺跡の北限付近に相当する。

（２）基本層序

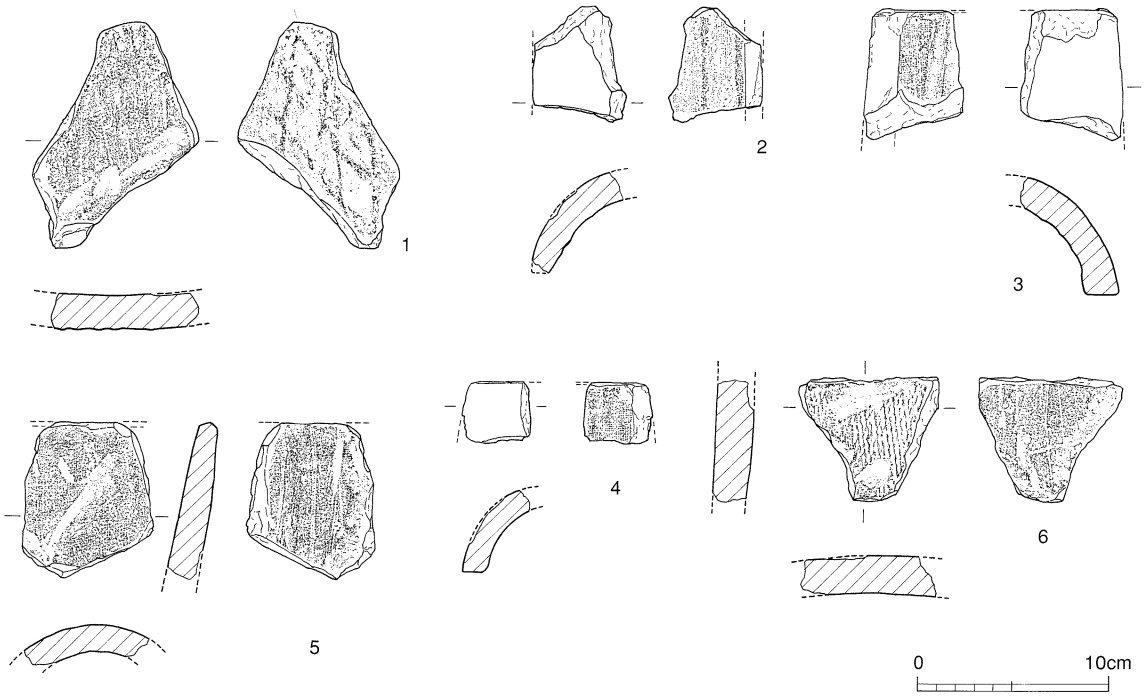
今回の調査区では基本層序というべき層序は確認されなかった。付近は近代までは竹藪であったためか、表土以下は過去の調査地点と同様、近世～近代以降に撹乱を数多く受けていることがうかがえる。特にタケノコを産出していたと思われ、土取り、土入れを繰り返し行っていたと推測される。それを示すかのように、近世以降に形成されたであろう土坑・掘り込み（※10層より上位の層のうち、７～９層を除く全てが該当する）中に縄目を残す古瓦の砕片が含まれている。

（３）検出した遺構と遺物

検出した遺構　調査地点はすでに地形の改変を受けている可能性が高いこともあり、明確な遺構は確認されなかった。今回確認した基盤層の落ち込みも、自然的あるいは人工的のどちらの要因で形成されたかは、掘削深度の制約等から明らかにし得なかった。

出土遺物（第31図）　限られた調査面積のなかで遺物収納箱にして１箱程度出土している。すべて瓦砕片であり、なかには近現代に属する瓦も若干含まれていた。なお、瓦当部分は見つかっていない。以下では図化可能であった古瓦６点について、主に製作技術上の特徴を記す。

１のにぶい橙色を呈する平瓦は凸面に格子目タタキを施すもので、今回図化し得た瓦中で唯一金寺山廃寺創建時に伴う可能性がある。２～５の丸瓦片はいずれも凹面に布目痕を残し、凸面はナデによる仕上げがなされる。平安時代以降の所産であろう。６の灰白色を呈する平瓦は凸面に縄目が施される。今回出土の古瓦に二次焼成はみとめられなかった。



第31図　出土遺物（1：4）

3．まとめ

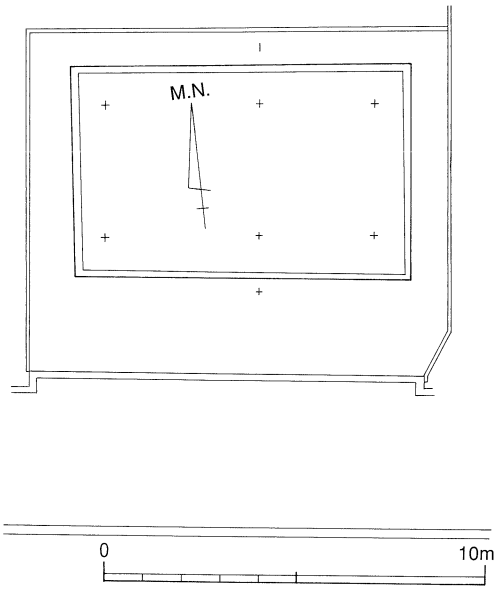
今回の調査では寺院に関連する遺構は確認されなかったが、遺物ではごくわずかとはいえ、金寺山廃寺創建時に比定される瓦片が出土したことは、付近に寺院が所在した可能性を示す証左と言えよう。

これまでの研究成果によると、金寺山廃寺の位置は今回の調査地よりもやや南方で、現在看景寺にて保存されている塔心礎の出土地点（現豊中市本町８丁目122番地）や多量の古瓦散布地点などを含んだ一帯が推定されている。よって今回の調査地は、寺域としては縁辺部あるいは寺域外の位置付けがなされることになるが、今回の遺構・遺物の検出状況は、すでに地形の改変がなされているとはいえいずれも稀薄な様相を呈することから、従来の推定位置に対して肯定的な結果を与えることとなろう。しかしながら、ごく少量とはいえ創建時の瓦が出土するなどの見逃せない事実も含まれており、今後とも付近の開発等に対しては慎重に対処する必要がある。

第Ⅴ章　岡町遺跡第２次調査

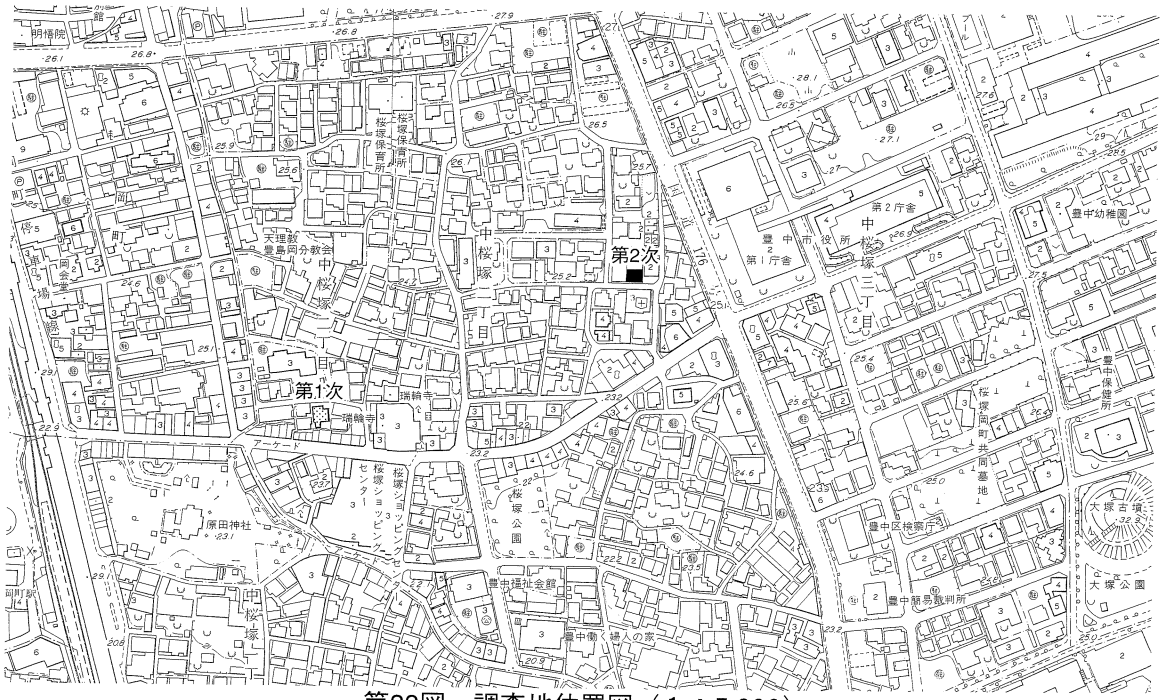
１．調査の経緯

当調査区は、豊中市中桜塚２丁目282－１に所在する。平成18年４月12日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて平成18年６月８日に確認調査を行ったところ、地表下50～70cmで土師器・陶磁器・瓦砕片を含む遺物包含層を確認し、地表下90～100cmで遺構面を確認した。申請地では個人住宅の建設が予定されているが、それに伴う基礎掘削時の地盤改良深度が遺構の破壊を免れないことが判明したため、協議の結果、本調査を実施することとなった。

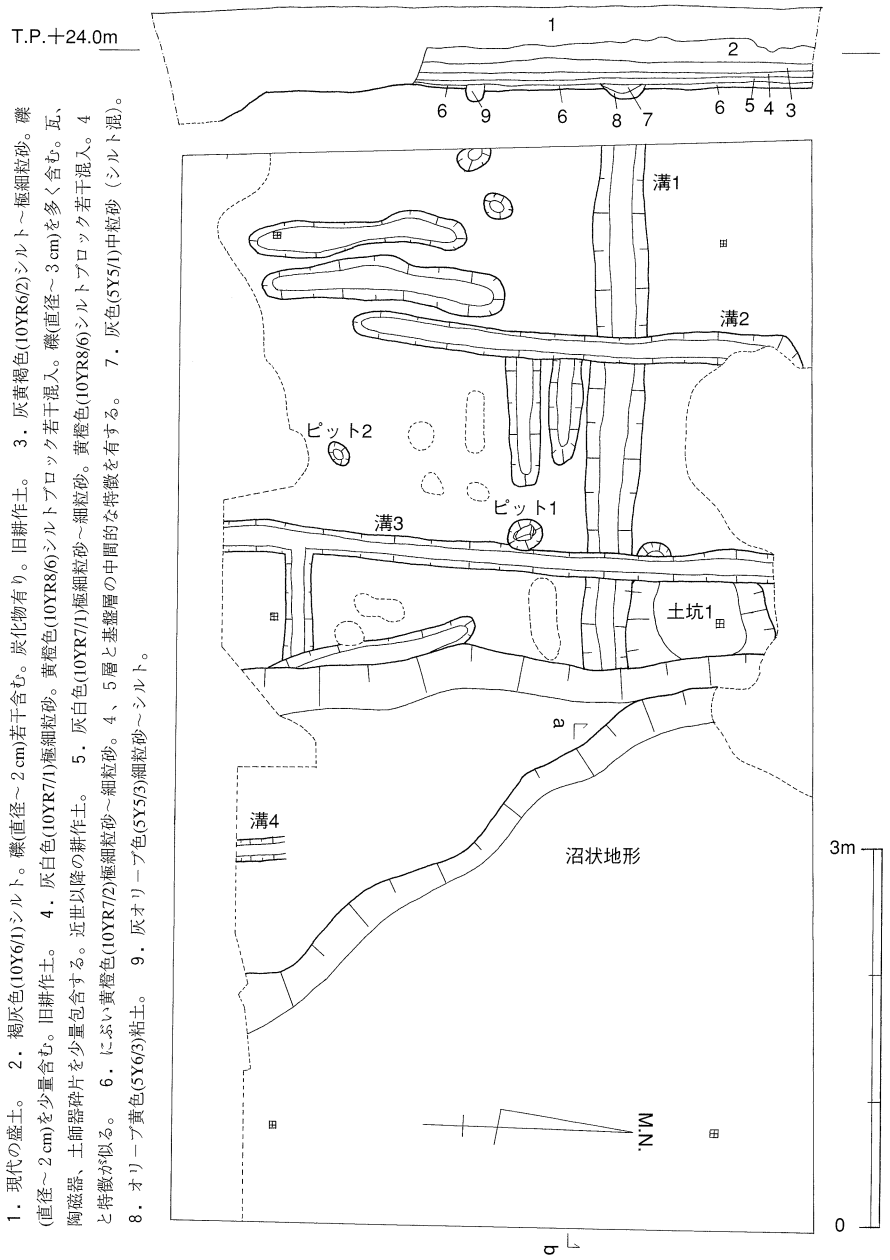


第32図　調査範囲図（１：200）

調査は平成18年７月３日から平成18年７月31日にかけて実施し、調査面積は建築対象面積である55m²であった。なお、今回は廃土置き場のスペースの都合上、場内反転による調査を実施している。



第33図　調査地位置図（１：5,000）



1．現代の盛土。　2．褐灰色(10Y6/1)シルト。礫(直径～2cm)若干含む。炭化物有り。旧耕作土。　3．灰黄褐色(10YR6/2)シルト～極細粒砂。礫(直径～2cm)を少量含む。旧耕作土。　4．灰白色(10YR7/1)極細粒砂。黄橙色(10YR8/6)シルトブロック若干混入。礫(直径～3cm)を多く含む。瓦、陶磁器、土師器破片を少量包含する。近世以降の耕作土。　5．灰白色(10YR7/1)極細粒砂～細粒砂。黄橙色(10YR8/6)シルトブロック若干混入。4と特徴が似る。　6．にぶい黄橙色(10YR7/2)極細粒砂～細粒砂。4、5層と基盤層の中間的な特徴を有する。　7．灰色(5Y5/1)中粒砂（シルト混）。
8．オリーブ黄色(5Y6/3)粘土。　9．灰オリーブ色(5Y5/3)細粒砂～シルト。

第34図　調査区平面・断面図（1：60）

2．調査の概要

（1） 基本層序

調査区における基本層序は5層に大別される。第1層は現代の盛土、第2層は宅地化直前段階までの旧耕作土層に相当すると考えられる。続いて第3層の灰黄褐色極細粒砂～シルト、ならびに第4層灰白色極細粒砂はいずれも近世遺構の瓦・陶磁器破片を包含する土層である。近世以降の耕作土層であろう。第5層の黄色～灰白色シルト～極細粒砂は基盤層に相当する。今回の調査は第5層上面において遺構検出を行い調査を実施した。

（２）検出した遺構と遺物

以下では主要な遺構についてその概要を述べることとする。

溝１　調査区内を東西方向に走る溝である。検出幅50cm、深度15cmをはかる。埋土からは水路としての機能は想定しにくく、何らかの区画溝であった可能性が高い。後述の沼状地形との関係も不明である。出土遺物は土師器砕片を数点出土したのみで、掘削時期も不明である。

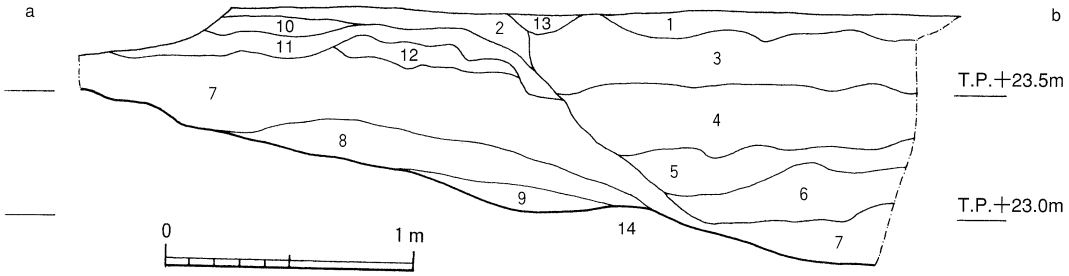
溝２～４　調査区を南北に走るもので概ね検出幅30cm程度、深度約５cmをはかる。埋土からは水路としての機能は想定しにくく、溝の性格ならびに掘削時期は溝１と同様に不明である。

土坑１　調査区北側で検出した。平面は円形ないしは隅丸方形が考えられるが、溝１、溝３に切られているため正確な輪郭は不明である。検出幅は東西0.6m以上、南北1.2mの規模を有し、深度は約0.2mをはかるものである。埋土は褐灰色シルト～極細粒砂を主体とする。土坑の掘削時期ならびに性格等は不明である。

ピット１・２　ピットは調査区西半部を中心に計５基検出している。なお、調査区内では柱穴と断定できる遺構が確認されていないため、今回柱穴の可能性が高い柱穴状遺構も含めて「ピット」と呼称する。ピット１・２は調査区西部で検出したもので、いずれも直径20cm、深度15cm程度をはかるものであった。ピット１では礎石が残っていた。出土遺物はピット２から15～16世紀代の所産とみられる土師器小皿が出土している。

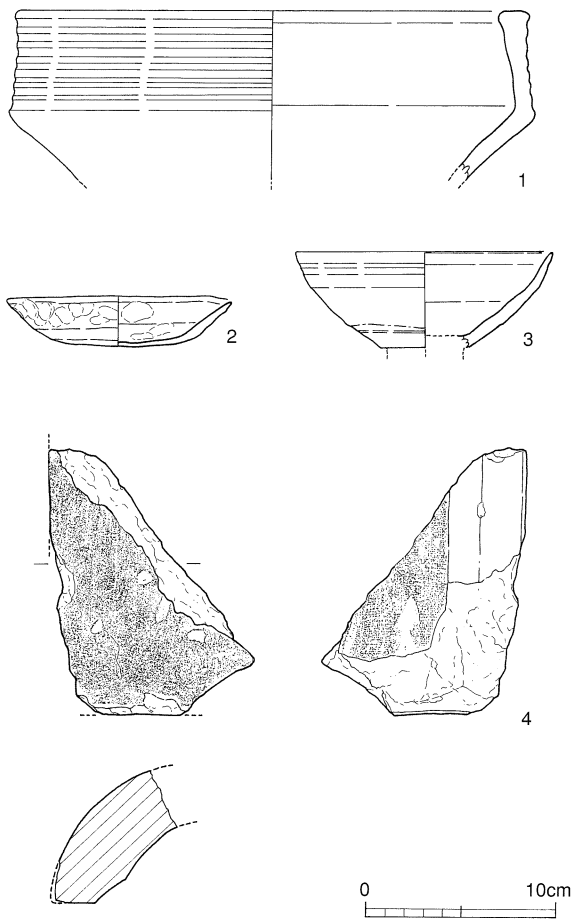
沼状地形　調査区東半部で検出した。調査面積による制約のため全体の形状は不明であるが、検出幅は4.2m以上、基底面は東側へ徐々に下がっていき調査区内では最深のところで0.96mをはかる。この斜面はさらに東側に向けて下がっていくが、調査範囲の制約上最深部は検出できなかった。したがって沼状地形全体の規模・深度等は不明である。

埋土は黒褐色シルトに植物遺体を多量に含んだ土層が20～30cmの厚さで全体を覆っており、その直上に基盤層ブロック土を多量に含んだ埋戻し土が堆積している。遺物はごく少量の出土にとどまり、16世紀代の遺物が目立つことから、当該地形が調査区西側で検出されたピットと



１．黄橙色(10YR8/8)細粒砂と灰黄褐色(10YR6/2)極細粒砂の混合土（約１：２）。　２．にぶい黄橙色(10YR7/2)極細～中粒砂。礫（～３cm）を少量含む。　３．灰黄褐色(10YR6/2)極細粒砂と黄橙色(10YR8/8)極細粒砂～シルトブロックの混合土（約２：１）。　４．灰色(N4/0)粘土と灰色極細粒砂の混合土（４：１）。礫（～２cm）を少量含む。　５．青灰色(5B5/1)粘土に極細粒砂を約20％含む。植物遺体を多数包含する。　６．暗青灰色(5B4/1)粘土に細～中粒砂を約15％含む。礫（～２cm）を少量含む。　７．黒色(N2/0)シルト。植物遺体を多数包含する。　８．灰色(N5/0)中粒砂。礫（～２cm）を少量含む。　９．灰色(N4/0)細～中粒砂。礫（～３cm）を少量含む。　10．灰黄褐色(10YR5/2)極細粒砂。黄褐色(10YR8/6)極細粒砂ブロックを若干含む。　11．黄褐色(10YR5/6)シルト～極細粒砂と灰黄褐色(10YR6/2)の混合土（３：１）。　12．褐灰色(10YR6/1)極細粒砂～シルト。黄橙色(10YR8/8)シルトブロックを少量含む。　13．褐灰色(10YR5/1)極細粒砂。溝埋土。　14．青灰色(5B6/1)シルト。礫（～５cm）を多数含む。基盤層。

第35図　沼状地形断面図（１：30）



第36図　出土遺物（1：4）

同時期の所産である可能性が考えられる。今回の遺構の分布は沼状地形手前まで及んでいることがうかがえる。なお、沼状地形は最終的には16世紀末以降に何らかの事情で人為的に埋め戻されたものとみられる。

出土遺物（第36図）　大半は沼状地形出土のものであった。1･2･4は沼状地形からの出土である。1は弥生中期にみられる直口鉢の可能性がある。復元口径26.4cmをはかり、口縁部直下に7条の凹線がみとめられる。3は瀬戸美濃系の天目茶碗であろう。口径13.6cm、残存高5.1cmをはかる。16世紀後半代に収まるものとみられる。4は凹面に布目痕がみとめられる丸瓦片である。2はピット2出土の土師器小皿である。口縁部直径11.8cm、器高2.7cmをはかり、外面はにぶい黄橙色、内面は褐灰色を呈する。外面はユビオサエが顕著にみとめられる。在地産とみられ、15～16世紀代に帰属するものとみられる。

3．まとめ

岡町は近世以降、原田神社の北側の能勢街道に沿って形成された町場として知られる。原田神社は中世には付近72か村の産土神であったということから、神社周辺に近世以前に集落が存在した可能性は充分考えられることや、調査地西方約200mの地点で実施された岡町遺跡第1次調査で鎌倉～戦国時代にかけての柱穴や区画溝等の遺構が確認されていることなどを考慮すると、今回の調査地周辺にまで中世集落の範囲が及んでおり、沼状地形が中世岡町遺跡の東限であったことも可能性として考えられないだろうか。また出土瓦は調査地の近隣に寺院の存在が予想される遺物でもある。これには16世紀後半に焼失したと伝えられる「善行寺（現 瑞輪寺）」との関連がうかがえるかもしれないが、その真偽は今回の限られた遺構遺物からでは不明である。

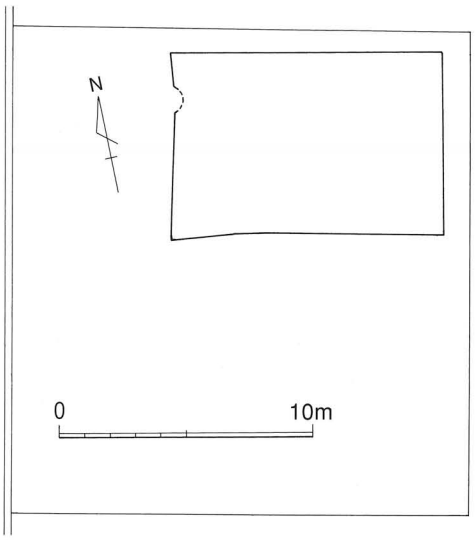
次に弥生中期の遺物は本遺跡では初の出土事例であった。このことは調査地付近に弥生集落が所在した可能性があり、遺跡の初現が大幅に引き上げられる可能性が出てきた。

いずれにせよこれらの課題は現在のところ推測の域にとどまっていることから、今後の調査によって少しずつ明らかにされることを期待したい。

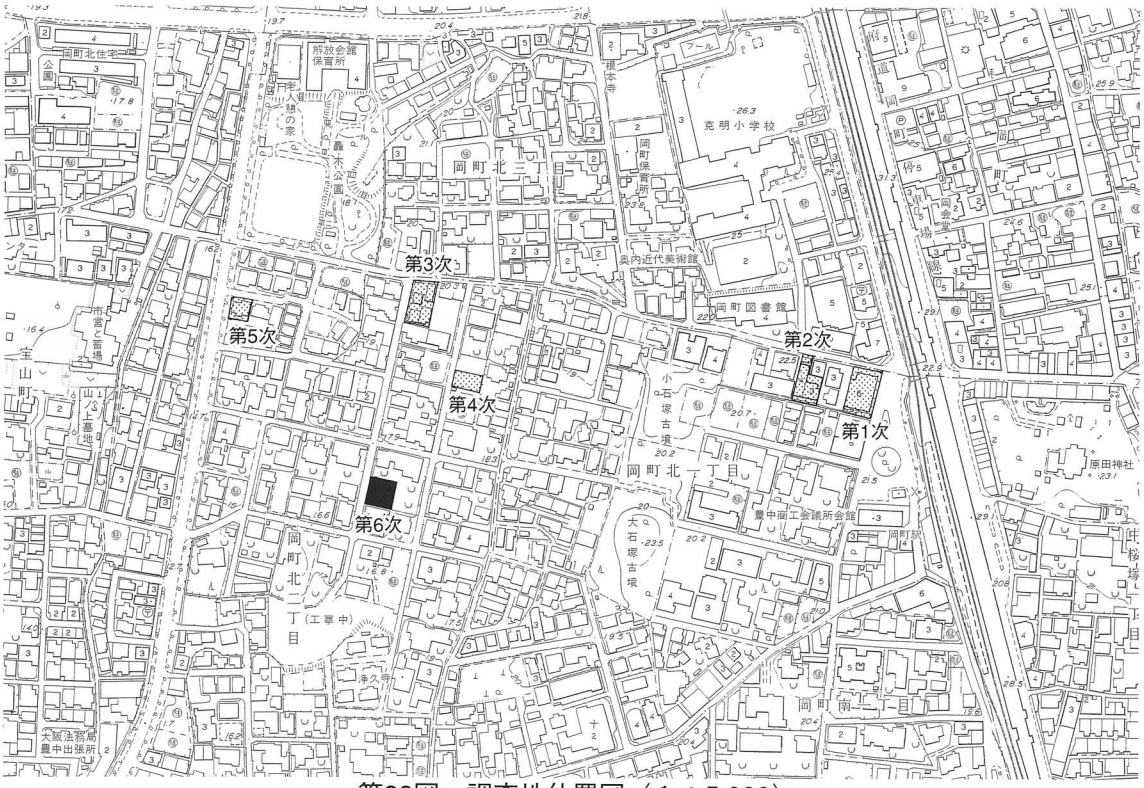
第Ⅵ章　岡町北遺跡第６次調査

１．調査の経緯

当調査区は、豊中市岡町北２丁目８に所在する。平成18年（2006年）４月25日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて、４月27日に確認調査を行ったところ、地表下約５～20cmで段丘基盤層を確認し、その上面で柱穴を検出した。当敷地では個人住宅の建設が予定されていたが、それに伴う基礎掘削により遺構の損壊は免れないことが判明した。このため、遺構の保存等について協議を行った結果、計画の変更は困難であることから、本調査を実施することになった。なお、調査は平成18年（2006年）５月15日から５月26日にかけて、建築範囲である64m²を対象に実施した。



第37図　調査範囲図（１：300）

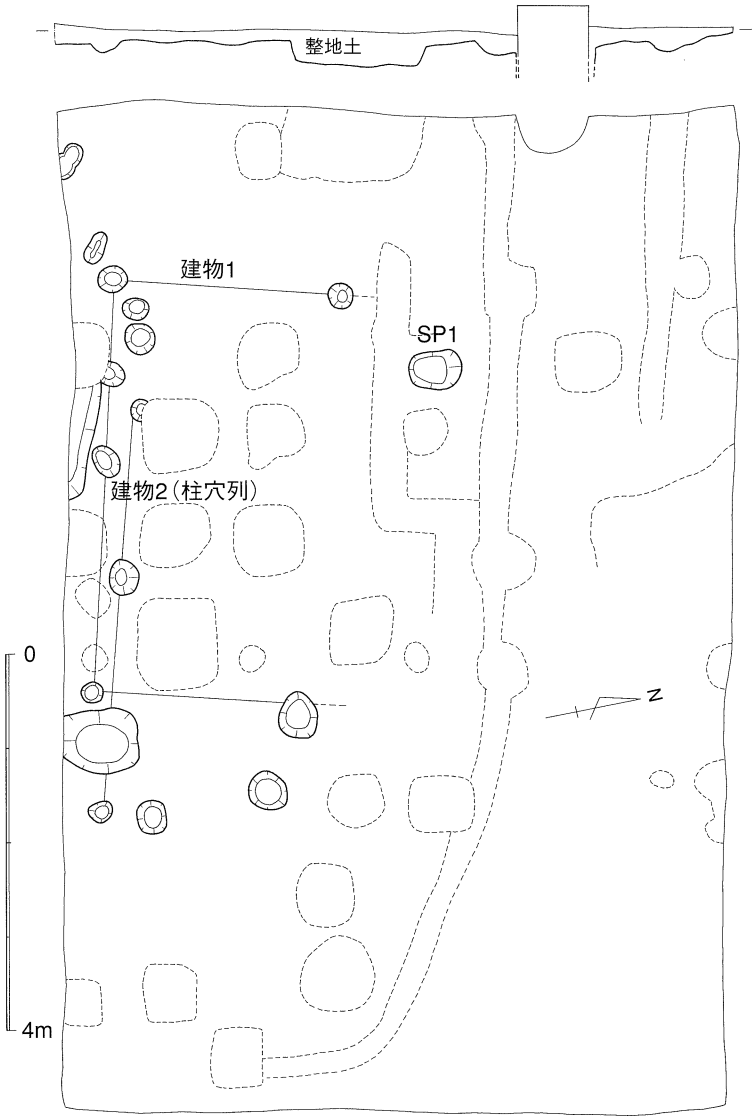


第38図　調査地位置図（１：5,000）

2．調査の概要

（1） 基本層序

当調査区では、確認調査で地表下５～20cmで検出したが、敷地の一部では段丘基盤層が露出するなど、旧地形は著しく削平されている。調査区の壁面で確認した土層も、基本的には家屋の解体に伴う整地土が主体を占め、旧耕作土などは確認されなかった。旧地形の削平は、岡町住宅経営株式会社による当地域の宅地開発に起因すると考えられる。なお、当調査区一帯には、宅地分譲時に作られたレンガ塀の一部が残存するなど、明治末期～大正期の住宅地の名残が各所に見られる。



第39図　調査区平面・断面図（１：80）

（２）検出した遺構と遺物

当調査区は、旧地形の削平が著しいにも関わらず、柱穴等の遺構を検出した。また、これらの柱穴から掘立柱建物１棟とその可能性が考えられる柱穴列１条を復元した。

以下、これらの遺構について、その詳細を述べることにする。

建物１　調査区南半部で検出した東西２間（4.4m）×南北１間以上（2.4m以上）の規模を有する掘立柱建物である。建物の面積は、復元できた部分で10.56m²をはかる。それぞれの柱穴は直径15cm、深さ５cm前後と著しく削平されていることをふまえると、建物は北方に広がるものと考えられる。建物の全体像は明確ではないが、柱穴の分布状況から南北方向に主軸をとる可能性が高い。この場合、建物の主軸方向は、N-13°-Eである。なお、柱穴から遺物が出土していないため、建物の時期は不明である。ただ、後述するSP１の検出面からの深さと比較すると、削平が著しいことは明らかであり、これに先行する所産と考えられる。また、柱穴の形状などを加味すると、選択肢の一つとして弥生時代終末期頃の可能性が指摘できる。

建物２　調査区南部で検出した東西２間（5.0m）の柱穴列である。建物１と同じく、著しく削平されていることから、掘立柱建物に伴う柱穴の一部となる可能性が高いと判断し、建物として取り扱った。建物の主軸方向は不明であるが、柱穴列の方向はN-85°-Wである。

ＳＰ１　調査区中央やや西よりで検出した、平面長方形状を呈する柱穴である。長軸長50cmをはかり、柱痕から使用された柱は直径18cm前後と想定できる。SP１からは、土師器杯または皿と考えられる口縁部の極細片が出土していることから、奈良時代頃の所産と考えられる。

そのほか　今回の調査区では、ほぼ全面にわたって、建物の基礎が検出された。これらは独立基礎の形状を呈することから、モルタルを土台に礎石を置く構造が推定される。ただし、調査区内で確認できた基礎は、建物の一部にとどまること、また土台の形状はほぼ同じで、束柱と柱の識別ができないことなどから、間取りの復元はできなかった。これらの基礎は、岡町住宅経営株式会社の分譲に伴って建築された建物に伴うものであることを、所有者よりご教示いただいた。

３．まとめ

今回の調査では、地表に段丘基盤層が露出する状況から、遺構は著しく削平されていることが予見された。実際、多くの柱穴が削平されており、旧状をとどめるものはSP１に限定される。しかし、こうした悪状況の中にあって、掘立柱建物が復元されたことは当初の予想を超える成果と言えよう。

ところで、当遺跡における発掘調査は今回で６次になる。その調査のほとんどが遺跡北部で行われており、南部の実態については今回の調査ではじめて知られるようになった。また、北部における調査に関しても、１・２次調査区が岡町駅前付近、３・４次調査が轟木公園南方と

東西に分かれていることから、遺跡の全体像をまとめるまでには至らない。ただ、各調査区で奈良時代の遺構が確認されていることは注意される。隣接する山ノ上遺跡の北部においても、当該期の建物群が確認されており、伊丹街道沿いにこの時期の集落が展開した可能性が考えられる。一方、豊島郡衙の可能性が考えられる曽根遺跡の超大型建物群は桜塚街道上に、また穂積遺跡第４次調査の官衙的建物群は吹田街道・能勢街道の交差地に、北条遺跡第６次調査で存在が想定されている古代寺院は吹田街道沿いに立地する。このように、官衙的建物群や寺院が交通路に沿って分布する状況を鑑みると、交通路が律令期の集落の立地に影響を及ぼす可能性は十分に考えられる。

市内における律令期集落の調査事例は少なく、その立地に関する所見は十分に得られていない。しかし、当遺跡の集落が交通路に規制された可能性があるならば、律令期集落の立地を考える一つの指標になり得る。

また、今回の調査では掘立柱建物が確認されたが、これらの時期については明確にできなかったが、遺構の残存度から、弥生時代終末期に遡る可能性が残る。ところで、当調査区北方の第３次調査区では、弥生時代中期後半にはじまる集落の一部が確認されている。この時期、新免遺跡の集落はその範囲を著しく拡大し、東に隣接する本町遺跡でも小規模な集落が出現しており、集落の拡大に伴う分村と考えられている。岡町北遺跡の集落についても、本町遺跡と同じく新免遺跡における集落の拡大過程で分村した可能性が想定されている。このような中期に出現する段丘上の集落は、曽根遺跡をはじめ弥生時代終末期にその規模を拡大する傾向が認められる。とすれば、今回確認された掘立柱建物が、そうした集落の拡大過程で作られた可能性もあり得るだろう。

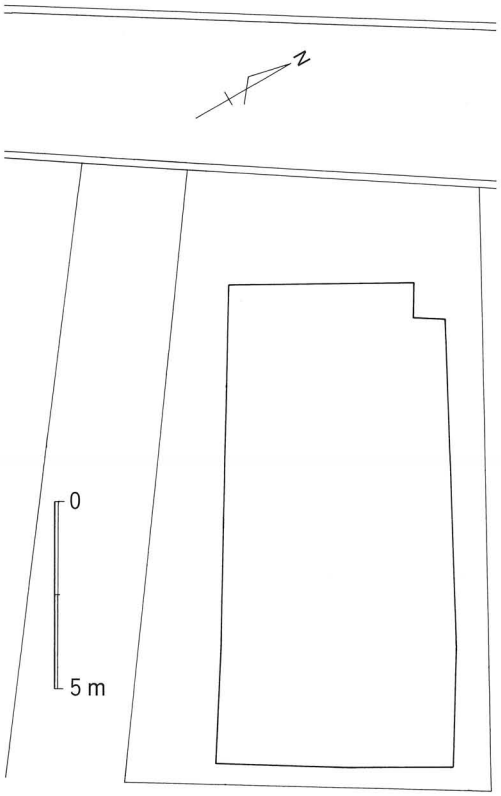
今回の調査は、遺跡南部においてはじめて行われた調査であり、その成果を具体的に説明にするには、周辺における成果の蓄積が必要とされる。しかし、その一方で、今回確認された遺構から得られた情報は、遺跡を検討する上で貴重な情報をもたらした。また、当調査区に限らず、一帯では現地表面から極めて浅いところで遺構面を検出している。よって、今後とも周辺における住宅建築に際しては、遺跡の特性を留意されることを提言しておきたい。

第Ⅶ章　岡町南遺跡第３次調査

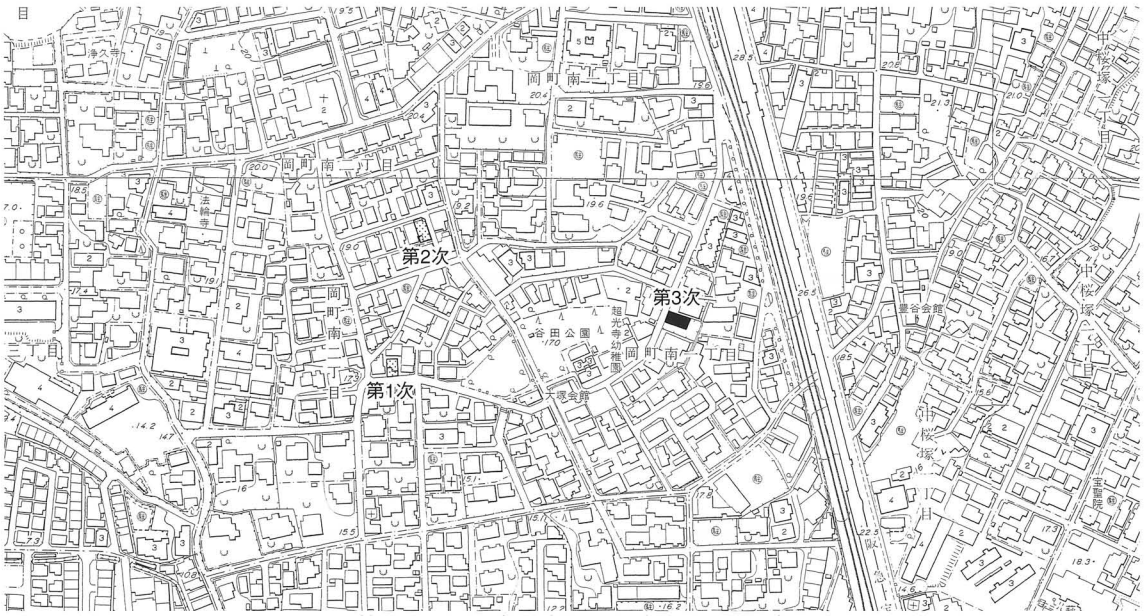
１．調査の経緯

当調査区は、豊中市岡町南１丁目88－１に所在する。平成18年（2006年）５月29日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて、６月１日に確認調査を行ったところ、地表下約30～40cmにおいて段丘形成層を確認し、その上面で柱穴などの遺構を検出した。計画されている個人住宅の基礎は現地表下96cmまで掘削するため、遺構の損壊を免れないことが判明した。このため、遺構の保存について協議を行った結果、計画の変更は困難であることから、本調査を実施することになった。

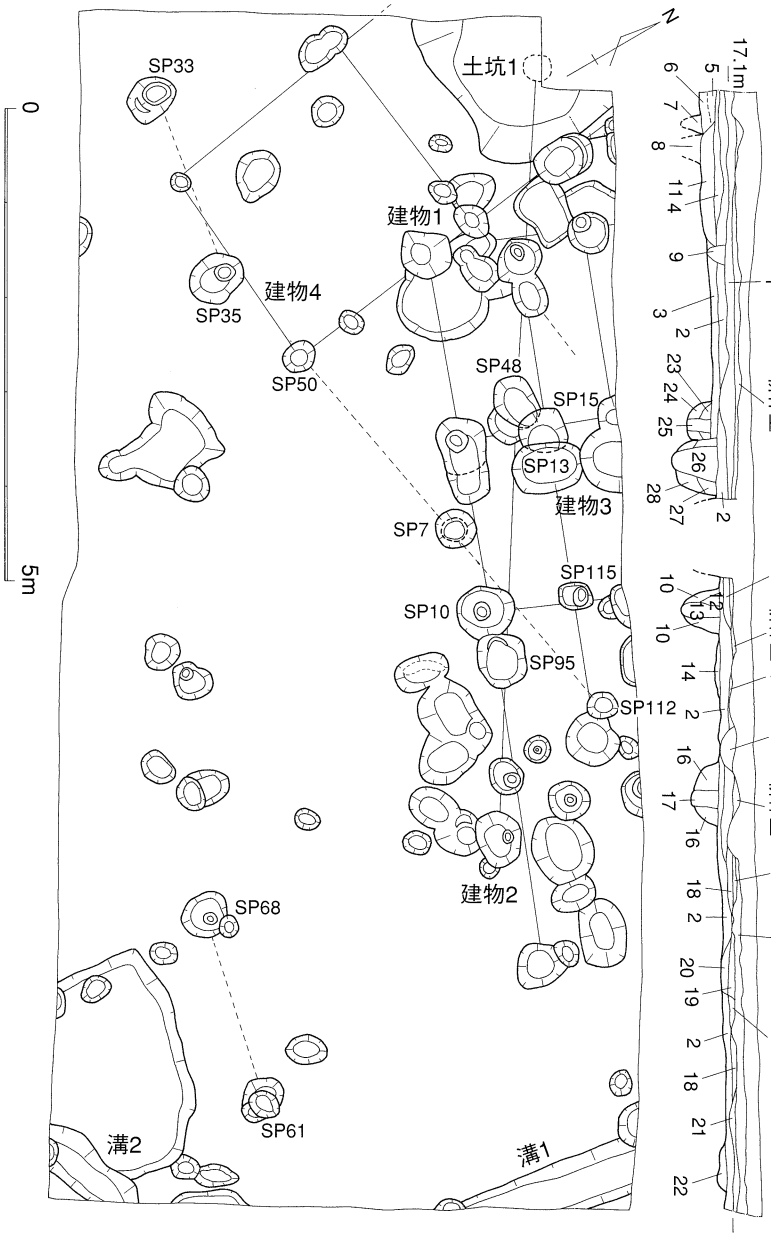
なお、当調査区は桜塚古墳群内に位置することから確認調査を行ったが、検出された遺構は古代の建物群に伴うものであり、地形的に隣接する岡町南遺跡から派生する集落の一部と考えられた。よって、確認調査後、岡町南遺跡の範囲を拡大し、岡町南遺跡第３次調査として本調査を実施した。



第40図　調査範囲図（１：200）



第41図　調査地位置図（１：5,000）



1．灰色（5Y5/1）極細～細粒砂　中粒砂を含む。
2．灰オリーブ色（5Y5/1.5）極細粒砂　細～中粒砂を含む。
3．褐灰色（10YR5/1）細～極細粒砂　礫・石を含む。
4．褐灰色（7.5YR6/1）細～極細粒砂　礫を極少量含む。
5．褐灰色（7.5YR5/1）細～極細粒砂
6．褐灰色（7.5YR5/1）細～極細粒砂　土器小型片を極少量含む。
7．褐灰色（10YR5/1）細～極細粒砂　基盤層ブロックを少量含む。
8．褐灰色（10YR6/1）細～極細粒砂　基盤層ブロックを多く含む。
9．褐灰色（10YR6/1）細～極細粒砂　土器細片を極少量含む。
10．褐灰色（10YR6/1）細～極細粒砂　基盤層ブロックを多く含む。
11．黄灰色（2.5Y5/1）細粒砂　中～極細粒砂を多く含む。礫・石を含む。土器片を少量含む。
12．褐灰色（10YR6/1）細～極細粒砂　基盤層ブロックを含む。
13．黄灰色（2.5Y6/1）極細～細粒砂　中粒砂を含む。基盤層ブロックを含む。
14．褐灰色（5YR5/1）細粒砂　極細粒砂を含む。
15．褐灰色（10YR6/1）シルト～極細粒砂　中粒砂を含む。
16．基盤層ブロック間に黄灰色（2.5Y6/1）細粒砂を少量含む。
17．基盤層ブロック間に黄灰色（2.5Y6/1）極細粒砂を極少量含む。
18．灰黄褐色（10YR6/2）極細粒砂　細粒砂を含む。
19．褐灰色（10YR6/1）細～極細粒砂
20．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂　シルトを含む。
21．青灰色（5PB5/1）細粒砂　極細粒砂を含む。
22．灰褐色（7.5YR4/2）シルト～粘土ブロック・基盤層ブロックの混成　ブロック間に灰白色（2.5Y7/1）の比較的均質な細～極細粒砂を含む。
23．褐灰色（10YR5/1）シルト　基盤層ブロックを含む。
24．灰黄褐色（10YR6/2）極細粒砂　基盤層ブロックを多く含む。
25．褐灰色（10YR5/1）シルト
26．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂　基盤層ブロックを少量含む。
27．褐灰色（10YR5/1）シルト～極細粒砂
28．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂　基盤層ブロックを少量含む。

第42図　調査区平面・断面図（1：80）

2．調査の概要

（1）基本層序

当調査区では、地表下35cm前後のところで基盤層を確認した。その間、宅地化に伴う造成土・それ以前の耕作土・床土・中世の遺物を少量含む褐灰色～黄灰色細粒砂層が堆積し、基盤層である黄灰色粘土層にいたる。また、調査区の西部では古代の遺物を含む褐灰色極細～細粒砂が堆積するが、東部は削平を受けているためか、ほとんど残っていなかった。

なお、遺構は褐灰色極細～細粒砂層あるいは基盤層の上面で検出され、中世耕作土層内またはその上面から掘削されたものは、耕作痕以外に認められなかった。

（２）検出した遺構と遺物

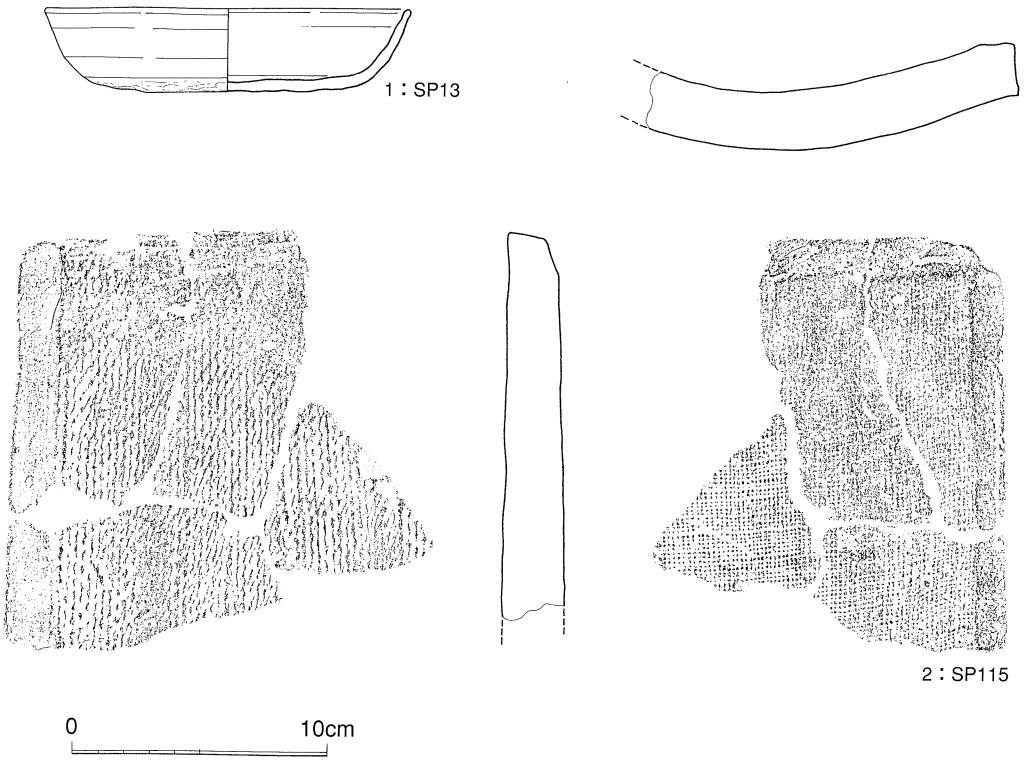
当調査区では、多数の柱穴や溝、土坑を検出した。そのうち、柱穴からは４棟の掘立柱建物が復元された。以下、これらの遺構および出土遺物について述べる。

建物１　調査区北半部で検出した総柱建物である。ただし、検出した部分は限定されているため、庇付き建物の可能性もある。建物は、検出部分から南北４間（7.5m）×東西１間（1.7m）以上、検出部分から面積は12.75m²以上となる。よって、南北の柱間が２間の場合は約25m²、約３間の場合は37m²になると予想できる。建物の東西を棟行とした場合、主軸方向はN-69°-Wである。使用された柱は、柱痕の状況から直径15～20cm程度と推定される。

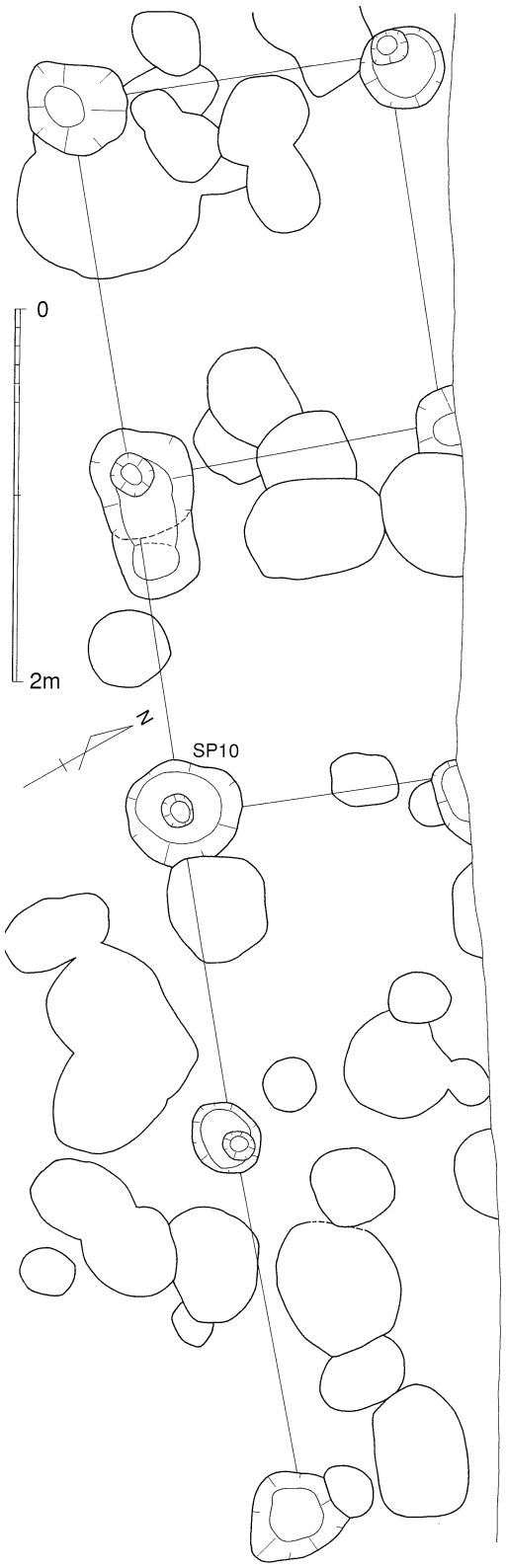
建物１の時期は判然としないが、柱穴から出土した極少量の遺物や土坑１に伴う包含層との重複関係を見る限り、８世紀後半頃と考えられる。

建物２　建物１と重複して検出された柱穴列である。東西４間（8.2m）をはかる。柱穴列が１列だけ復元されたにすぎないが、建物１と重複する状況から、建物として扱った。建物の東西を棟行とした場合、主軸方向はN-70°-Wとなる。使用された柱は、柱痕の状況から直径15～20cm程度と推定される。

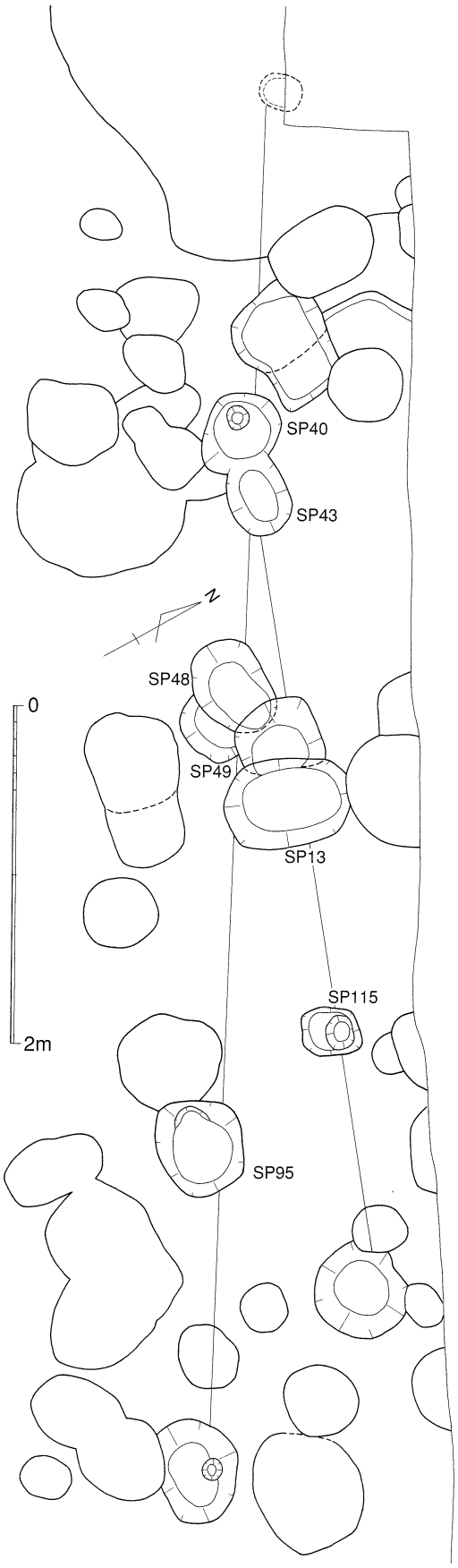
建物の時期は明確ではないが、西端の柱穴は土坑１上面から掘削されており、８世紀末以降と考えられる。また、SP13と建物１SP10の重複関係から、建物２は建物１より後の所産となる。なお、SP13からは、第43図１の土師器杯Aが出土している。１の口径は14.2cmに復元され、器



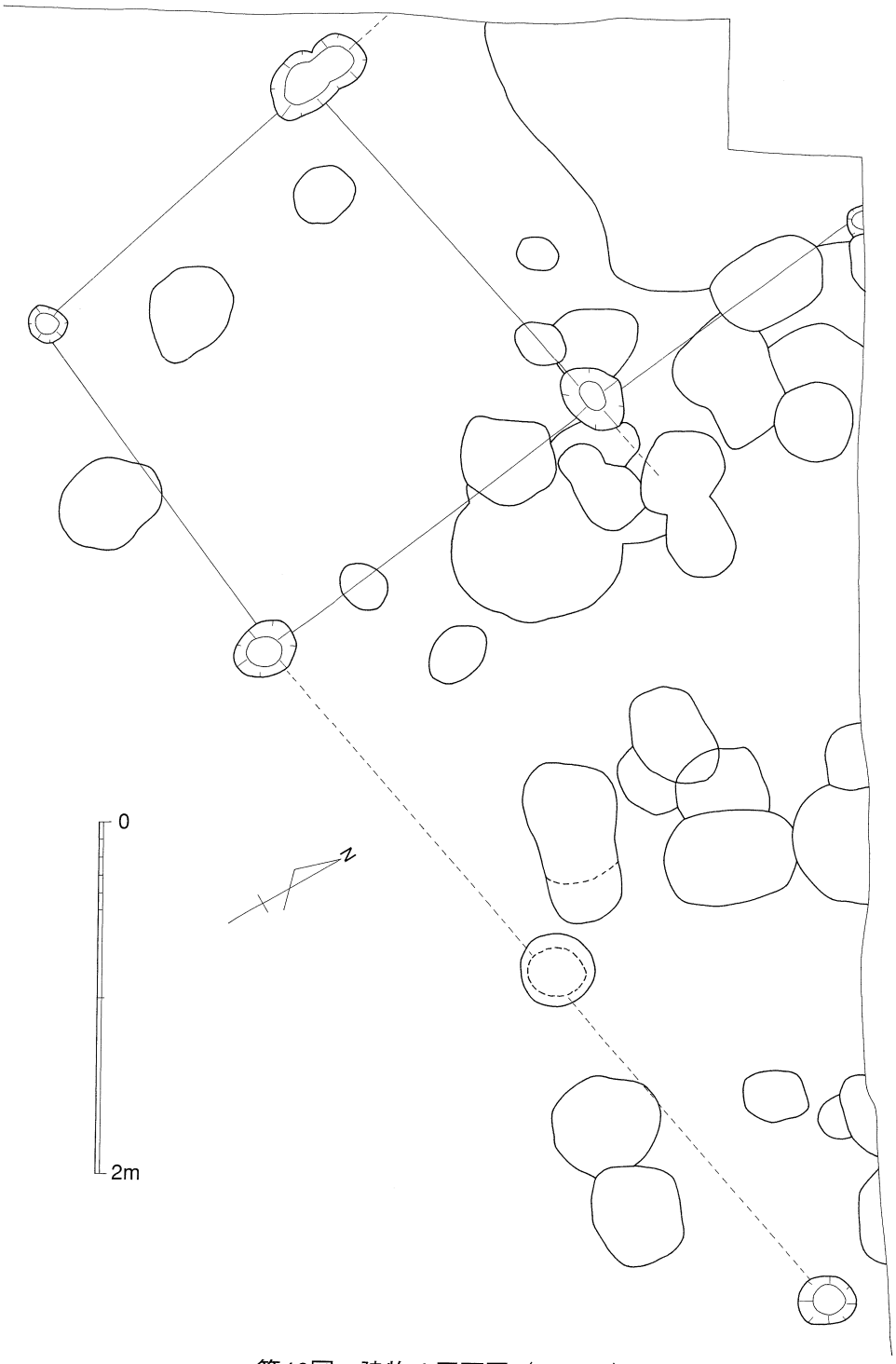
第43図　柱穴出土遺物（１：３）



第44図　建物１平面図（１：40）



第45図　建物２・３平面図（１：40）→



第46図　建物４平面図（１：40）

高は3.3cmをはかる。口縁部は内外面ともに横ナデを、底部外面は押圧が残る。口縁端部は丸くおさめられ、沈線はみられない。

建物３　建物１・２と重複する柱穴列である。東西３間（5.2m）をはかる。建物２と同じく、柱穴列が１列だけ復元されたにすぎないが、建物１と重複する状況から、建物として扱った。建物の東西を棟行とした場合、主軸方向はN-58°-Wである。使用された柱は、柱痕の状況から

直径15～20cm程度と推定される。

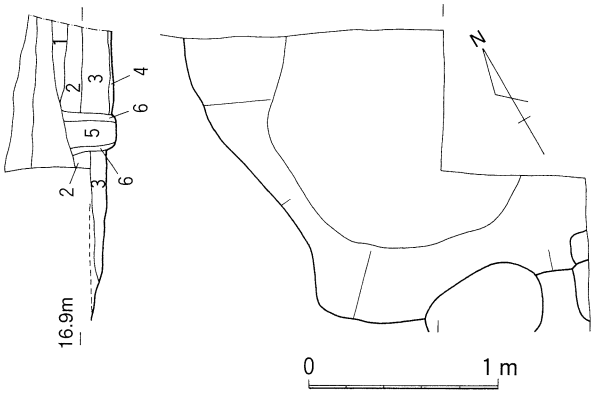
建物の時期は明確ではないが、８世紀末頃と考えられる遺物が出土したSP13との重複関係から、８世紀末以前の時期が考えられる。なお、SP115からは第43図２に挙げる平瓦が出土した。２の凹面には布目痕が、凸面には縄目のタタキ痕が残る。凹面端は、ヘラで面取りをする。瓦の厚さは、最大で2.3cmである。

建物４　調査区西部で検出した総柱建物である。検出部分から、南北２間（4.0m）以上、東西１間（2.3m）以上、面積にして9.2m²以上をはかる。また、SP50の東延長に位置するSP７は規模が異なり、建物４に伴う可能性は全くないが、その延長にあるSP112は同じ規模・形状で、柱芯の間隔も一定であることから、東側へ２間分拡大できる可能性がある。この場合は東西３間（7.1m）、面積にして28.4m²以上となる。なお、建物の棟行は不明であるが、南北方向と考えた場合、その主軸方向はN-10°-Wである。

建物４の柱穴は、建物１～３と比べて著しく削平されており、柱穴の直径も25cm前後と小さく、主軸方向も異なる。また、柱穴は包含層より下で検出されたことから、建物１～３に先行する時期の所産と考えられる。

そのほかの柱穴　以上の建物に伴う柱穴のほかに、多数の柱穴が確認されている。特に、調査区の北側に集中する傾向があり、建物１～３以外にも多くの建物が建て替えられた可能性が高い。そのほか、SP61とSP68、SP35とSP35は一連の建物になる可能性が考えられる。

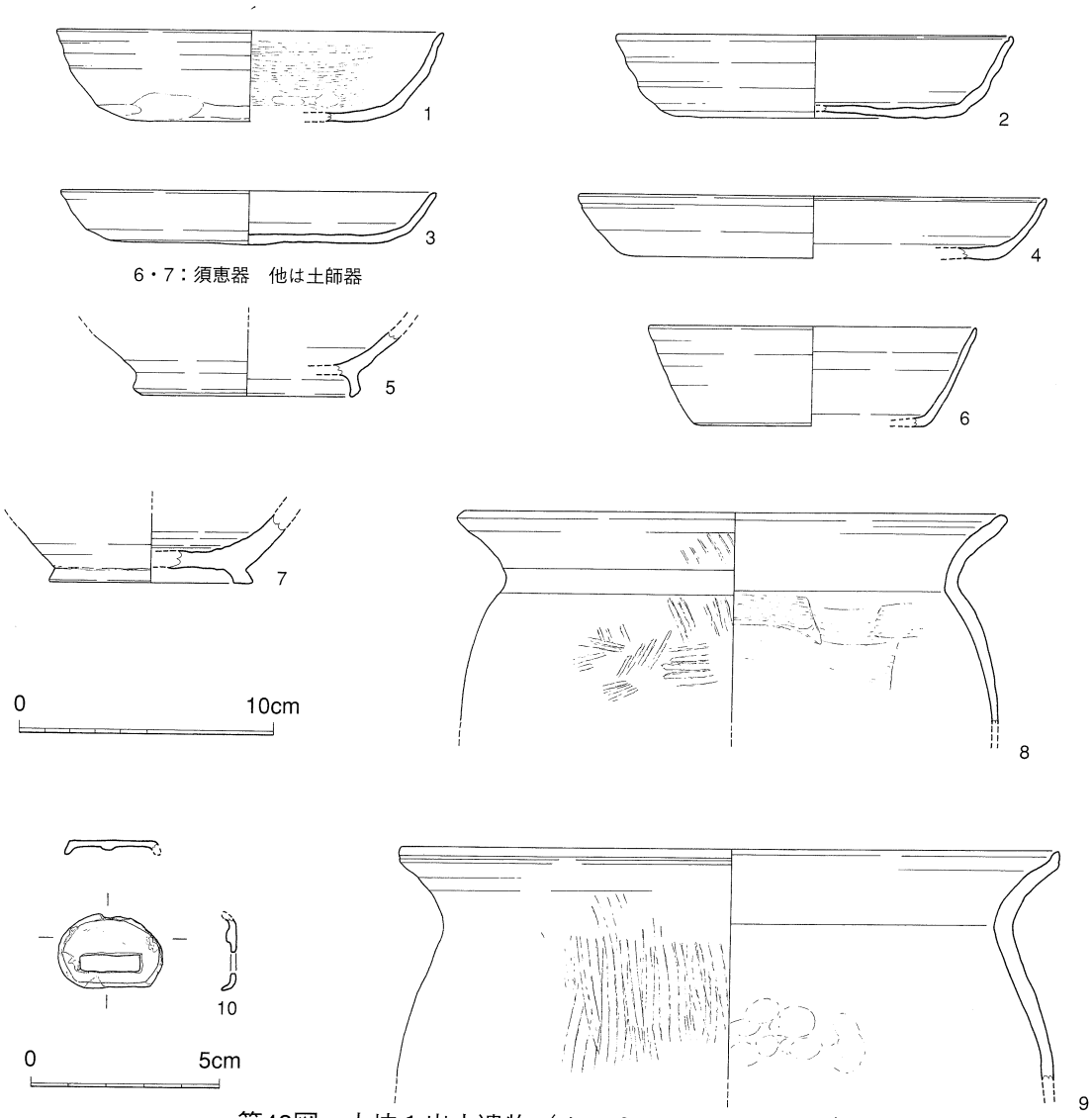
土坑１　調査区北西端で検出した、南北2.0m、東西1.6m以上の平面不整形を呈する土坑である。埋土は、上面の包含層とほとんど同じで、掘方も明確ではないことから、地形の変化に伴う落ち込みと考えられる。



1．明黄褐色（10YR6/8）極細粒砂　細粒砂を含む。礫を含む。
2．黄灰色（2.5Y6/1）シルト～極細粒砂　細粒砂を含む。
3．褐灰色（10YR5/1）細～極細粒砂　土器片を少量含む。炭化物を極少量含む。
4．褐灰色（10YR5/1）細～極細粒砂　撹拌により基盤層が混入する。土器片を多く含む。
5．褐灰色（10YR6/1）極細粒砂　土器細片を極少量含む。
6．黄灰色（2.5Y6/1）細粒砂　極細粒砂を含む。土器細片を極少量含む。

第47図　土坑１平面・断面図（１：40）

土坑１からは、第48図に挙げる遺物が出土している。１・２は土師器杯Aである。１の口径は15.2cmに復元されるが、残存部は乏しく法量の復元には疑問を残す。器高は3.6cmをはかる。口縁部内面はナデを施し、底部との境界にはナデによる圏線状の痕跡が残る。口縁端部は、やや尖り気味に丸くおさめられ、内面には沈線はみられない。底部外面には、押圧を施す。２は口径15.7cmに復元され、器高3.3cmをはかる。内外面はともに風化が著しく調整は明確ではないが、口縁部には２段のナデを施す。口縁端部内面に、沈線を巡らす。３・４は、土師器皿Aである。３の口径は14.8cmに復元



第48図　土坑１出土遺物（１：３　※10は１：２）

され、器高2.1cmをはかる。口縁端部は丸くおさめられ、沈線はみられない。内外面は共に摩耗しており、調整は明確ではない。４の口径は18.5cmに復元されるが、残存部が乏しく法量の復元には疑問を残す。器高は2.5cmをはかる。内外面はともに摩耗しており、調整は明確ではないが、口縁端部内面には沈線を施した可能性が考えられる。５の土師器椀Bは高台径8.2cmに復元され、残存部から器高2.6cm以上をはかる。高台は内反気味に立ち上がり、体部はやや直線的である。内外面ともに風化し、調整は不明瞭である。６の須恵器杯Aは、口径13.0cmに復元されるが、残存部が乏しく、法量の復元には疑問を残す。器高は4.0cmをはかる。口縁部は内外面ともに回転ナデを施す。底部外面の調整は、不明である。７の須恵器小型壷は、高台径8.1cmに復元され、残存部から器高2.8cm以上となる。体部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデを、また底部外面は高台貼り付け時にナデを施すものの、ヘラ切り痕が残る。８・９は、土師器甕である。８の口径は21.1cmに復元され、残存部から器高は8.4cm以上となる。口縁部内外面は横ナデ、体部外面はタタキ、内面は横方向の板ナデを施す。９は口径26.0cmに復元され、残存部か

ら器高9.2cm以上となる。口縁部には横ナデを施すものの、頸部付近にはハケの痕跡が残る。また、体部外面は粗いハケを、内面は押圧痕が残る。10は、銅製の丸鞆である。横幅2.8cm、縦幅2.0cmをはかる。垂孔は縦4.5mm、横16mmをはかる。これらの遺物は、概ね８世紀末頃の所産と考えられる。

溝１・２　溝１は調査区北東端、溝２は南東端で検出した。共に、幅0.5m前後、深さ５cm前後をはかる。埋土に大きな差がないことから、同一の溝と考えられる。この場合、調査区東方で屈曲し、南北方向から東西方向へ向きを変えることになり、建物１～３の周囲に巡らされた区画溝になる可能性も生じる。なお、出土した遺物は細片だけにとどまるが、建物１～３とほぼ同じ時期の所産と考えられる。

３．まとめ

今回の調査で検出した遺構は、建物４を除いて８世紀後半から９世紀前半頃の所産と考える。また、検出した建物・土坑・溝は近時期の所産で、検出した位置も調査区北端にまとまる傾向があることから、同一建物群を構成する遺構群と言える。建物群は調査区北方に広く展開することが予想されるものの、その全体像は不明であり、居住者の性格は判断しにくい。しかし、土坑１から出土した丸鞆と建物３SP115から出土した平瓦は、その性格を考える上で一つの手がかりになろう。

ところで、当調査区は桜塚街道の西方に位置する。その桜塚街道を南に200mほど下った曽根遺跡には、平安前期の超大型建物群が展開する。８世紀末から９世紀前半代にかけて形成するこの建物群は、南北100m以上の区画の中に逆Ｌ字形あるいはコ字形に大型建物・倉庫を配置することから、豊島郡衙の可能性が考えられる。また、この建物群が出現する以前に、道路状遺構の左右に倉庫を伴う建物群が展開するなど、奈良時代以降の曽根遺跡は官衙的色彩を帯びるようになる。

今回の調査で確認された建物群と曽根遺跡の超大型建物群は、一時期併存することから、その関連性は否定できない。また、先の丸鞆や瓦といった出土遺物も、居住者の行動範囲に曽根遺跡が含まれていれば説明しやすい。摂津国豊嶋郡人左史生従六位上葛木直貞岑が朝廷に出仕していることをふまえるならば（『日本三代実録』貞観五年（863）九月一三日条）、地方官衙に在地氏族が出仕することは特殊な事ではなく、先の遺物もそうした関係から捉え直すこともできるのではなかろうか。

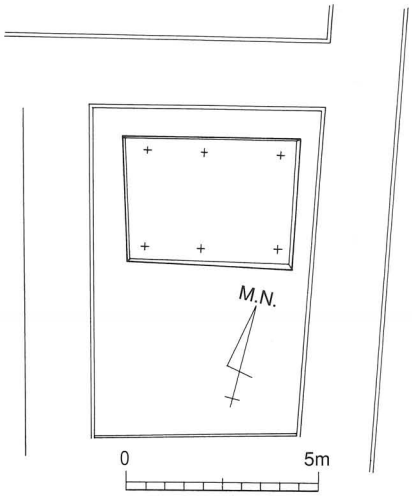
以上、当調査区で検出した建物群について、出土遺物からその性格を考えた。しかし、今回の調査は桜塚古墳群における確認調査を契機とするように、当建物群が帰属する集落の範囲などの詳細はほとんど把握されていない。その一方で、建物群が当調査区の北方へ広がることは明確であり、遺構が濃密に分布する状況も予見される。よって、周辺における住宅建築などにおいては、埋蔵文化財の取り扱いについて、より一層留意されることを提言しておきたい。

第Ⅷ章　岡町南遺跡第４次調査

１．調査の経緯

当調査区は、豊中市岡町南２丁目３－20に所在する。平成18年６月19日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて平成18年７月20日に確認調査を行ったところ、地表下35cmで基盤層を検出し、その上面において遺構を確認した。申請地では個人住宅の建設が予定されているが、それに伴う基礎掘削深度が遺構の破壊を免れないことが判明したため、協議の結果、本調査を実施することとなった。

調査は平成18年８月18日から平成18年８月31日にかけて実施し、調査面積は建築対象面積である65m²に設定された。

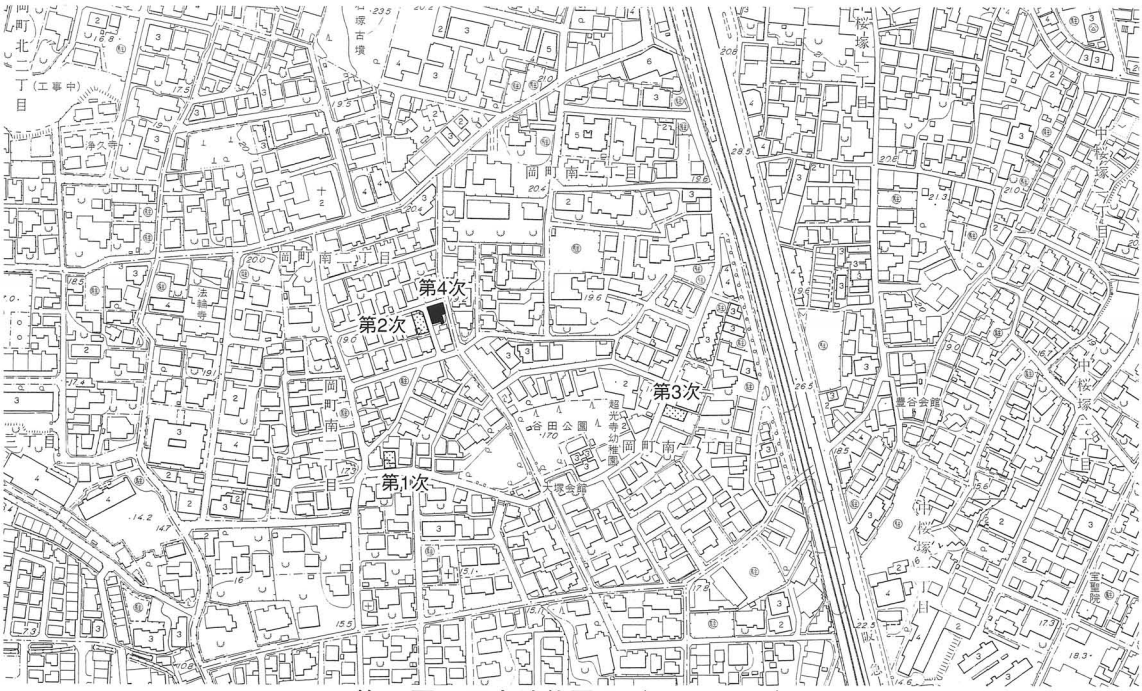


第49図　調査範囲図（１：200）

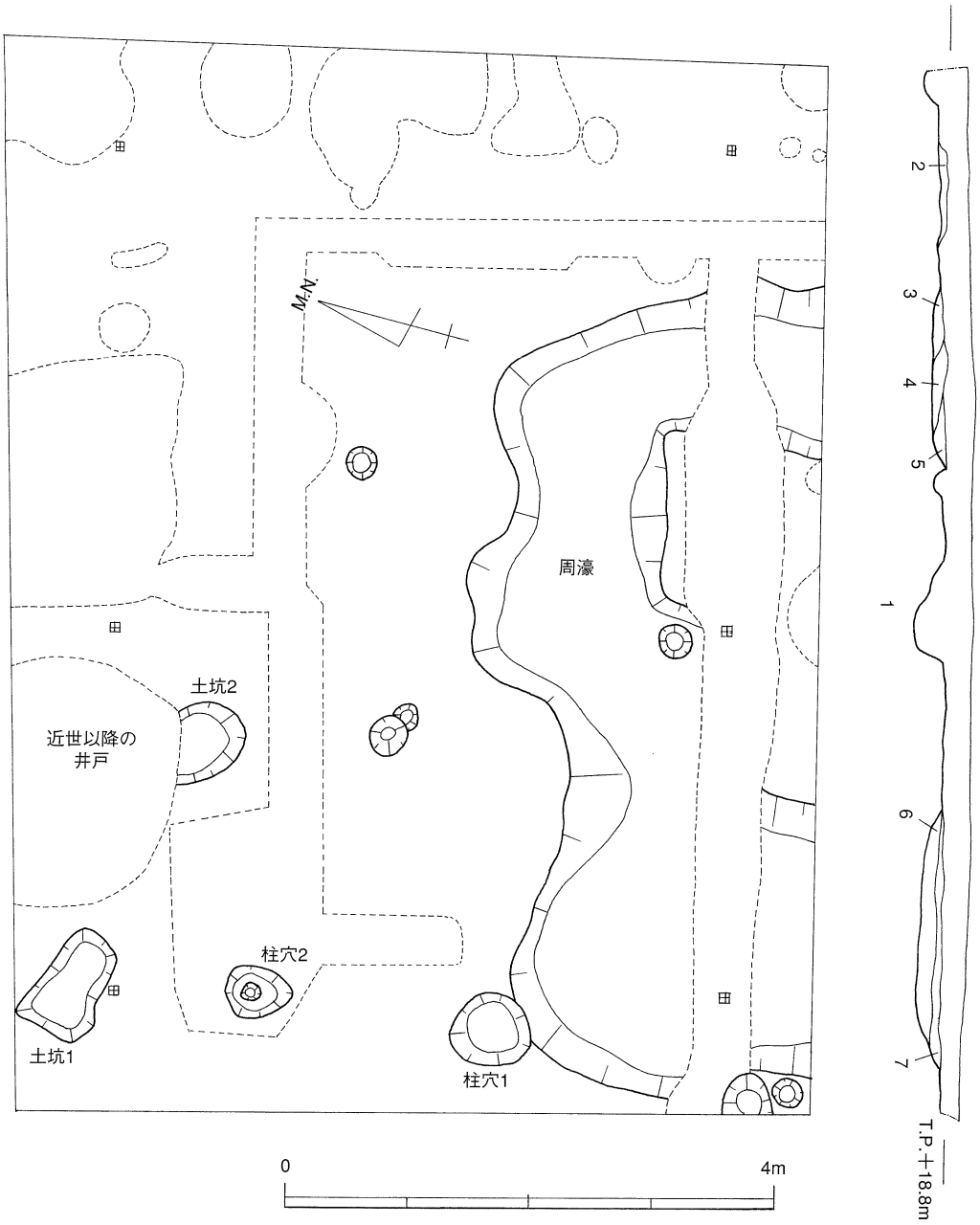
２．調査の概要

（１）基本層序

今回の調査地では基本層序と呼べるような堆積状況はなく盛土直下は基盤層であった。よって今回は基盤層上面において遺構検出を行い、調査を実施した。



第50図　調査地位置図（１：5,000）



1．表土。 2．旧耕作土。 3．にぶい黄褐色(10YR5/3)極細粒砂～細粒砂。礫(直径～2cm)を多くむ。 4．灰黄褐色(5YR4/2)極粒砂。3と同様、礫(直径～2cm)を多く含む。基盤層ブロック(直径～3cm)を多く含む。埴輪砕片を含む。 5．にぶい黄褐色(10YR6/8)極細粒砂～シルト。基盤層ブロック(直径～3cm)を若干含む。埴輪・須恵器砕片を含む。基盤層ブロック(直径～2cm)を若干含む。しまり強。 6．にぶい黄褐色(10YR5/3)極細粒砂。基盤層ブロック(直径～3cm)を多く含む。埴輪・土師器・須恵器砕片を含む。 7．灰黄褐色(10YR5/2)極細粒砂。しまり強い。4と似る。埴輪・須恵器砕片を含む。

第51図　調査区平面・断面図（1：60）

（2）検出した遺構と遺物

今回検出した遺構は、溝１条と柱穴(ピット)・土坑10基であった。以下では主要な遺構についてその特徴等について記していく。

溝１　調査区南部において検出した。残存状況は良好とはいえないが、検出時における形状は「コ」の字状の形状が考えられる。ただし検出状況を見る限りは、溝１が直角に曲っていたかは不明であるが、南壁面と溝１とはほぼ垂直に交わっていることから、溝１の平面形は本来方形であったことが考えられる。検出幅は削平度合いによって異なるものの1.2～2.5m程度、深度も同様に0.1～0.2mであった。埋土中から少量ながら円筒埴輪が出土していること、他の遺物はご

く少量の須恵器・土師器砕片にほぼ限定されることから、溝１は古墳にともなう周濠である可能性が高い。よって以下の記述では溝１を古墳周濠と見做し、「周濠」と表記を改める。なお、墳丘部分は後世の削平によって消滅しており、主体部の構造等は一切不明である。

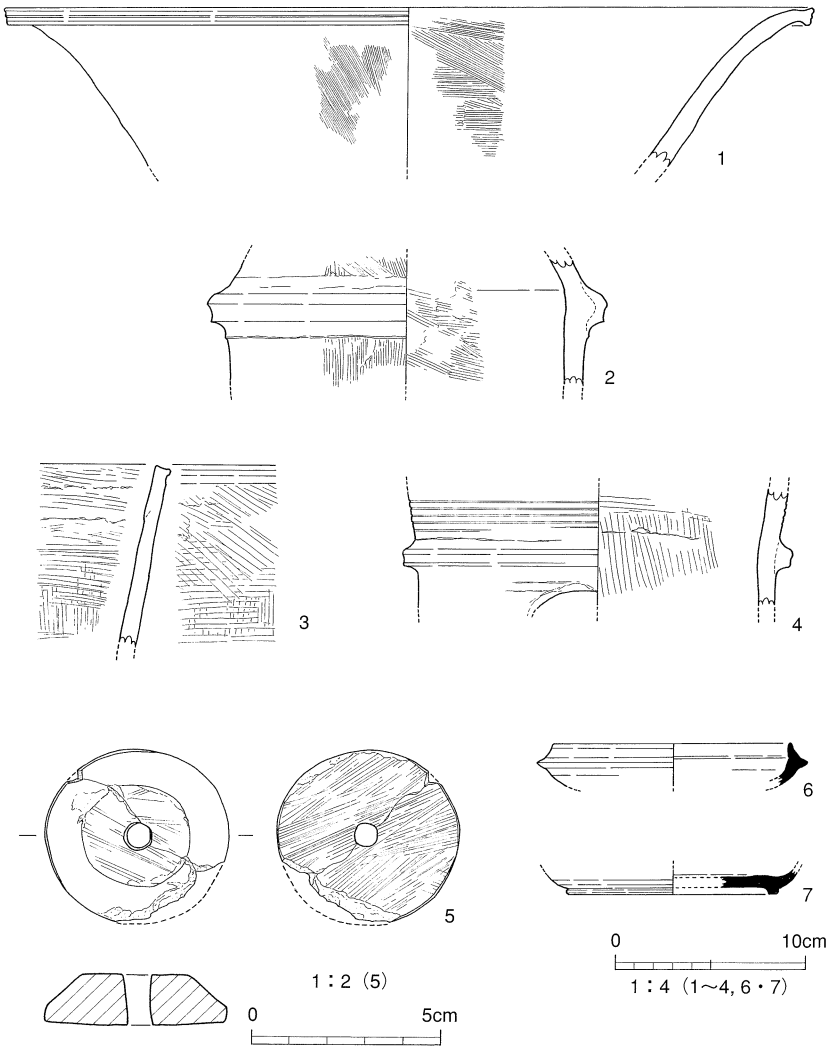
今回の周濠から推察される古墳は一辺約４ｍの方墳で、その周囲に幅1.2～2.5ｍの周濠を伴うことが察せられる。仮に円墳であった場合、方墳と同様の規模（直径４ｍ程度）またはそれを若干超える墳丘規模を有していたことが考えられる。なお、一辺約４ｍ（または直径４ｍ程度）の古墳は、群中では桜塚７号墳などとともに５ｍにも満たない最小規模の部類に属する。

周濠埋土は概ね３層（上・中・下層）に分かれる。上層は褐灰色シルト遺物包含層中～下層は基盤層ブロックを大量に含みしまりが強い。このうち上層（灰黄褐色極細粒砂層：第51図４・７層）から最も多くの遺物の出土をみた。続いて下層（にぶい黄褐色極細粒砂層：第51図３・６層）の遺物は基底面に貼付くような状態での出土が目立った。各層の出土遺物は、中・下層が埴輪に限られるのに対し、上層は埴輪と須恵器・土師器が共伴し、しかも須恵器は後述の通り古墳時代後期が主体であり、埴輪の年代（中期）と一致しない。この点については須恵器がほぼ埋土上層出土に限られることと、調査区内の柱穴出土須恵器と特徴が似ることから、周濠が埋没するなかでの混入遺物であった可能性が高く、古墳築造段階の遺物ではないことがうかがえる。

周濠出土遺物（第52図１～５）　埋土中からは円筒埴輪ならびに朝顔形埴輪砕片が約20点、土師器・須恵器砕片が数十点ほど、石製紡錘車が１点出土している。以下、図化可能な遺物について、その特徴を記す。

１・２は朝顔形埴輪である。１は口縁部であり、内外面いずれも橙色（2.5YR6/6）を呈し、復元口縁部直径は42cmをはかるが砕片ゆえに疑問も残る。土師質焼成であり内外面ともに斜位のきめの細かいハケ調整を施し、端部は横ナデによる調整が行われている。２はちょうど肩部と胴部の境界部分と考えられる。周濠出土埴輪中で唯一須恵質焼成（表面：にぶい赤褐色5YR5/4、断面：灰色N6/）によるものであった。外面は縦ハケのみ、内面は横～斜位方向のハケ調整が観察できる。胴部と肩部境界を巡るタガは断面台形であり、頂部は強めのナデによってやや凹んだ形状を呈する。３・４は上層出土の土師質円筒埴輪であり、ともに橙色（2.5YR6/6）を呈する。３はやや外反気味の口縁部片であり、復元口縁部の直径はおよそ21cmである。器面調整は外面は縦ハケ（一次調整）の後、B種横ハケ（二次調整）、口縁端部付近は斜位方向のハケを施す。続いて４はタガ部分の復元直径が約19cmをはかることから、底部付近に該当する可能性がある。タガは断面台形を呈しあまり突出しない。当該資料は円形の透孔であることが確認できる。器面調整は外面がB種横ハケ、内面は縦方向のハケを施す。これらの埴輪は調整技法の特徴から川西編年Ⅳ期、５世紀中頃の所産であると考えられる。

５の石製紡錘車は周濠東部の上層中から垂直に立った状態で出土した。須恵器と同様に混入遺物である可能性が高いが、現在のところ、付近に他の古墳がみとめられないことから当該古墳出土のものが周濠内に流れ込んだものと考えたい。肉眼観察によると緑灰色（7.5GY5/1～6/1）



第52図　出土遺物（1：4　※5は1：2）

を呈する石材であり、上端直径2.5cm、下端直径4.5cm、厚さ1.3cmで断面形は台形を呈する。中央には直径7.5mmの孔が穿たれている。表面全体にわたって非常に丁寧な研摩が施されている。今回出土した断面台形の紡錘車は、古墳時代中期以降に普及することが知られており、周濠内出土の円筒埴輪の帰属時期と重複する点は当該古墳出土である蓋然性が高いものといえる。

柱穴・ピット　調査区中央部から西側を中心に計8基検出した。うち柱穴1・2は直径約50cm、深度20cm以上をはかるものであった。これらの大半は砕片ながら須恵器を含むことから古墳時代後期以降に帰属するものとみられる。須恵器は先述の通り周濠埋土上層中のものと形態的に共通する。

なお、これらの柱穴の配置からは、調査面積等の制約により建物跡を具体的に抽出することはできなかった。

土　坑　調査区北部において2基確認した。土坑1　　の平面は隅丸の長方形、土坑2は楕円形を呈し、深度はともに約30cmをはかる。埋土には基盤層ブロックが含まれる。微量ながら須恵器砕片を含むことから、古墳時代後期頃に帰属するものとみられる。なおこれら土坑の機能は不明である。

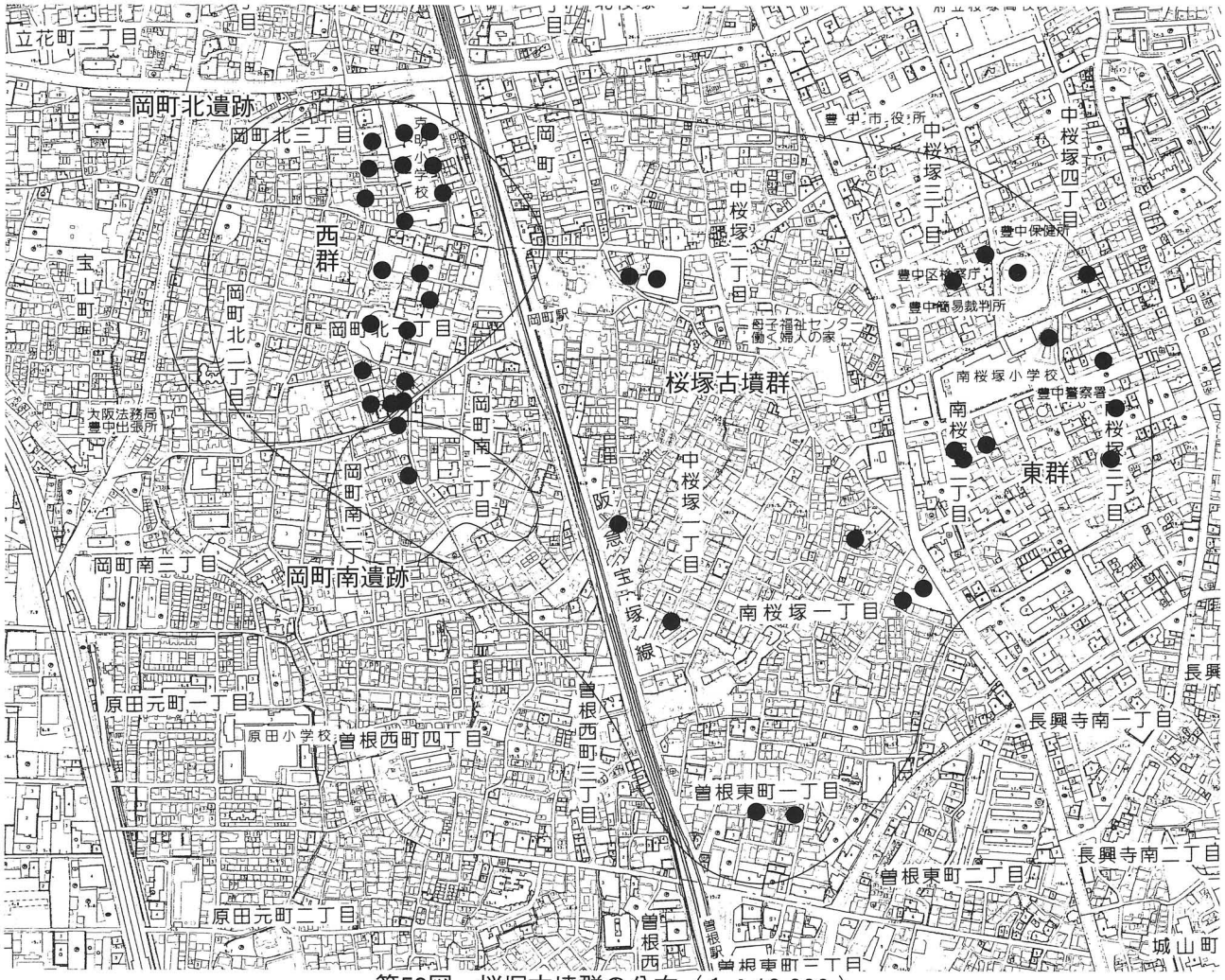
近世以降の井戸出土遺物　撹乱として扱っているが、出土遺物について若干触れておく。当該井戸は調査区北部で検出した直径2.1mをはかるものである。深度は基底面まで未掘削のため不明である。埋め戻し土中には近世以降の所産とみられる磁器と瓦砕片が多数含まれており、井

戸の廃絶が近世以降であることは明らかである。埋め戻し土には遺物包含層または遺構埋土であったとみられる褐灰色シルトブロックが多数含まれており、それとともに弥生土器、土師器、須恵器、瓦等の砕片を多数含んでいた。これらの埋土の特徴ならびに出土遺物のありかたからして、付近には少なくとも弥生時代後期～奈良時代、近世以降といった時期に何らかの遺構が所在したことが考えられる。

出土遺物（第52図６・７）　図化可能な遺物は２点であった。６は須恵器杯身片であり、復元口縁部直径は12.3cm、器高2.3cmをはかる。全体的に肉厚な印象を受ける。７世紀前半代に属するものとみられる。続いて７は高台を有する須恵器杯片である。底部径10.9cmをはかり、安定した高台を有する。奈良時代（８世紀代）のものであろう。

３．まとめ

今回の調査地は岡町南遺跡と桜塚古墳群の二つの遺跡に該当しており、集落ならびに古墳の両面における調査成果が期待された。以下ではその成果について述べていく。



第53図　桜塚古墳群の分布（１：10,000）

※古墳の位置は『ふるさとの文化遺産を守るために-埋蔵文化財発掘調査の手引き-』(2006年) を参考にした。

3．まとめ

今回検出された古墳周濠によって、桜塚古墳群内において古墳が新たに１基追加されることとなった。当該古墳は第53図に示されるように桜塚古墳群西南部に所在し、ちょうど大石塚・小石塚古墳とそれを取り巻く中小古墳群で構成される「西群」の南端域の一角に相当してこよう。なお今回発見の古墳の名称はあくまで仮称段階ではあるものの、『新修豊中市史 第四巻 考古』所収の一覧表に基くならば昨年度新たに発見された第45号墳に続いて「第46号墳」ということになろうか。

今回検出された周濠は、先述の通り一辺４ｍ程度の非常に小規模な方墳に伴った可能性が高く、古墳の規模や形態については大阪市長原古墳群内で検出が相次いでいる小形方墳と類似する。ただし、主体部は残存しないため当該古墳の具体的な被葬者像については不明である。

ところで、５世紀代の桜塚古墳群といえば大塚古墳、御獅子塚古墳で代表される「東群」が主体を成す時期であるが、今回出土の埴輪が御獅子塚古墳出土のものと最も特徴が似通っていることから、両古墳はほぼ同時期に営まれた可能性が高い。したがって５世紀中葉頃は東西両群ともに古墳築造段階であったことがうかがえる。

柱穴と周濠の関係　一方、古墳以外の成果としては、柱穴は出土遺物からして弥生時代後期、古墳時代後期のいずれかに帰属する可能性が高い。このうち古墳時代後期の柱穴については、調査地西隣の第２次調査で検出された古墳時代後期頃の遺構群（柱穴、溝など）と一連のものと考えられる。このことは、桜塚古墳群が衰退を迎える古墳時代後期（６世紀代）になると、調査地一帯には新たに掘立柱建物を主体とした集落が営まれていたこととなり、当該古墳のような小規模な古墳はこうした集落開発の折に早速何らかの損壊を受けた可能性も考えられる。一方弥生時代後期の柱穴は、当該地における集落の初現を知るうえで参考になる。

今後付近における発掘調査では、古墳ならびに集落関連遺構の両面の可能性に配慮する必要があろう。

【参考文献】

豊中市教育委員会　1997「岡町南遺跡第１次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要－阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査－』平成７(1995)年度

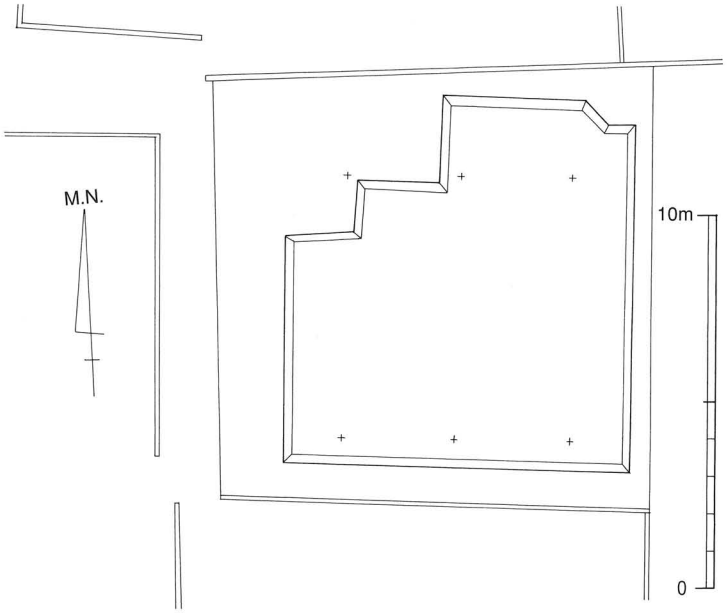
豊中市教育委員会　1998「岡町南遺跡第２次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』平成９(1997)年度

豊中市史編纂委員会編　2005「第２節（４）桜塚古墳群」『新修豊中市史　第四巻考古』豊中市

第Ⅸ章　原田遺跡第８次調査

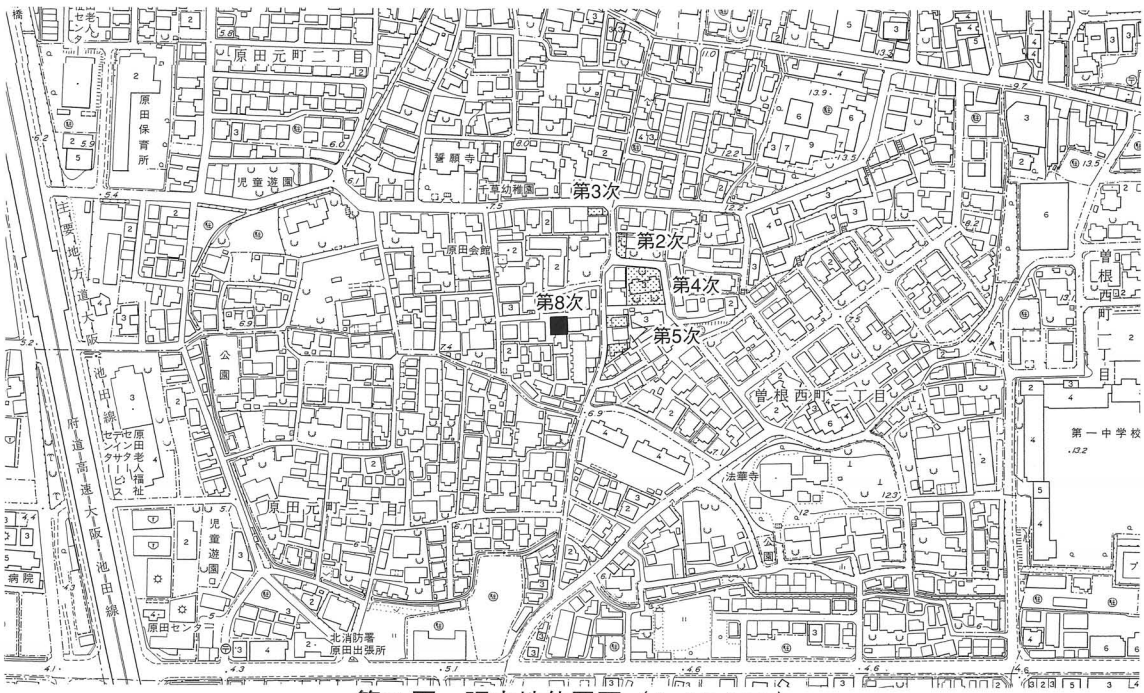
１．調査の経緯

当調査区は、豊中市原田元町２丁目184・186の各一部に所在する。平成18年２月９日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて平成18年２月16日に確認調査を行ったところ、地表下約55cmで瓦片等を含む遺物包含層を確認し、地表下約65cmで遺構面を確認した。申請地では個人住宅の建設が予定されていたが、それに伴う基礎掘削時の地盤改良深度が遺構の破壊を免れないことが判明したため、協議の結果、本調査を実施することとなった。

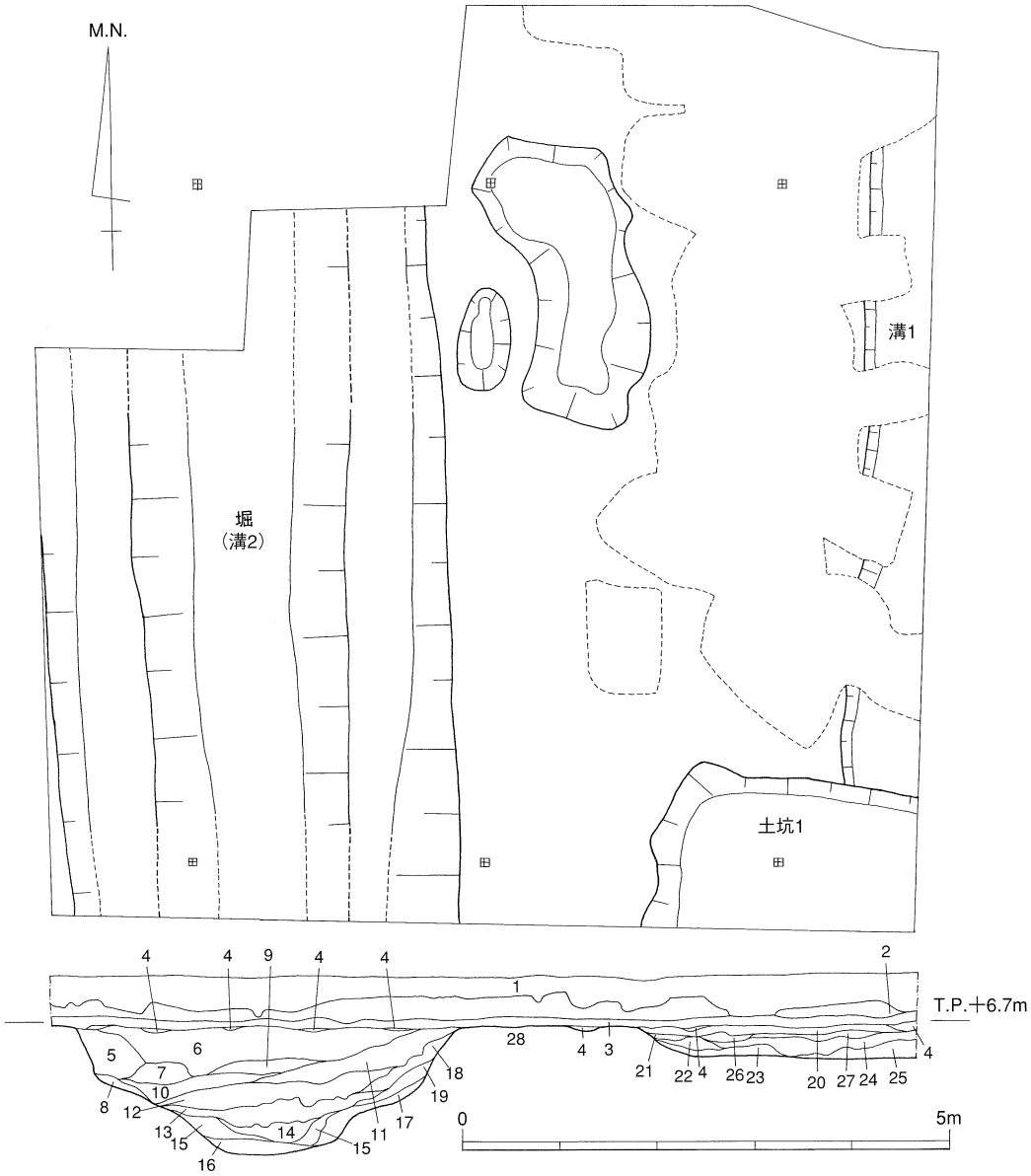


第54図　調査範囲図（１：200）

調査は平成18年４月４日から平成18年５月16日にかけて実施し、調査面積は建築対象面積である75.5m²であった。



第55図　調査地位置図（１：5,000）



1．現代の盛土。　2．オリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒砂。　3．暗灰黄色(2.5YR4/2)極細粒砂～細粒砂。礫(直径１cm程度)を少量含む。
4．黒褐色(2.5YR3/2)細粒砂。鋤溝跡。　5．黒褐色(10YR3/1)シルト。灰白色(10YR8/1)シルトブロック(直径～５cm程度)を多数包含する。弥生後期～中世前期の遺物を包含する。　6．にぶい黄橙色(10YR6/3)極細粒砂と黄橙色(10YR7/8)シルトブロックと灰黄褐色(10YR4/2)シルトブロックの混合土（約４：４：２）。　7．灰黄褐色(10YR6/2)極細粒砂と灰白色(10YR7/1)シルトと黄橙色(10YR8/6)細粒砂～極細粒砂の混合土（約４：４：２）。
8．灰黄褐色(10YR4/2)シルト。５と似るが灰白色ブロックをほとんど含まない。　9．灰白色(10YR7/1)極細粒砂～細粒砂と黄橙色(10YR7/8)極細粒砂～細粒砂と灰黄褐色(10YR5/2)シルトの混合土（約４：４：２）。後２者はブロック状に混入。　10．灰白色(10YR7/1)極細粒砂～細粒砂と黄橙色(10YR7/8)極細粒砂～細粒砂と灰黄褐色(10YR5/2)シルトの混合土（約３：４：３）。　11．灰白色(10YR7/1)極細粒砂～細粒砂と黄橙色(10YR7/8)極細粒砂～細粒砂と灰黄褐色(10YR5/2)シルトの混合土（約５：３：２）。後２者はブロック状に混入。　12．灰白色(10YR7/1)シルト～極細粒砂と明黄褐色(10YR6/6)極細粒砂と灰黄褐色(10YR4/2)シルトブロックの混合土（約３：５：２）。　13．褐灰色(10YR6/1)シルトと灰白色(10YR7/1)極細粒砂ブロックの混合土（５：２）。礫(直径～２cm程度)を少量含む。基盤層ブロック(直径５～10cm)を多く含む。炭化物を微量含む。植物遺体を薄い層状に含む（特に下半部）。無遺物。　14．褐灰色(10YR6/1)シルト。褐灰色(10YR6/1)極細粒砂～細粒砂を微量包含する。粘性が非常に強い。無遺物。
15．灰白色(10YR7/1)細砂と同色シルトの混合土（３：２程度）。無遺物。　16．灰白色(10YR7/1)シルト。同色の極細砂～細粒砂を少量含む。粘性が強い。無遺物。　17．灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂。礫(直径～２cm程度)と多く含む。　18．褐灰色(10YR5/1)シルトと灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂～細粒砂と灰白色(10YR7/1)極細粒砂の混合土（約５：３：２）。弥生後期～中世前期の遺物を包含する。　19．明黄褐色(10YR7/6)極細粒砂ブロック(基盤層)と灰黄褐色(10YR6/2)シルトの混合土（約１：１）。堀埋土中で基盤層の混入比率が最も高い。　20．暗灰黄色(2.5YR5/2)細粒砂。
21．暗灰黄色(2.5YR5/2)中粒砂～細粒砂。　22．灰色(5Y5/1)中粒砂～粗粒砂。基盤層ブロック(直径～10cm程度)ならびに礫を多く含む。
23．明緑灰色(10GY7/1)粗粒砂。礫(直径～３cm程度)を多く含む。　24．黄灰色(2.5YR5/1)中粒砂。基盤層ブロック(直径～３cm程度)、拳大の礫を多く含む。　25．緑灰色(10GY6/1)粗粒砂。礫(直径～３cm程度)を多く含む。　26．黄灰色(2.5YR6/1)細粒砂。　27．灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂。同色のシルトブロック(直径～４cm程度)を多く含む。
28．灰白色(10YR8/1)シルト～黄橙色(10YR7/8)シルト～極細粒砂。当調査区の基盤層。

第56図　調査区平面・断面図

２．調査の概要

（１）基本層序

当調査区における基本層序は概ね４層に大別できた。上から順に記すと、第１層は現代の盛土であり、続いて第２層のオリーブ褐色極細粒砂・第３層の暗灰黄色極細～細粒砂はともに近世以降～宅地化直前段階における耕作土に相当しよう。第４層の灰白～黄橙色極細粒砂～シルトは当該調査区における基盤層に相当し、最終遺構検出面でもある。

次節では、４層上面検出の遺構についてその概要を報告する。

（２）検出した遺構と遺物

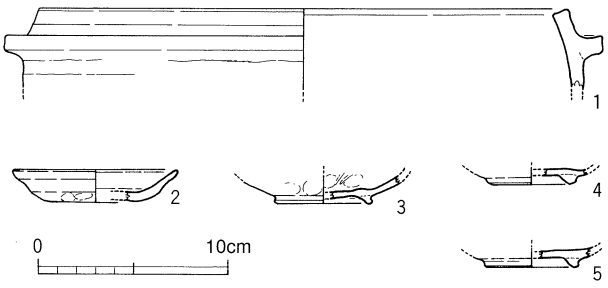
今回検出の遺構は２条の溝（溝１・２）によって占められる。以下ではそれぞれの溝の特徴について報告を行う。

溝１　調査区東端で検出した、検出幅0.9m、検出面からの深度0.2mをはかる小規模な溝である。ほぼ南北方向を指向しており、また溝１と交錯する他の溝や遺構もなく溝１自体が屈曲する様相もみられない。

埋土は褐灰色シルトを主体とし、層中における基盤層ブロックの混入度合いによって上下２層に分層可能である。基底面直上～埋土上層にわたってほぼ同時期の所産とみられる瓦器椀砕片が出土しており、出土遺物をみるかぎり埋土間に大きな時期差はみとめられない。溝１は出土遺物の特徴から主に13世紀前半代に機能していたことが考えられる。

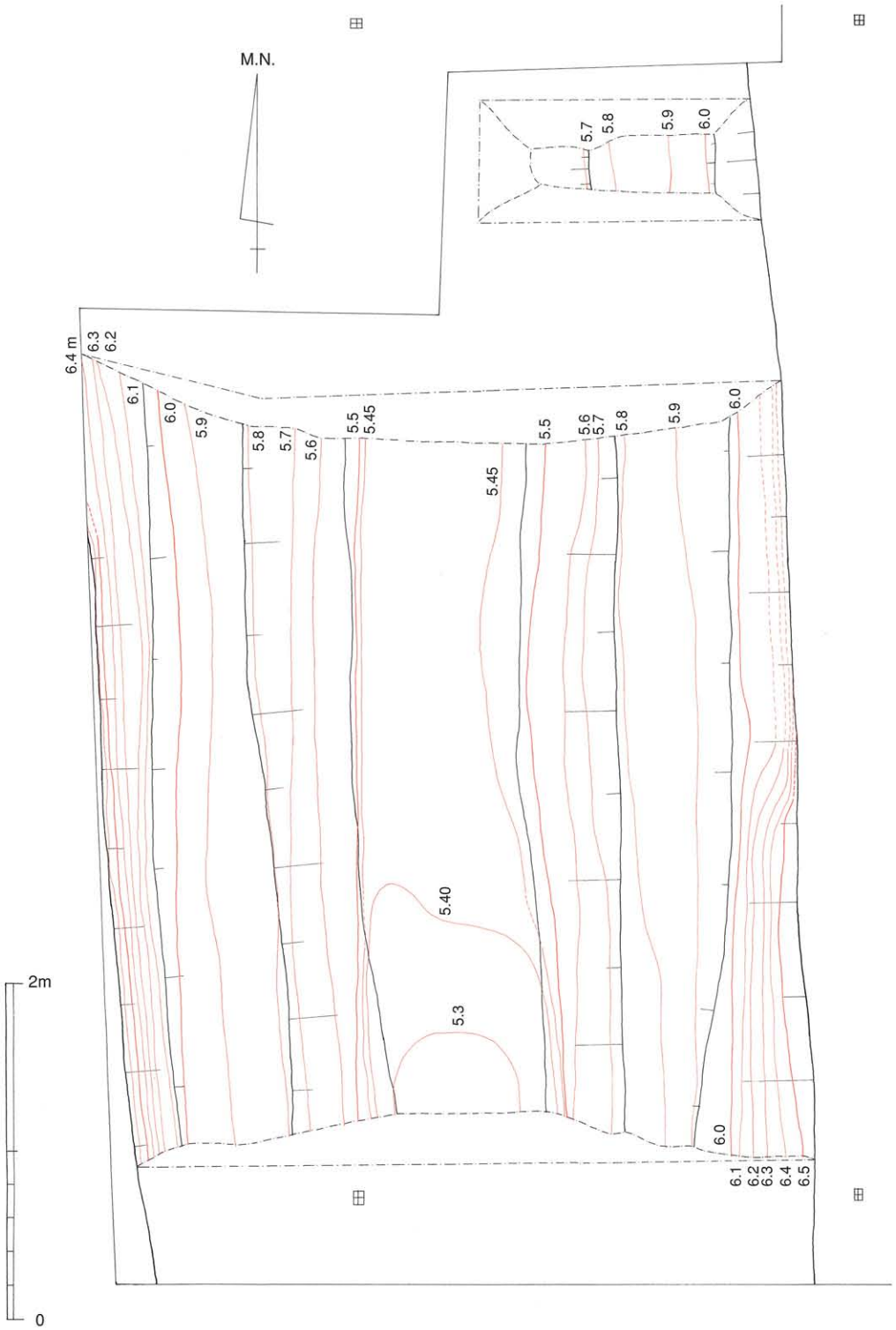
出土遺物（第57図１～５）　２は瓦質の小皿である。直径8.6cm、器高1.7cmをはかる。内外面ともに横ナデによる調整である。３～５はいずれも貼付け高台を有するタイプの瓦器椀である。高台直径はそれぞれ5.2cm、5.0cm、4.7cmをはかる。２～４は和泉型瓦器椀Ⅲ－２～３期の特徴を有することから、溝１出土の遺物は13世紀前半代に帰属するものと考えられる。１は瓦質羽釜の口縁部付近である。短い鍔を有する。

溝２（堀）　調査区西半部において検出された幅４m、深度1.3mをはかる大規模な溝であり、幅は一定のまま南北方向に直線的に伸びることが予想される（第56・58図）。溝の斜面は有段状の形態を呈し、幅１m程の比較的平坦な基底面を形成する。基底面のレベルは南向きに徐々に下がっている。基底面付近の基盤層は礫を多数包含する非常にしまりの強い粗砂層であることから、溝２の掘削は比較的軟質なシルト～極細粒砂を主体とした上部の基盤層を貫通し、この硬い粗粒砂層に達したところで停止したものとみられる。



第57図　溝１出土遺物（１：４）

溝２は、調査地一帯が原田城南城の一



第58図　堀平面図（1：40）

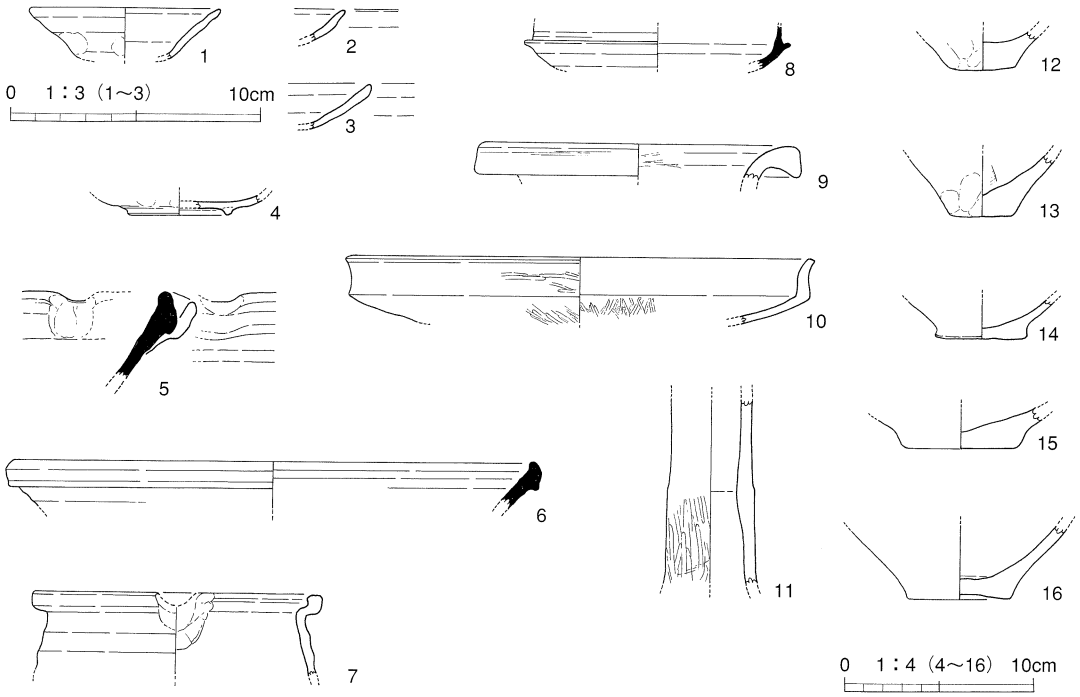
角に相当していることや、付近で原田城南城に伴う堀が検出されていることなどから、南城に関連する内堀または外堀の一部である可能性が極めて高い。その場合、溝２は検出地点からして外堀西辺の一部に相当してこよう。よって、今後溝２に関する記述は外堀の一部である可能性を前提に進めていくため、「溝２」から「堀」と表記を改めることとする。

堀埋土は上下２層に大別可能であった。埋土下層はシルト主体の自然堆積層であったのに対し、埋土上層は埋戻し土であった。基底面直上におよそ60cm堆積する埋土下層（第56図13～17層）は、粘性の強いシルトと細粒砂～極細粒砂の互層状を成しており、層中には植物遺体を多数包含している。これは埋土下層は、堀が当初から滞水環境下にあり、その折に徐々に沈澱した土や有機物等によって形成されたことを物語っている。一方、埋土上層（第56図５～12，18・19層）はブロック土を主体とする埋戻し土である。埋戻しは短期間で一気になされたようであるが、そのなかにも最低３段階の埋戻しの行程が読み取れる。第１段階は堀の東側から基盤層ブロック主体のブロック土（第56図10～12層）を投入し、続いて第２段階は西側から弥生時代～中世の遺物包含層ブロックを多量に含んだブロック土（第55図５層）が放り込まれる。第３段階は再び東側から第１段階と類似した土（第56図６層）を堀が完全に埋没するまで投入する、という３段階の工程が考えられる。ところで、堀東側から投入された埋戻し土は調査区内に限っても約36m³もの土量に達し、これら埋戻し土がどこから運ばれてきたことは課題の一つである。現在のところ、堀の東側には同時期の遺構は何ら確認されず、構築物の痕跡を見い出すことはできなかった。ただし、今回のように限られた調査範囲のなかで土塁が構築されていた可能性を全く比定することもできない。

他の調査地点における成果との比較を第４次調査地点検出の外堀の場合も、埋土の特徴は大別すると下層が自然堆積層、上層は埋戻し土という上下２層に区分でき、堀の埋没時期についても17世紀初頭頃であるなど、双方の調査地点から概ね共通した知見が得られている。このことは、南城外堀の埋戻し作業が外堀全域でほぼ一斉に実施されたことを示すものといえよう。

出土遺物は堀全体で遺物収納箱にして２箱と堀の規模の割には少量であり、しかも全て埋土上層中からの出土であった。埋土上層出土の遺物を見渡しても、弥生時代後期～近世初頭前後まで幅広い時期幅を有しており、堀の掘削または埋没年代把握を困難にさせている。今回は最も新しい時期の出土遺物として砕片ながら16世紀段階の土師器小皿がみられることから、堀の埋戻し時期は少なくとも16世紀以降であることを想定したが、その一方で18世紀以降の遺物が確認されていないことを考慮しなければならない。となると、堀は16～17世紀のおよそ200年の間に埋戻されたものと考えられるが、原田第４次調査で検出された外堀では、出土遺物の検討から16世紀末～17世紀初頭頃の埋戻し時期を想定しているため、今回検出された外堀の埋戻し時期を判断するための参考事例の一つとしたい。

出土遺物（第59図１～16）　１の土師器小皿片は復元口径7.4cm、器高1.8cm程度をはかる「へそ皿」の可能性が考えられる。16世紀代とみられる。２・３も土師器小皿の口縁部分であるが、砕片ゆえに断面のみの呈示にとどまる。４は貼付け高台を有する瓦器椀であり、高台の特徴などから13世紀前半代のものであろう。５・６は東播系須恵器片口鉢の一部とみられる。13世紀初頭前後のものとみられる。７は灰釉陶器の柄付き片口鉢とみられ、復元直径14.9cmをはかる。古瀬戸後期Ⅲ期（15世紀第２四半期）頃の所産とみられる。８は須恵器杯身片である。復元直径

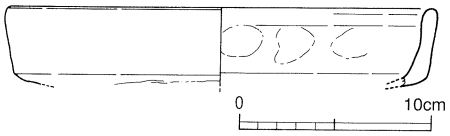


第59図　堀出土遺物（1：4　※1～3は1：3）

は約14cmである。端部は欠損のため不明であるが概ね6世紀前半代に帰属するものであろう。9は壷形土器口縁部であり、復元直径16.3cmをはかる。弥生時代後期前葉に帰属するものとみられる。10は高杯杯部であり、復元直径は24.6cmをはかる。弥生時代後期前葉の所産とみられる。11は高杯脚部片であり、直径4.4cm、残存高9.8cmをはかる。外面に縦方向のヘラミガキが施される。10と同様、弥生時代後期の所産とみられる。12～16は弥生時代壷形土器または甕形土器の底部であろう。内外面ともに摩滅が著しいため、調整技法については不明である。形態的な特徴からして弥生時代後期前後のものとみられる。

土坑1　調査区南東隅で検出された。調査区外まで範囲が及ぶものの、本来は一辺約3m、深度約0.5mをはかり、平面方形の土坑と考えられる。ゆるやかな落ち込みの後ほぼ平坦な基底面を形成する。周囲からは、土坑1と関連を有するような溝や土坑等もみとめられない。埋土の主体は、拳大（直径10cm程度）の円礫を多数含む緑灰色～黄灰色の粗～中粒砂であり、その他に基盤層ブロックならびに少量の中世～近世遺物が混入される。ちなみに拳大の礫は、その大きさからして当該調査区付近の基盤層産出のものとは考えられず、かつて何らかの工作物で使用されたものがここに一括廃棄された可能性が考えられる。なお出土瓦はすべて近世以降の特徴を有することから、土坑1は近世以降の所産と考えられる。

当該土坑の機能や詳細な掘削時期は、埋土や出土遺物からは推し量ることができなかったため不明である。



第60図　土坑1出土遺物（1：4）

出土遺物（第60図）　1点のみ図化し得た。第60図は口縁部直径22cmをはかる土師質焙烙であろう。口縁部は真上に立

ち上がる形態を呈する。屈曲部から底部にかけての形態は欠損のため不明である。中世以降の所産とみられる。

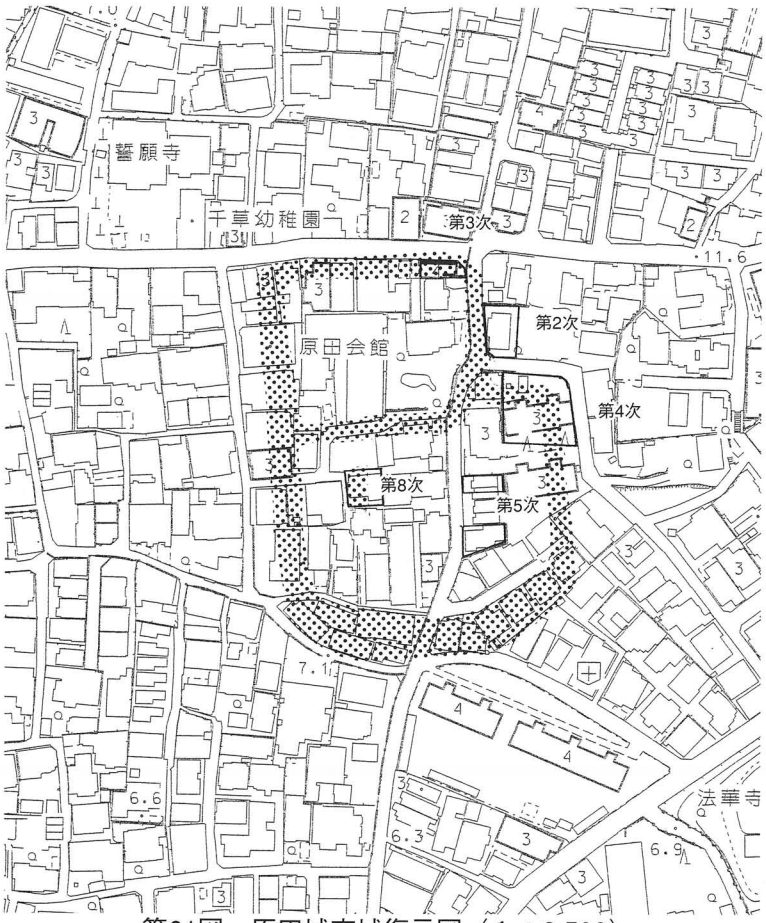
その他の遺構　今回図化していないが、基盤層直上では、上述の遺構の他に、約１ｍ間隔で南北方向に走る幅20cm程度の細い溝（※第56図では４層が溝埋土に相当）を複数条検出している。これらは近世以降の磁器や瓦砕片を含む耕作に伴う鋤溝と考えられる。よって時期的に新しい遺構でもあることから詳述は避ける。

３．まとめ

今回の調査では主に溝１ならびに南城外堀を中心としたものであったが、２つの遺構が持つ歴史的な意味は非常に大きいものと考えられる。そこで以下では、それぞれの遺構が有する意義について簡潔に記す。

溝１について　規模や直線的であることから条里にともなう区画溝、あるいは屋敷地を区画するための区画溝であったのか、その性格については周囲の様相が不明瞭ゆえに明確にできなかった。仮に条里にともなう区画溝であったと仮定すれば、付近一帯まで条里が及んでいる可能性を示唆することとなり、一方、屋敷地の区画溝であったとみれば鎌倉時代相当（13世紀代）の村が存在したことの状況証拠となり、かつ調査区東方で実施の原田遺跡第５次調査成果（平成15年度実施）との関連が注目される。その実態については、今後周辺の調査成果の蓄積によって徐々に明らかになってこよう。

堀（溝２）について　原田城南城外堀の一部を検出したことは、城郭プランの構造解明にむけて一歩前進する結果となった。原田城南城の堀割については、原田遺跡第３・４次調査成果・近世絵図（『原田村改正絵図』）による復元を過去に行っており（参考文献４）、それも併せて参照されたい。とはいえ現在のところ、堀の



第61図　原田城南城復元図（１：2,500）

検出は断片的であること、堀出土の遺物が稀薄であること、主郭部分が未調査であることなど、南城の実態解明にはまだまだ時間を要するであろう。ここでは断片的な情報であることを承知のうえで、これまでの南城の堀関連の発掘調査による成果を集成し、堀からうかがえる南城の範囲を示したものが第61図である。スクリーントーンが推定堀ラインを示し、今回の堀は図に示す通り推定堀ラインとは別個に表示している。なお、今回の調査では原田城南城に関する知見が主であるため、同北城の復元は省略している。

今回検出の外堀が仮に従来の外堀西辺に比定されうるならば、外堀の東西幅が推定ラインよりも約20m縮小されることとなり、内堀と外堀の西辺ラインがずれることとなる。これに対し推定堀ラインとは別個の堀を想定した場合、南城の堀ラインがさらに複雑であった可能性も考えられるが、現段階では資料的な制約によりその評価はできない。

外堀の明確な掘削～廃絶時期は今回も明らかにし得なかったが、その最たる要因である出土遺物の少なさは逆に堀機能時における間断のない維持管理を示すものではないだろうか。この背景の一つとして、外堀機能時にあたる16世紀後半代に、原田城は織田信長軍が有岡城主荒木村重を討伐する際の前線基地の一つとして利用されたようであり、こうした軍事的緊張が考えられないだろうか。いずれにせよ、南城に関連する検出遺構は現在のところ堀のみであり、南城内外の堀の性格・関連については内郭部分の調査を待たねばならないであろう。

【参考・引用文献】

1．豊中市教育委員会　1996「原田遺跡第１次調査」『豊中市埋蔵文化財年報』Vol 4
2．豊中市教育委員会　2000「原田遺跡第２次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』平成11年度
3．豊中市教育委員会　2001「原田遺跡第３次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』平成12年度
4．豊中市教育委員会　2001「原田遺跡第４次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』平成12年度
5．豊中市教育委員会　2006「原田遺跡第５次～７次調査」『文化財ニュース豊中』No.33

第Ｘ章　確認調査の成果

確認調査の概要

昨年度１月～３月および今年度４月～12月の間に個人住宅を対象に行なった確認調査は、39件を数え、昨年度９件、今年度30件という内訳である。このうち、９件の調査で遺構等が確認され、うち５件については協議の結果、原田遺跡第８次調査・岡町北遺跡第６次調査・岡町南遺跡第３次調査・岡町遺跡第２次調査・金寺山廃寺第５次調査として本格的な発掘調査を行なうこととなった。残り２件については、建物基礎の設計変更などから、本格的な発掘調査には至っていない。

以下、確認調査の概要について報告する。第62図に掲載した調査地点位置図の番号および各確認調査の番号は、下表の番号に対応する。

第１表　確認調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査原因	調査対象面積（m²）	遺構等の有無	調査後の処置	担当者	備考
1	桜井谷窯跡群	上野西４丁目228-2	20060112	個人住宅建設	53.00	未確認	着工	陣内	
2	桜塚古墳群	中桜塚２丁目339	20060202	個人住宅建設	49.34	無	着工	橘田	
3	桜塚古墳群	南桜塚２丁目52,53	20060209	個人住宅建設	102.76	無	着工	橘田	
4	原田遺跡	原田元町２丁目184,186の一部	20060216	個人住宅建設	75.50	有	本調査（原田８次）	橘田	
5	桜井谷窯跡群	宮山町４丁目14-58	20060216	個人住宅建設	51.71	無	着工	橘田	
6	桜塚古墳群	南桜塚３丁目65-8	20060316	個人住宅建設	82.68	無	着工	陣内	
7	蛍池遺跡	蛍池中町１丁目5-8	20060323	個人住宅建設	67.07	無	着工	陣内	
8	島田遺跡	庄内幸町２丁目134-17	20060330	個人住宅建設	53.03	未確認	着工	陣内	
9	本町遺跡	本町３丁目52-1	20060330	個人住宅建設	117.77	未確認	再立会後、慎重工事	陣内	基礎深度浅
10	桜塚古墳群	曽根東町１丁目48-3	20060413	個人住宅建設	171.91	無	着工	陣内	
11	新免遺跡	末広町１丁目7-1	20060420	個人住宅建設	63.65	無	着工	橘田	
12	岡町北遺跡	岡町北２丁目8	20060427	個人住宅建設	64.17	有	本調査（岡町北６次）	橘田	
13	桜塚古墳群	南桜塚１丁目16-15	20060501	個人住宅建設	46.77	無	着工	陣内	
14	柴原遺跡	柴原町２丁目16-2,20-1	20060511	個人住宅建設	36.45	無	着工	陣内	
15	本町遺跡	本町１丁目156	20060525	個人住宅建設	52.85	未確認	慎重工事	陣内	基礎深度浅
16	岡町南遺跡	岡町南１丁目88-1	20060601	個人住宅建設	81.15	有	本調査（岡町南３次）	橘田	
17	原田遺跡	原田元町２丁目176-2	20060608	個人住宅建設	57.13	有	再立会後、慎重工事	橘田	計画変更
18	桜塚古墳群	南桜塚３丁目65-7	20060608	個人住宅建設	83.73	無	着工	橘田	
19	岡町遺跡	中桜塚２丁目282-1	20060608	個人住宅建設	58.21	有	本調査（岡町２次）	橘田	
20	原田遺跡	原田元町３丁目22-9	20060629	個人住宅建設	45.38	無	着工	陣内	
21	桜井谷窯跡群	上野西４丁目234-4	20060629	個人住宅建設	66.24	未確認	着工	陣内	
22	庄内遺跡	庄内幸町４丁目52-14	20060706	個人住宅建設	38.85	無	着工	橘田	
23	金寺山廃寺	本町８丁目112	20060712	個人住宅建設	112.45	有	本調査（金寺山廃寺５次）	橘田	
24	熊野田遺跡	熊野町３丁目24-5	20060712	個人住宅建設	60.19	未確認	着工	橘田	
25	桜井谷窯跡群	向丘２丁目810-3	20060720	個人住宅建設	58.38	無	着工	陣内	
26	桜井谷窯跡群	上野西４丁目157-1	20060727	個人住宅建設	93.66	未確認	着工	陣内	
27	桜塚古墳群	中桜塚２丁目144	20060727	個人住宅建設	49.69	無	着工	陣内	
28	庄内遺跡	庄内西町４丁目30-4	20060727	個人住宅建設	64.18	未確認	着工	陣内	
29	箕輪遺跡	箕輪３丁目177-1の一部	20060907	個人住宅建設	110.98	未確認	着工	陣内	
30	岡町北遺跡	岡町北１丁目112,112-1,113-1	20060921	個人住宅建設	88.00	無	着工	陣内	
31	穂積遺跡	服部豊町１丁目204-25	20060921	個人住宅建設	34.19	無	着工	陣内	
32	内田遺跡	桜の町４丁目17,17-2	20061019	個人住宅建設	71.46	未確認	着工	陣内	
33	山ノ上遺跡	立花町２丁目121	20061102	個人住宅建設	60.14	有	再立会後、慎重工事	陣内	計画変更
34	本町遺跡	本町９丁目165-5	20061207	個人住宅建設	67.19	未確認	着工	陣内	
35	服部遺跡	曽根東町６丁目9-11	20061207	個人住宅建設	63.76	未確認	着工	陣内	
36	新免遺跡	立花町１丁目14-1	20061221	個人住宅建設	70.20	無	着工	陣内	
37	小曽根遺跡	小曽根１丁目1764	20061221	個人住宅建設	45.98	有	再立会後、着工	陣内・橘田	基礎深度浅
38	熊野田遺跡	熊野町３丁目24-7	20061228	個人住宅建設	70.80	有	再立会後、慎重工事	陣内	基礎深度浅
39	桜井谷窯跡群	上野西２丁目132-13	20061228	個人住宅建設	56.50	無	着工	陣内	

第62図　確認調査地点位置図

2006－01　桜井谷窯跡群

調査日：平成18年(2006年)1月12日

調査場所：豊中市上野西4丁目228-2

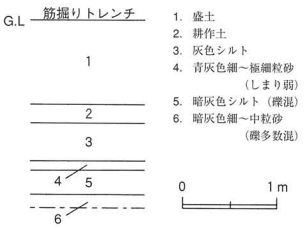
調査対象面積：53.0m²

調査の方法：重機により筋堀りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下200cm)内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第63図　トレンチ掘削状況



第64図　トレンチ断面図

2006－02　桜塚古墳群

調査日：平成18年(2006年)2月2日

調査場所：豊中市中桜塚2丁目399

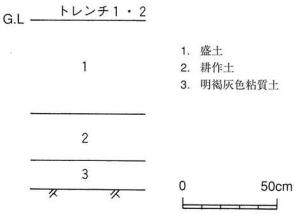
調査対象面積：49.34m²

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下90cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第65図　トレンチ掘削状況



第66図　トレンチ断面図

2006－03　桜塚古墳群

調査日：平成18年(2006年)2月9日

調査場所：豊中市南桜塚2丁目52,53

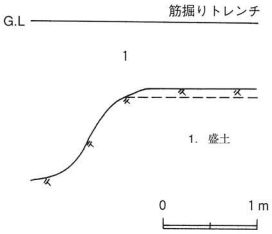
調査対象面積：102.76m²

調査の方法：重機により筋堀りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下70～170cmにかけて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第67図　トレンチ掘削状況



第68図　トレンチ断面図

2006－04　原田遺跡

調査日：平成18年(2006年)2月16日

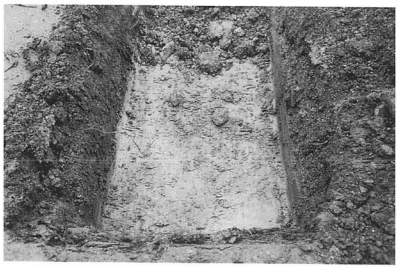
調査場所：豊中市原田元町2丁目184,186の一部

調査対象面積：75.5m²

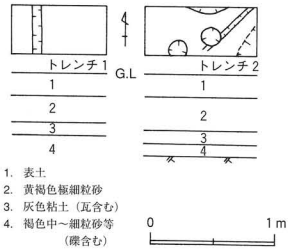
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1では地表下50cmで整地層を、その上面で遺構を確認し、トレンチ2では地表下65cmで基盤層を、その上面及び地表下55cmで遺構を確認した。

調査後の処置：協議後、発掘調査を行う。
(原田遺跡第8次調査)



第69図　トレンチ掘削状況



第70図　トレンチ平面・断面図

2006－05　桜井谷窯跡群

調査日：平成18年（2006年）2月16日

調査場所：豊中市宮山町4丁目14-58

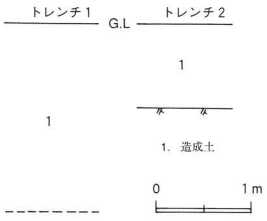
調査対象面積：51.71m²

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ2では地表下90cmで基盤層を検出し、トレンチ1では掘削深度（地表下200cm）内において遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第71図　トレンチ掘削状況



第72図　トレンチ断面図

2006－06　桜塚古墳群

調査日：平成18年（2006年）3月16日

調査場所：豊中市南桜塚3丁目65-8

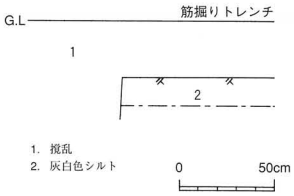
調査対象面積：82.68m²

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下30cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第73図　トレンチ掘削状況



第74図　トレンチ断面図

2006－07　蛍池遺跡

調査日：平成18年（2006年）3月23日

調査場所：豊中市蛍池中町1丁目5-8

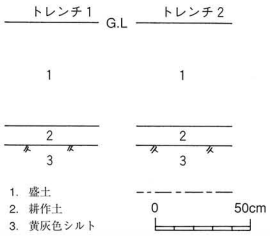
調査対象面積：67.07m²

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下65cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第75図　トレンチ掘削状況



第76図　トレンチ断面図

2006－08　島田遺跡

調査日：平成18年（2006年）3月30日

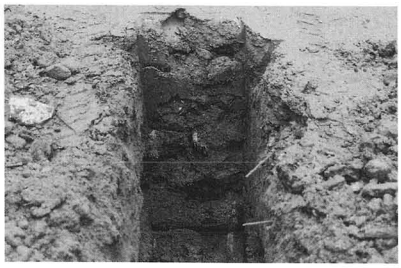
調査場所：豊中市庄内幸町2丁目134-17

調査対象面積：53.03m²

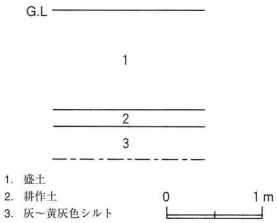
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下160cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第77図　トレンチ掘削状況



第78図　トレンチ断面図

2006－09　本町遺跡

調査日：平成18年(2006年)３月30日

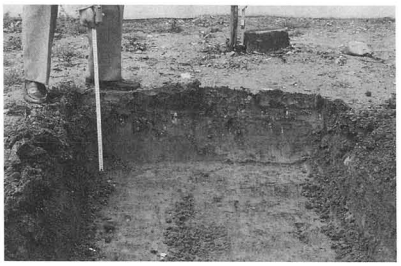
調査場所：豊中市本町３丁目52-1

調査対象面積：117.77m²

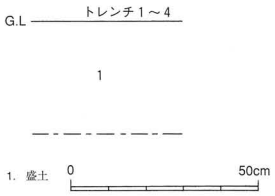
調査の方法：重機によりトレンチ４か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下30cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：隣地において本調査を実施していることから、再立会後に慎重工事を指示。



第79図　トレンチ掘削状況



第80図　トレンチ断面図

2006－10　桜塚古墳群

調査日：平成18年(2006年)４月13日

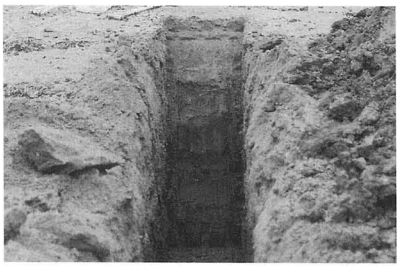
調査場所：豊中市曽根東町１丁目48-3

調査対象面積：171.91m²

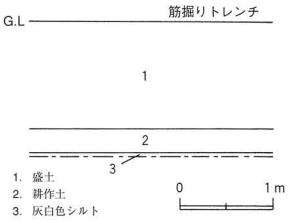
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ１か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下140cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第81図　トレンチ掘削状況



第82図　トレンチ断面図

2006－11　新免遺跡

調査日：平成18年(2006年)４月20日

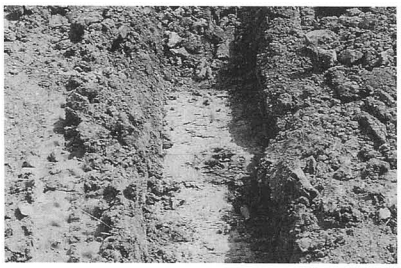
調査場所：豊中市末広町１丁目7-1

調査対象面積：63.65m²

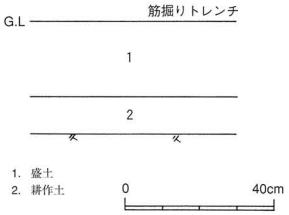
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ１か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下30cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第83図　トレンチ掘削状況



第84図　トレンチ断面図

2006－12　岡町北遺跡

調査日：平成18年(2006年)４月27日

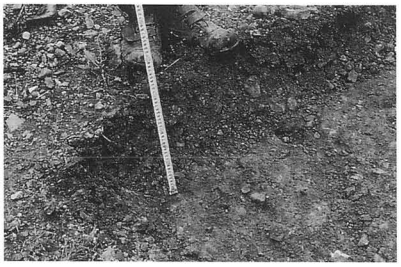
調査場所：豊中市岡町北２丁目8

調査対象面積：64.17m²

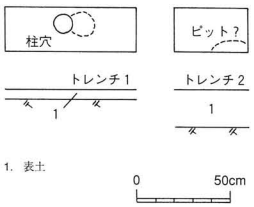
調査の方法：重機によりトレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ１・２ともに地表下５・20cmにおいて基盤層を検出し、その上面で遺構を確認した。

調査後の処置：協議後、発掘調査を行う。
（岡町北遺跡第６次調査）



第85図　トレンチ掘削状況



第86図　トレンチ平面・断面図

2006－13　桜塚古墳群

調査日：平成18年（2006年）5月1日

調査場所：豊中市南桜塚1丁目16-15

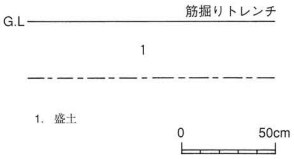
調査対象面積：46.77m²

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下30cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第87図　トレンチ掘削状況



第88図　トレンチ断面図

2006－14　柴原遺跡

調査日：平成18年（2006年）5月11日

調査場所：豊中市柴原町2丁目16-2,20-1

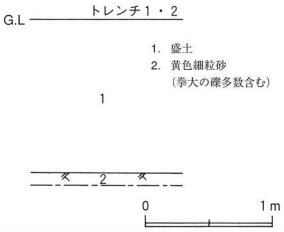
調査対象面積：36.45m²

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下120cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第89図　トレンチ掘削状況



第90図　トレンチ掘削状況

2006－15　本町遺跡

調査日：平成18年（2006年）5月25日

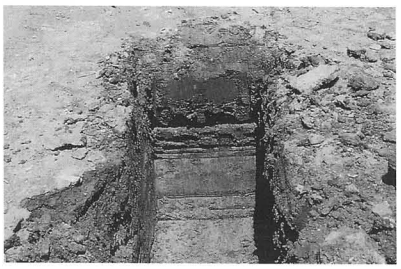
調査場所：豊中市本町1丁目156

調査対象面積：52.85m²

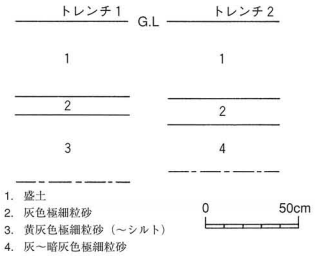
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下85cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：周辺の試掘結果を考慮し、慎重工事を指示。



第91図　トレンチ掘削状況



第92図　トレンチ断面図

2006－16　岡町南遺跡

調査日：平成18年（2006年）6月1日

調査場所：豊中市岡町南1丁目88-1

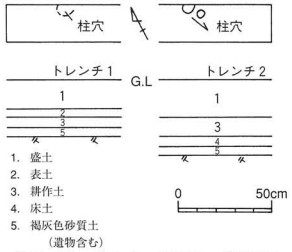
調査対象面積：81.15m²

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2において地表下30・40cmで基盤層を検出し、その上面で遺構を確認した。

調査後の処置：協議後、発掘調査を行う。
（岡町南遺跡第3次調査）

第93図　トレンチ掘削状況



第94図　トレンチ平面・断面図

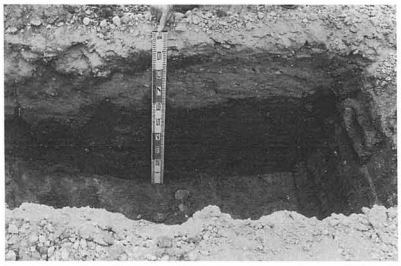
2006－17　原田遺跡

調査日：平成18年(2006年)６月８日

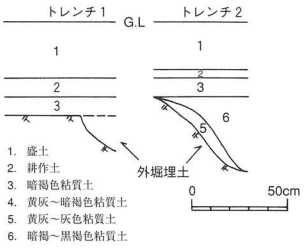
調査場所：豊中市原田元町２丁目176-2

調査対象面積：57.13m²

調査の方法：重機によりトレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：トレンチ１・２ともに地表下40cmにおいて原田城南城外堀を確認した。
調査後の処置：建物基礎の設計変更により、再立会後、慎重工事を指示。



第95図　トレンチ掘削状況



第96図　トレンチ断面図

2006－18　桜塚古墳群

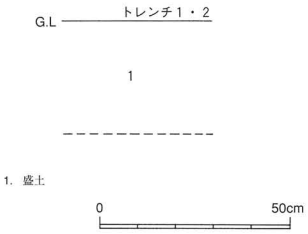
調査日：平成18年(2006年)６月８日

調査場所：豊中市南桜塚３丁目65-7

調査対象面積：83.73m²

調査の方法：重機によりトレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：トレンチ１・２ともに掘削深度（地表下30cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第97図　トレンチ掘削状況



第98図　トレンチ断面図

2006－19　岡町遺跡

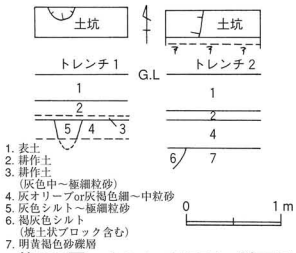
調査日：平成18年(2006年)６月８日

調査場所：豊中市中桜塚２丁目282-1

調査対象面積：58.21m²

調査の方法：重機によりトレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：トレンチ１・２ともに地表下50・80cmにおいて、遺構を確認した。
調査後の処置：協議後、発掘調査を行う。
（岡町遺跡第２次調査）

第99図　トレンチ掘削状況



第100図　トレンチ平面・断面図

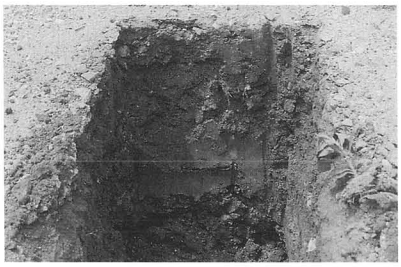
2006－20　原田遺跡

調査日：平成18年(2006年)６月29日

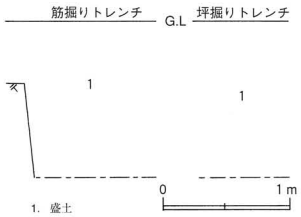
調査場所：豊中市原田元町３丁目22-9

調査対象面積：45.38m²

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ１か所、坪掘りトレンチ１か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：両トレンチともに掘削深度（地表下125cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第101図　トレンチ掘削状況



第102図　トレンチ断面図

2006－21　桜井谷窯跡群

調査日：平成18年（2006年）6月29日

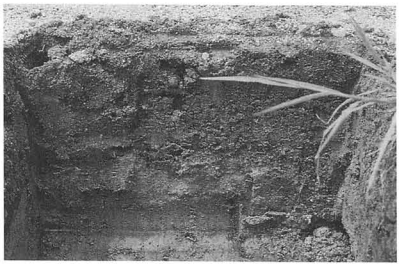
調査場所：豊中市上野西4丁目234-4

調査対象面積：66.24m²

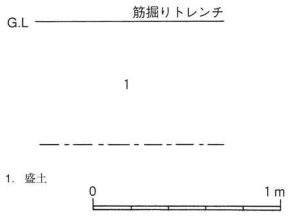
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下65cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第103図　トレンチ掘削状況



第104図　トレンチ断面図

2006－22　庄内遺跡

調査日：平成18年（2006年）7月6日

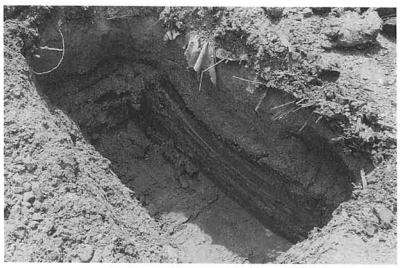
調査場所：豊中市庄内幸町4丁目52-14

調査対象面積：38.85m²

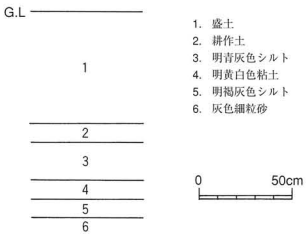
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下110cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第105図　トレンチ掘削状況



第106図　トレンチ断面図

2006－23　金寺山廃寺

調査日：平成18年（2006年）7月12日

調査場所：豊中市本町8丁目112

調査対象面積：112.45m²

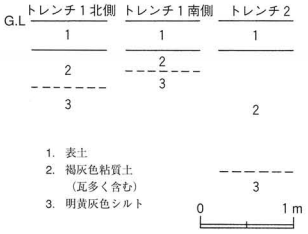
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに遺構は検出されなかったが、瓦を多く含む遺物包含層が確認された。

調査後の処置：金寺山廃寺に関連する瓦の堆積状況等を把握する上で重要と判断。協議後、発掘調査を行う。

（金寺山廃寺第5次調査）

第107図　トレンチ掘削状況



第108図　トレンチ断面図

2006－24　熊野田遺跡

調査日：平成18年（2006年）7月12日

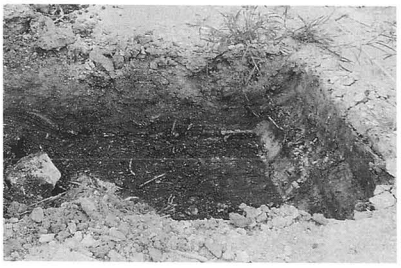
調査場所：豊中市熊野町3丁目24-5

調査対象面積：60.19m²

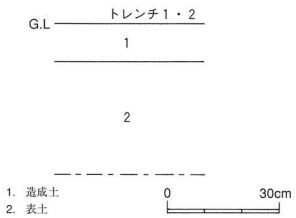
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下40cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第109図　トレンチ掘削状況



第110図　トレンチ断面図

2006－25　桜井谷窯跡群

調査日：平成18年(2006年)７月20日

調査場所：豊中市向丘２丁目810-3

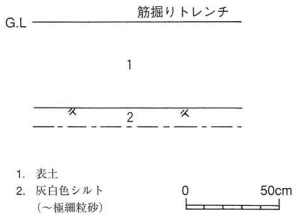
調査対象面積：58.38m²

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ１か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下45cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第111図　トレンチ掘削状況



第112図　トレンチ断面図

2006－26　桜井谷窯跡群

調査日：平成18年(2006年)７月27日

調査場所：豊中市上野西４丁目157-1

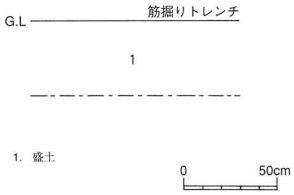
調査対象面積：93.66m²

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ１か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下40cm)内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第113図　トレンチ掘削状況



第114図　トレンチ断面図

2006－27　桜塚古墳群

調査日：平成18年(2006年)７月27日

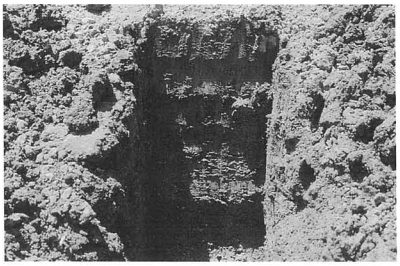
調査場所：豊中市中桜塚２丁目144

調査対象面積：49.69m²

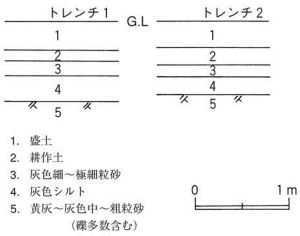
調査の方法：重機によりトレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ１・２において地表下80・85cmで基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第115図　トレンチ掘削状況



第116図　トレンチ断面図

2006－28　庄内遺跡

調査日：平成18年(2006年)７月27日

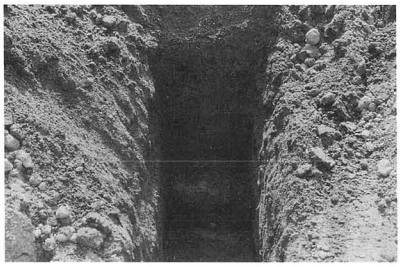
調査場所：豊中市庄内西町４丁目30-4

調査対象面積：64.18m²

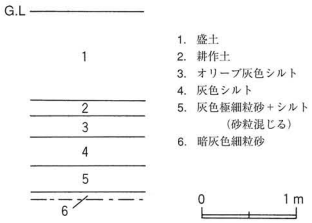
調査の方法：重機によりトレンチ１か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下200cm)内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第117図　トレンチ掘削状況



第118図　トレンチ断面図

2006－29　箕輪遺跡

調査日：平成18年（2006年）9月7日

調査場所：豊中市箕輪3丁目177-1の一部

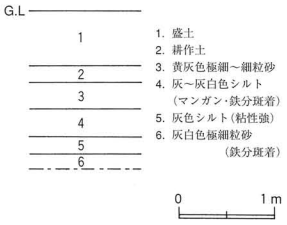
調査対象面積：110.98m²

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下170cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第119図　トレンチ掘削状況



第120図　トレンチ断面図

2006－30　岡町北遺跡

調査日：平成18年（2006年）9月21日

調査場所：豊中市岡町北1丁目112,112-1,113-1

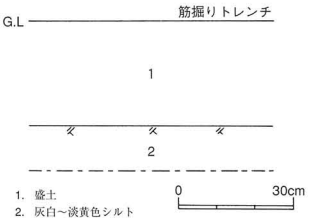
調査対象面積：88.0m²

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下28cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第121図　トレンチ掘削状況



第122図　トレンチ断面図

2006－31　穂積遺跡

調査日：平成18年（2006年）9月21日

調査場所：豊中市服部豊町1丁目204-25

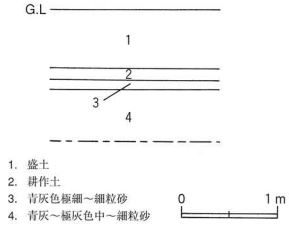
調査対象面積：34.19m²

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下140cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第123図　トレンチ掘削状況



第124図　トレンチ断面図

2006－32　内田遺跡

調査日：平成18年（2006年）10月19日

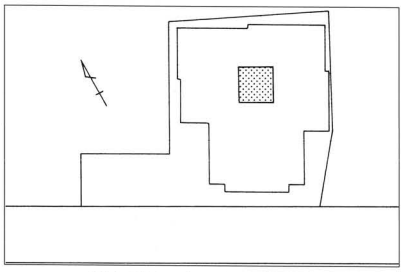
調査場所：豊中市桜の町4丁目17,17-2

調査対象面積：71.46m²

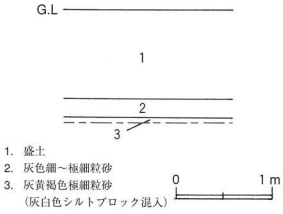
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下120cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第125図　トレンチ位置図



第126図　トレンチ断面図

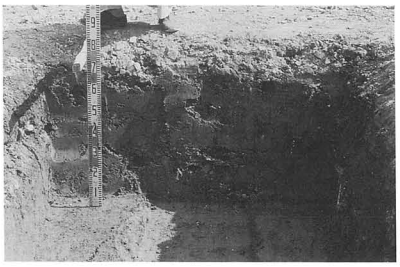
2006－33　山ノ上遺跡

調査日：平成18年(2006年)11月２日

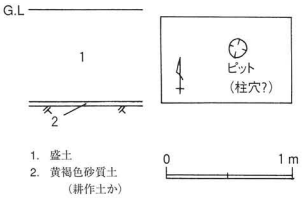
調査場所：豊中市立花町２丁目121

調査対象面積：60.14m²

調査の方法：重機によりトレンチ１か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下78cmにおいて基盤層を、その上面では遺構を検出したが、遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：建物基礎の設計変更により、再立会後、慎重工事を指示。



第127図　トレンチ掘削状況



第128図　トレンチ平面・断面図

2006－34　本町遺跡

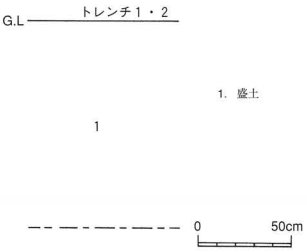
調査日：平成18年(2006年)12月７日

調査場所：豊中市本町９丁目165-5

調査対象面積：67.19m²

調査の方法：重機によりトレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度(地表下110cm)内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第129図　トレンチ掘削状況



第130図　トレンチ断面図

2006－35　服部遺跡

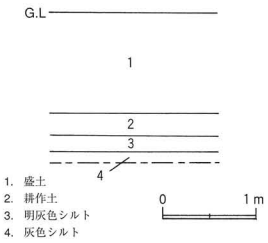
調査日：平成18年(2006年)12月７日

調査場所：豊中市曽根東町６丁目9-11

調査対象面積：63.76m²

調査の方法：重機によりトレンチ１か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度(地表下160cm)内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第131図　トレンチ掘削状況



第132図　トレンチ断面図

2006－36　新免遺跡

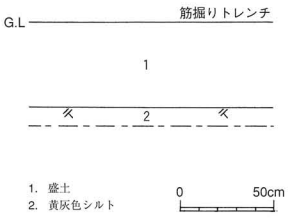
調査日：平成18年(2006年)12月21日

調査場所：豊中市立花町１丁目14-1

調査対象面積：70.2m²

調査の方法：重機により筋堀りトレンチ１か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下45cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第133図　トレンチ掘削状況



第134図　トレンチ断面図

2006－37　小曽根遺跡

調査日：平成18年(2006年)12月21日

調査場所：豊中市小曽根１丁目1764

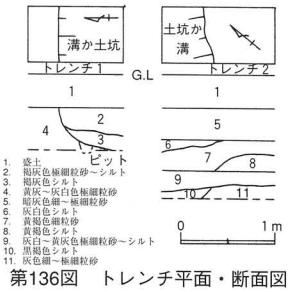
調査対象面積：45.98m²

調査の方法：重機によりトレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ１では地表下35cm、トレンチ２では地表下115cmにおいて明確な遺構を検出した。

調査後の処置：基礎工事は盛土内に収まるため、再立会後に着工を指示。

第135図　トレンチ掘削状況



第136図　トレンチ平面・断面図

2006－38　熊野田遺跡

調査日：平成18年(2006年)12月28日

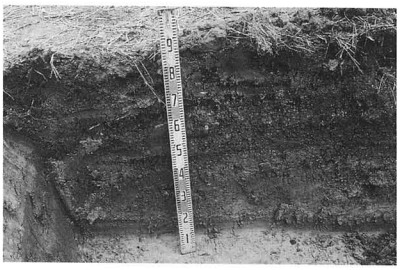
調査場所：豊中市熊野町３丁目24-7

調査対象面積：70.8m²

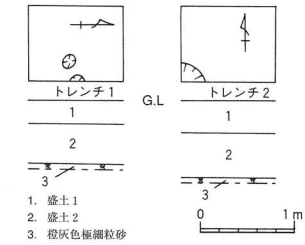
調査の方法：重機によりトレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ１では地表下68cm、トレンチ２では地表下82cmにおいて基盤層を検出し、その直上で遺構を確認した。

調査後の処置：基礎工事は盛土内に収まるため、再立会後に慎重工事を指示。



第137図　トレンチ掘削状況



第138図　トレンチ平面・断面図

2006－39　桜井谷窯跡群

調査日：平成18年(2006年)12月28日

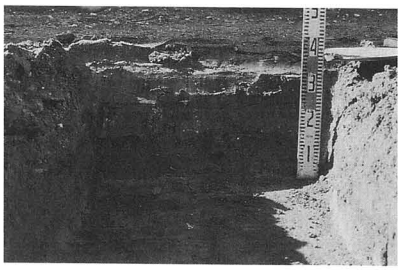
調査場所：豊中市上野西２丁目132-13

調査対象面積：56.5m²

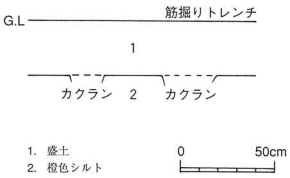
調査の方法：重機により筋堀りトレンチ１か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下29cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



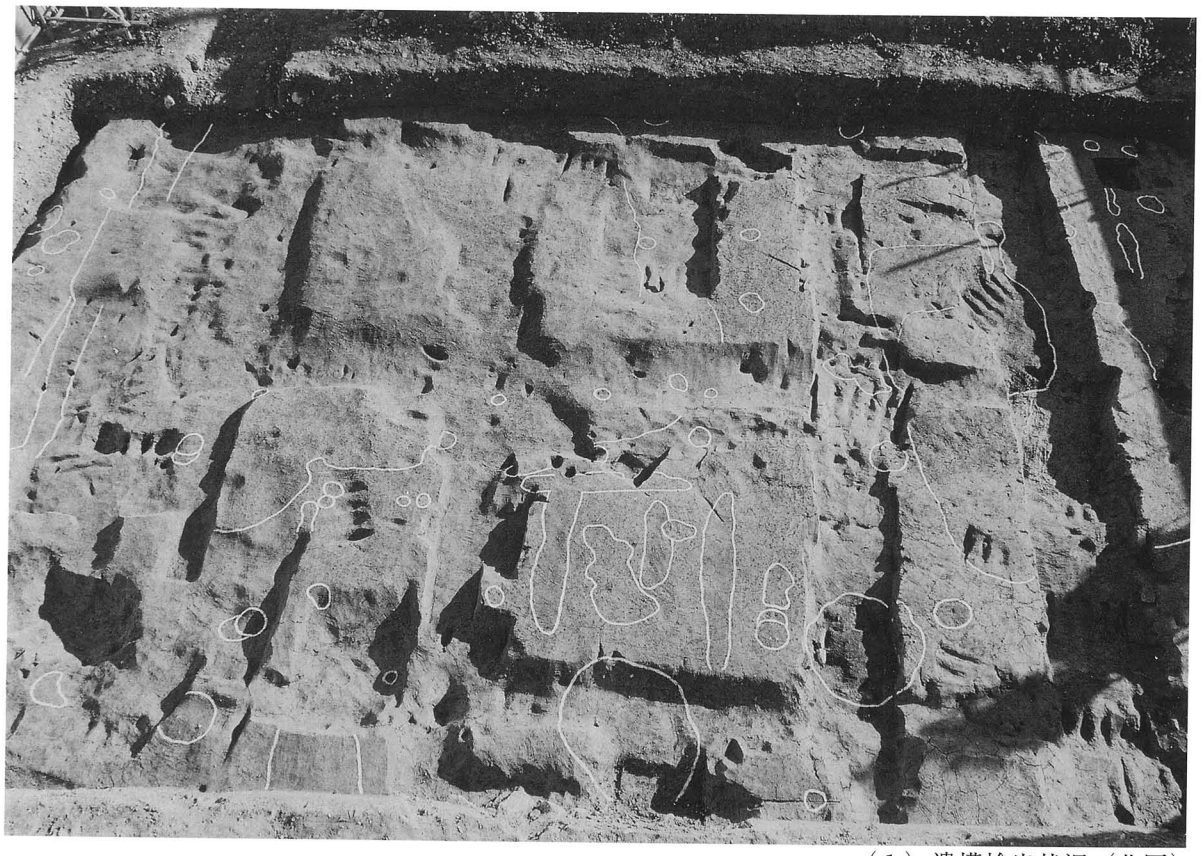
第139図　トレンチ掘削状況



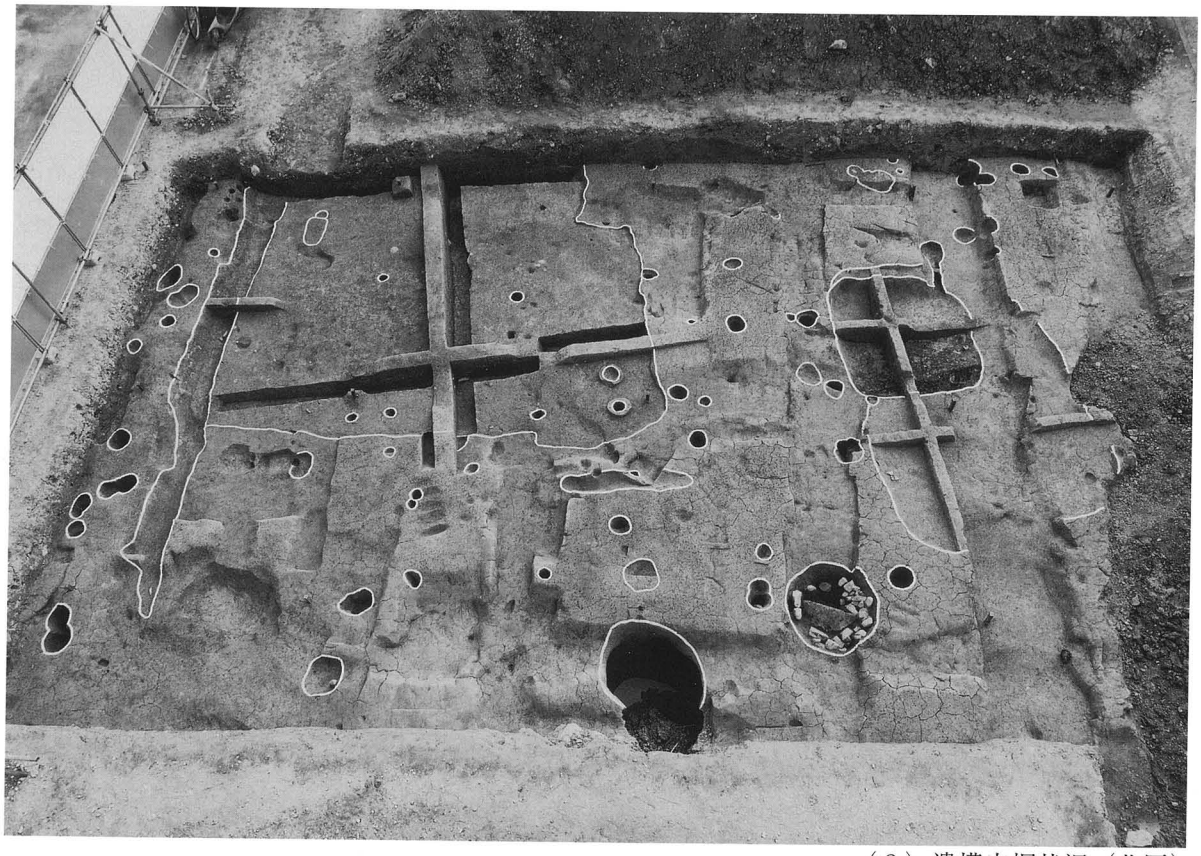
第140図　トレンチ断面図

図　　版

図版1　内田遺跡第8次調査



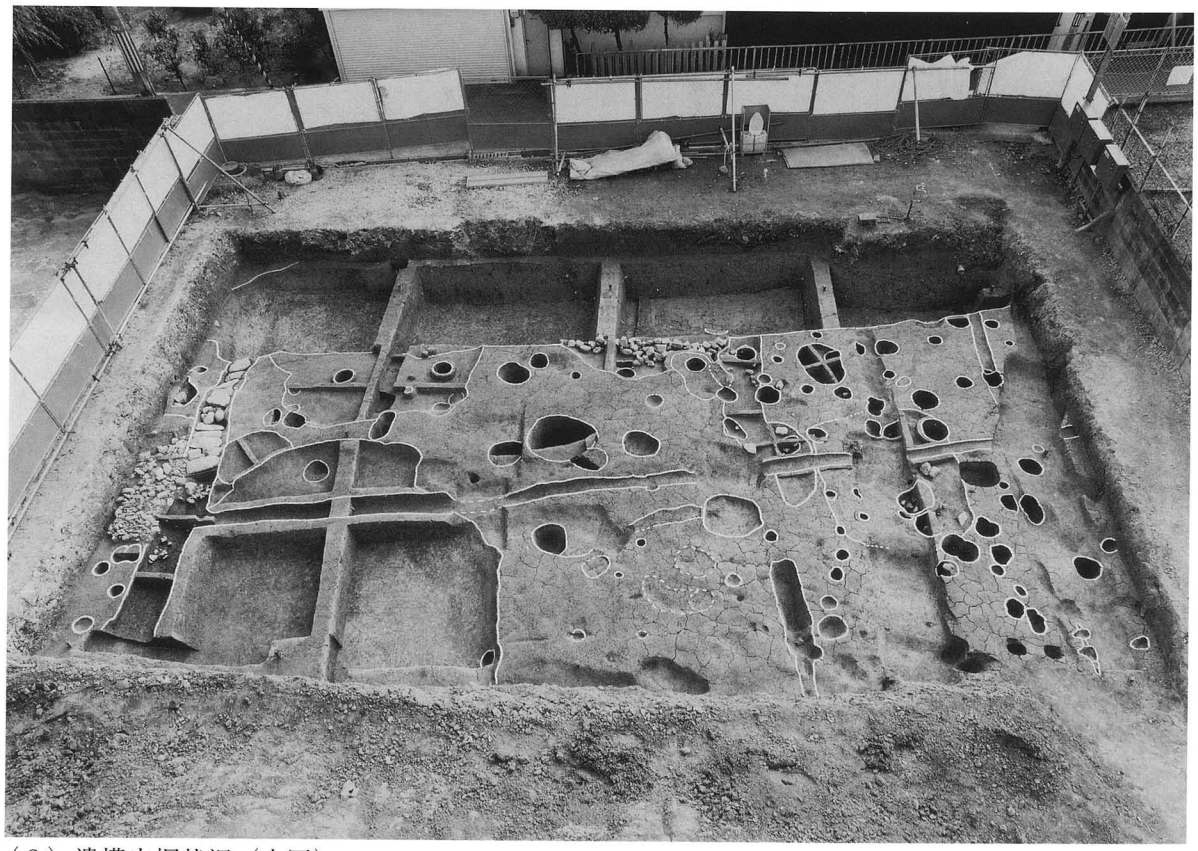
（1）遺構検出状況（北区）



（2）遺構完掘状況（北区）

図版2　内田遺跡第8次調査

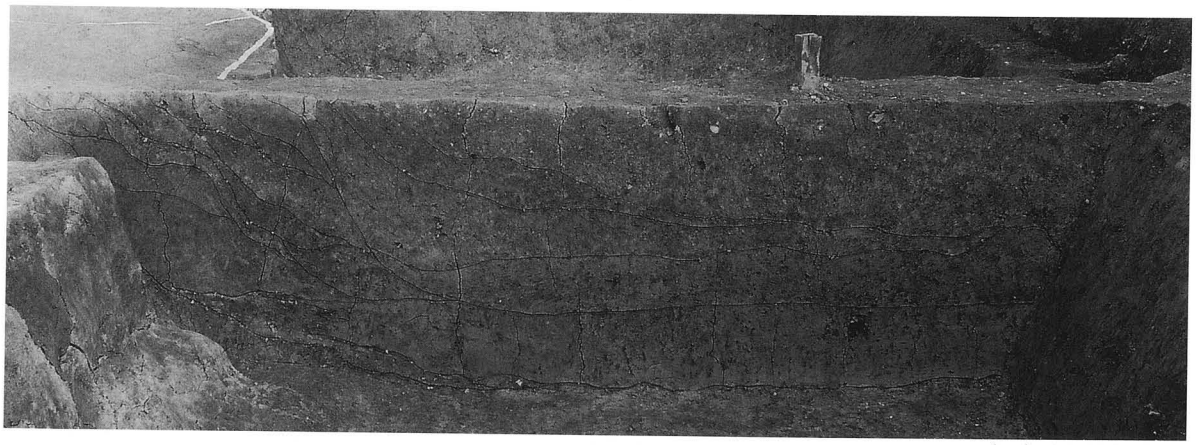
（1）遺構検出状況（南区）



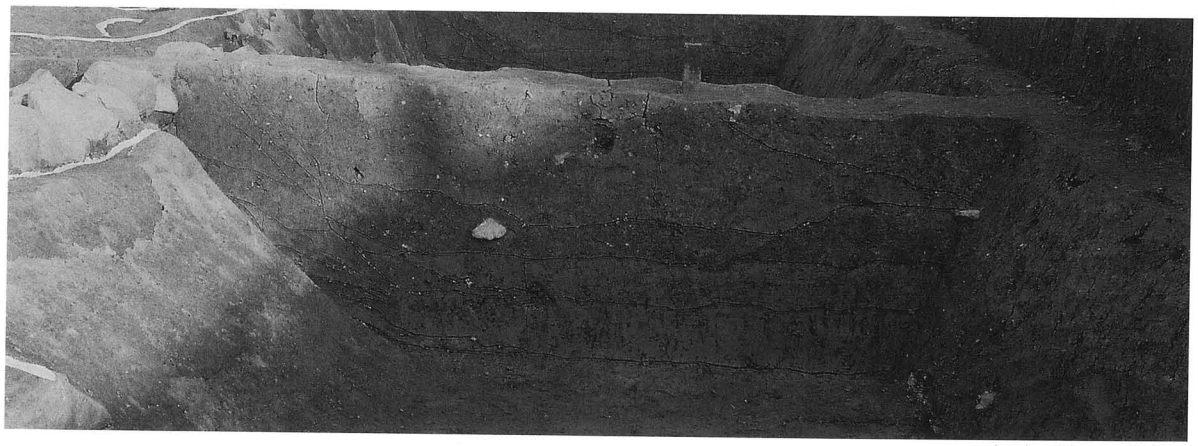
（2）遺構完掘状況（南区）

図版3　内田遺跡第8次調査

（1）堀（西から）



（2）堀　東断面



（3）堀　西断面

図版4　内田遺跡第8次調査

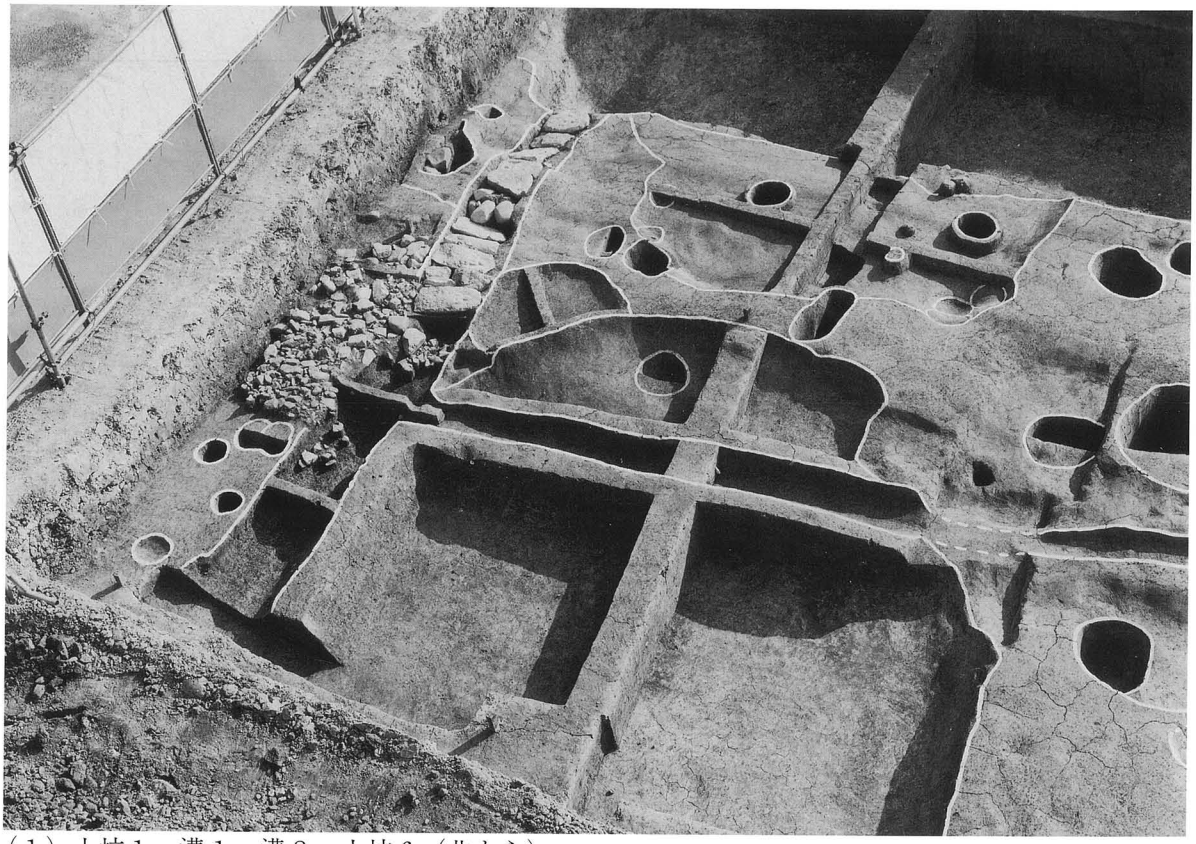
（1）溝1と礫敷遺構（北から）

（2）溝1　石蓋の状況（東から）

（1）溝1　石蓋北端部の被覆粘土の状況（西から）

（2）溝1土層断面（東から）

図版6　内田遺跡第8次調査



（1）土坑1、溝1、溝2、土坑6（北から）

（2）土坑1土層断面（北西から）

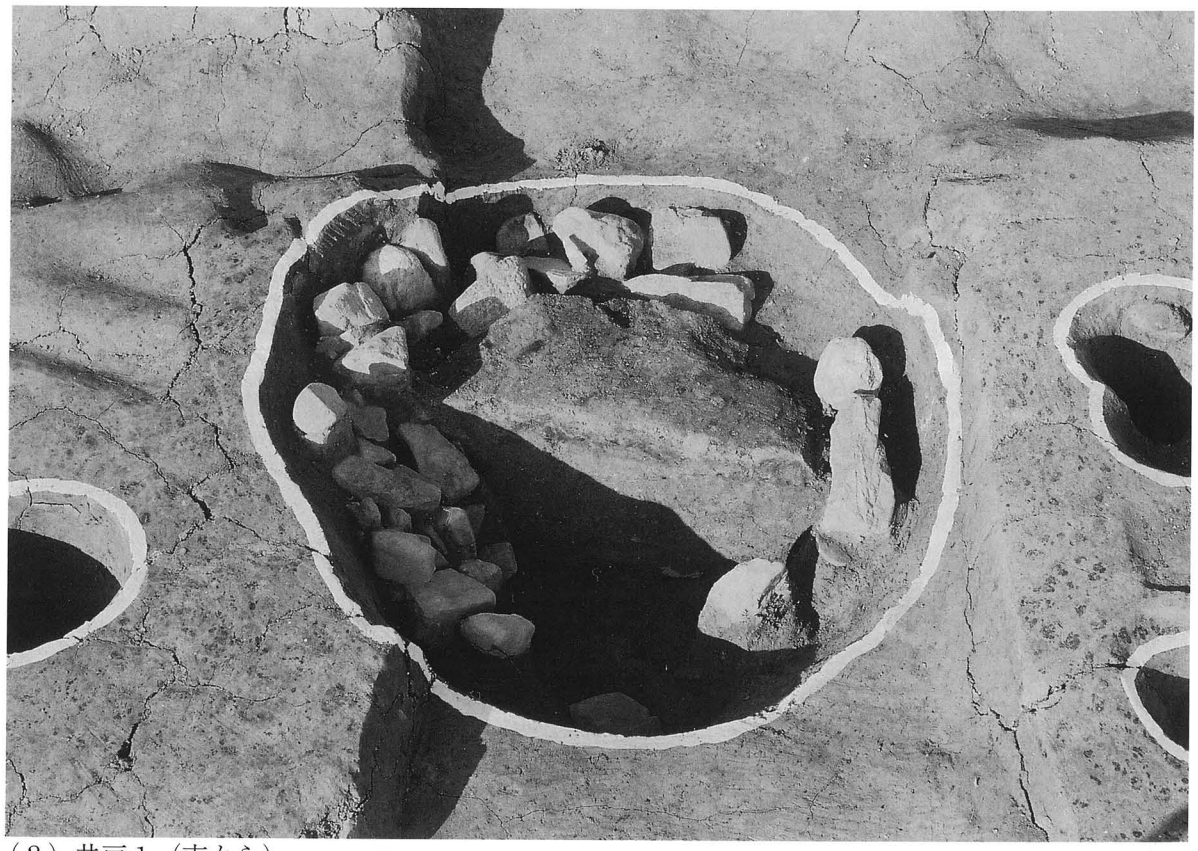
図版7　内田遺跡第8次調査

（1）土坑4（北から）

（2）土坑4土層断面（東から）

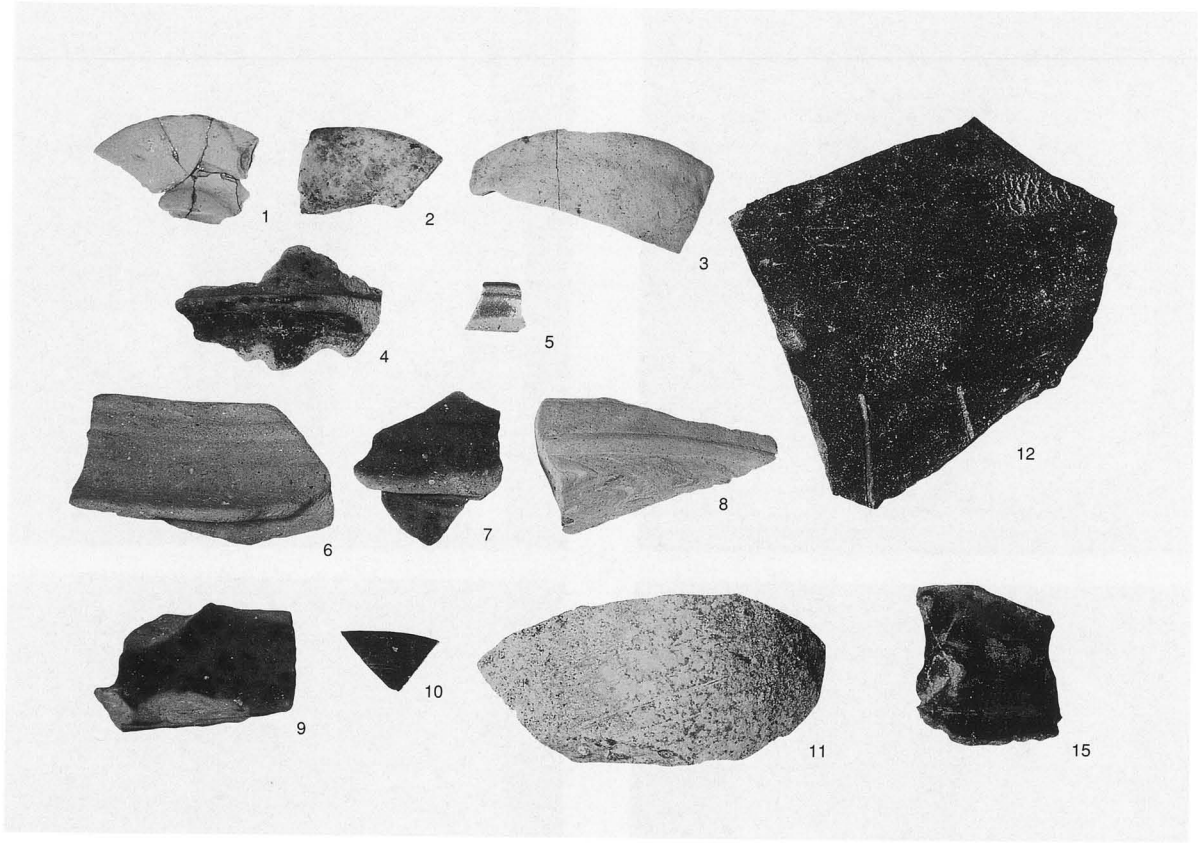
図版8　内田遺跡第8次調査

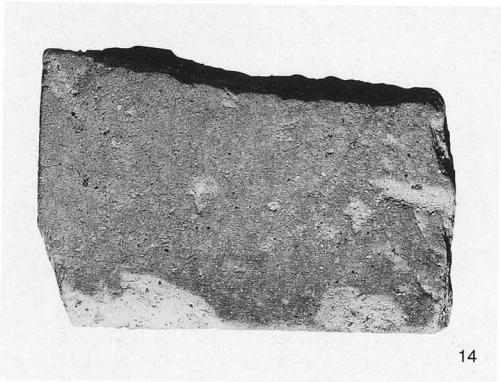
（1）土坑7（南東から）

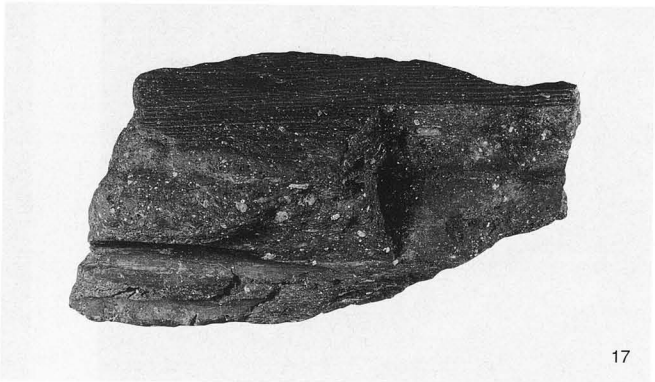


（2）井戸1（南から）

図版9　内田遺跡第8次調査　出土遺物

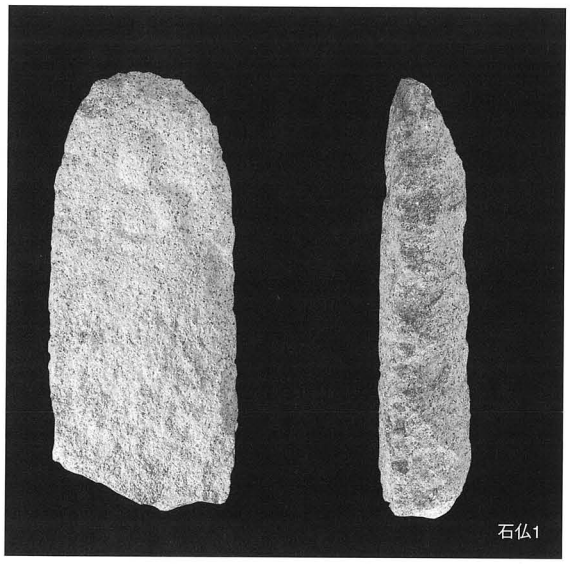


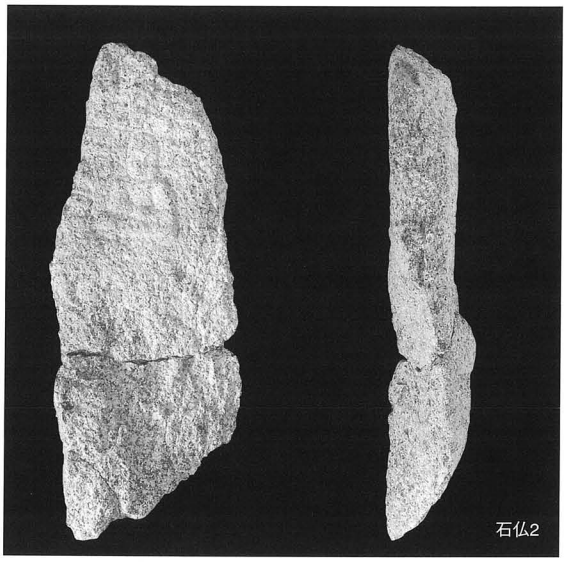


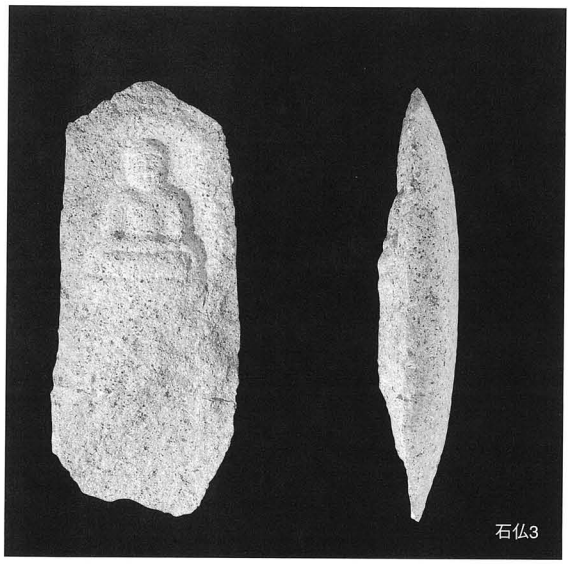


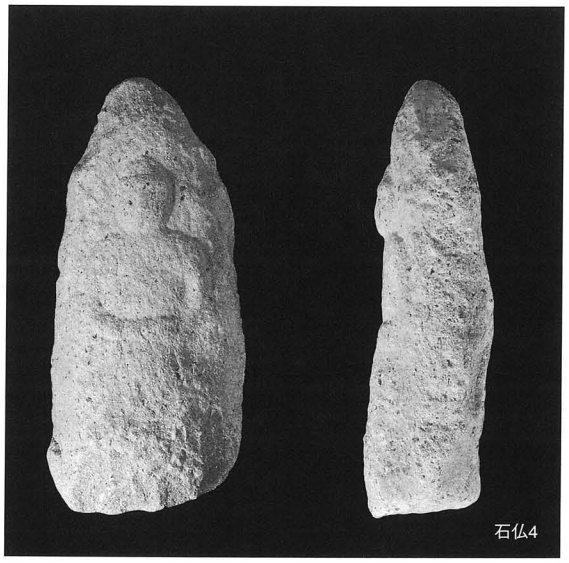
（1）溝1・2、堀　出土遺物（第8図）

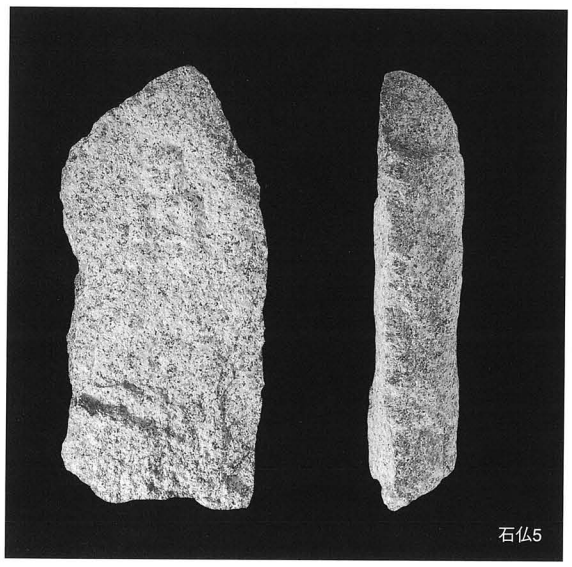
図版10　内田遺跡第8次調査　出土遺物

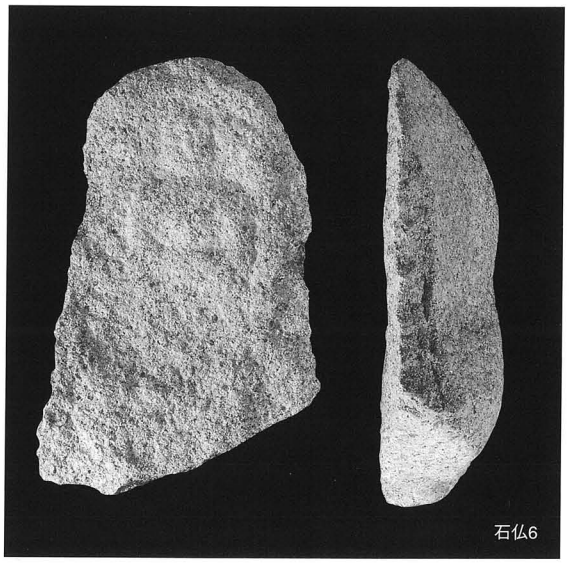






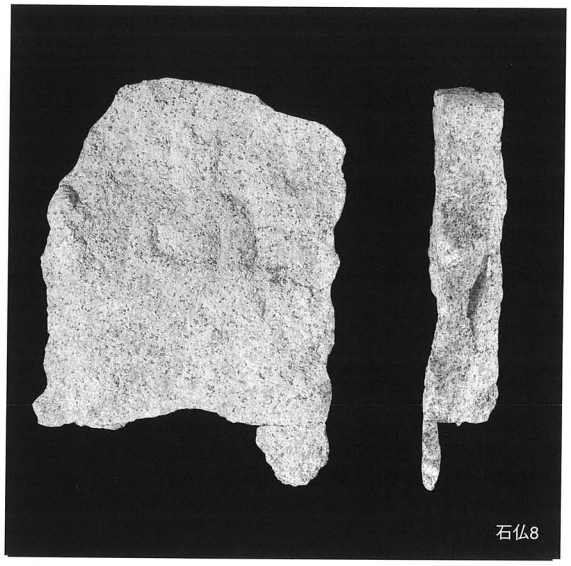


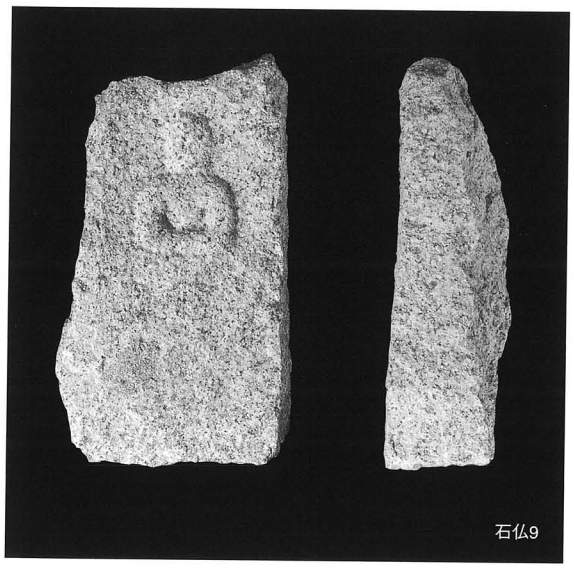


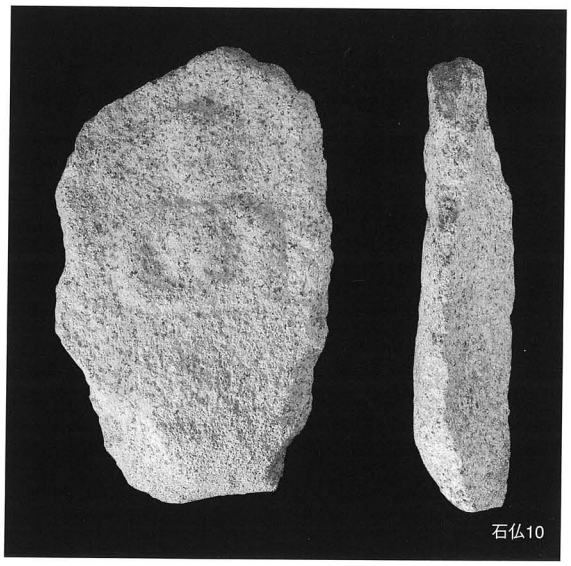


（1）溝1出土石仏（第11図）

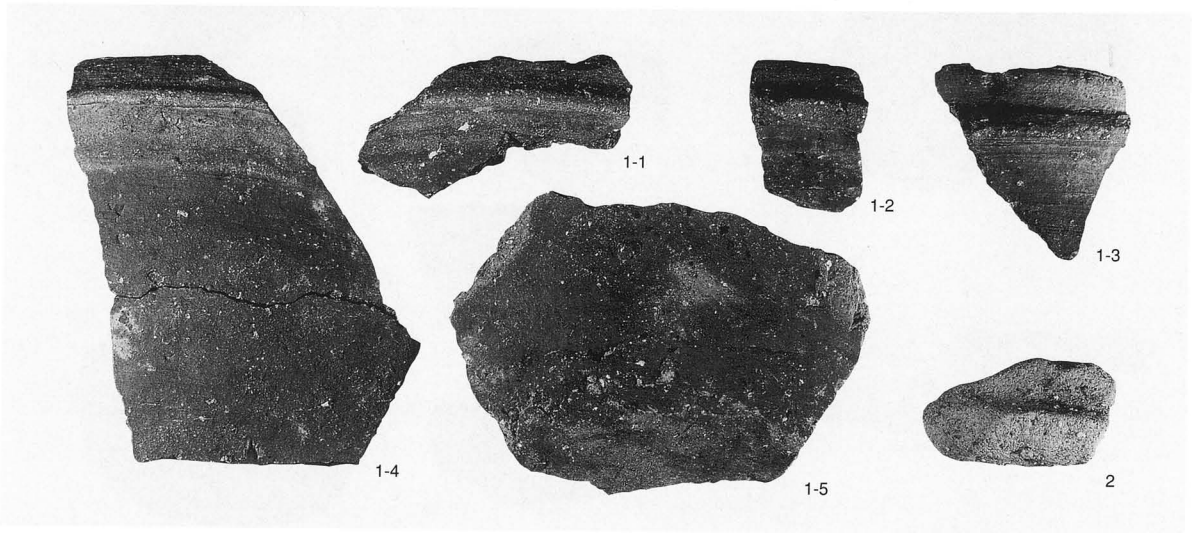
図版11　内田遺跡第8次調査　出土遺物





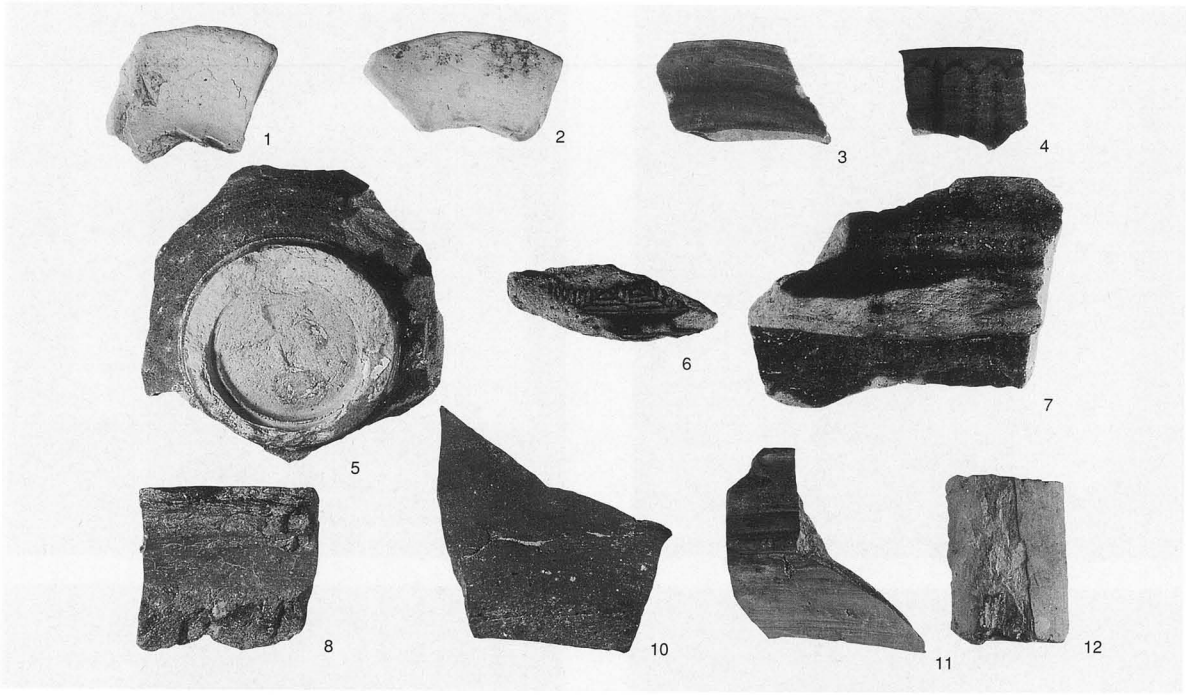


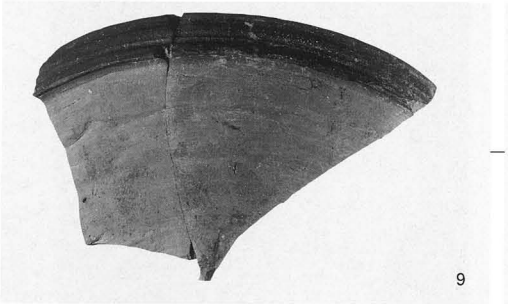
（1）溝1出土石仏（第12図）

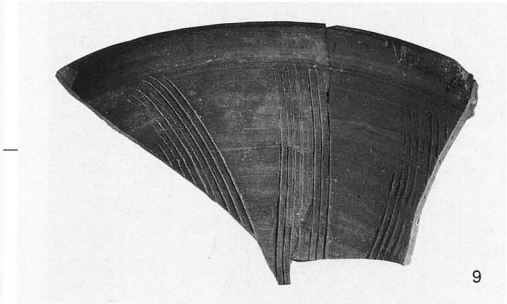


（2）礫敷遺構出土遺物（第13図）

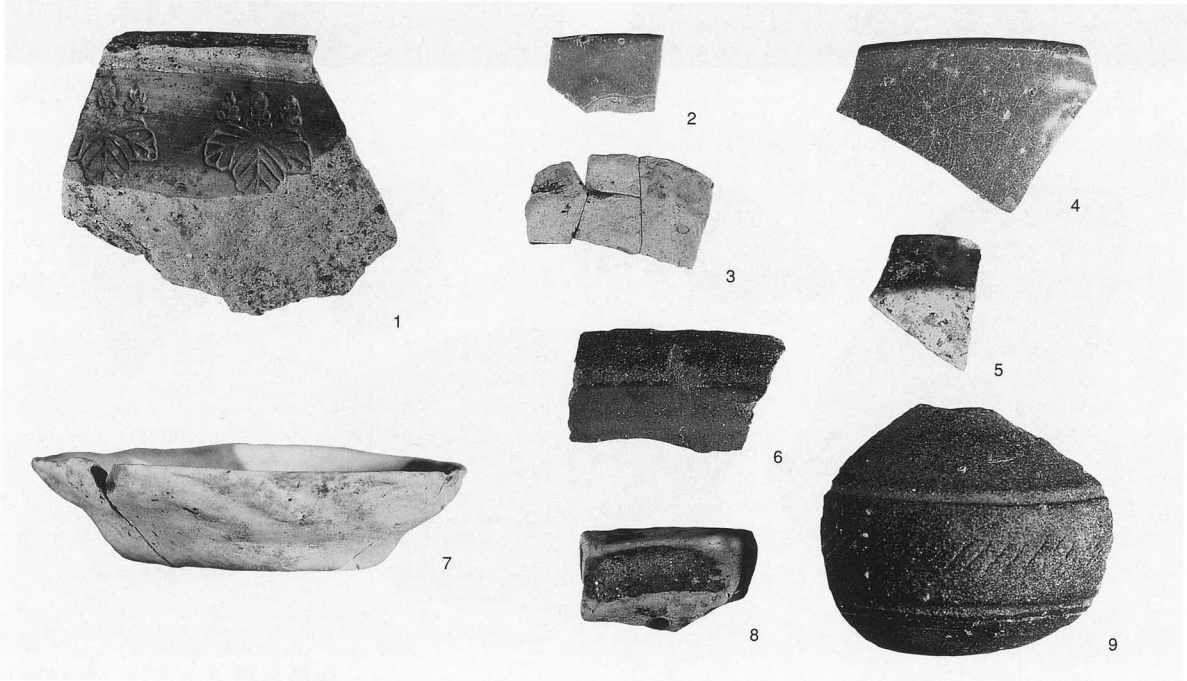
図版12　内田遺跡第8次調査　出土遺物



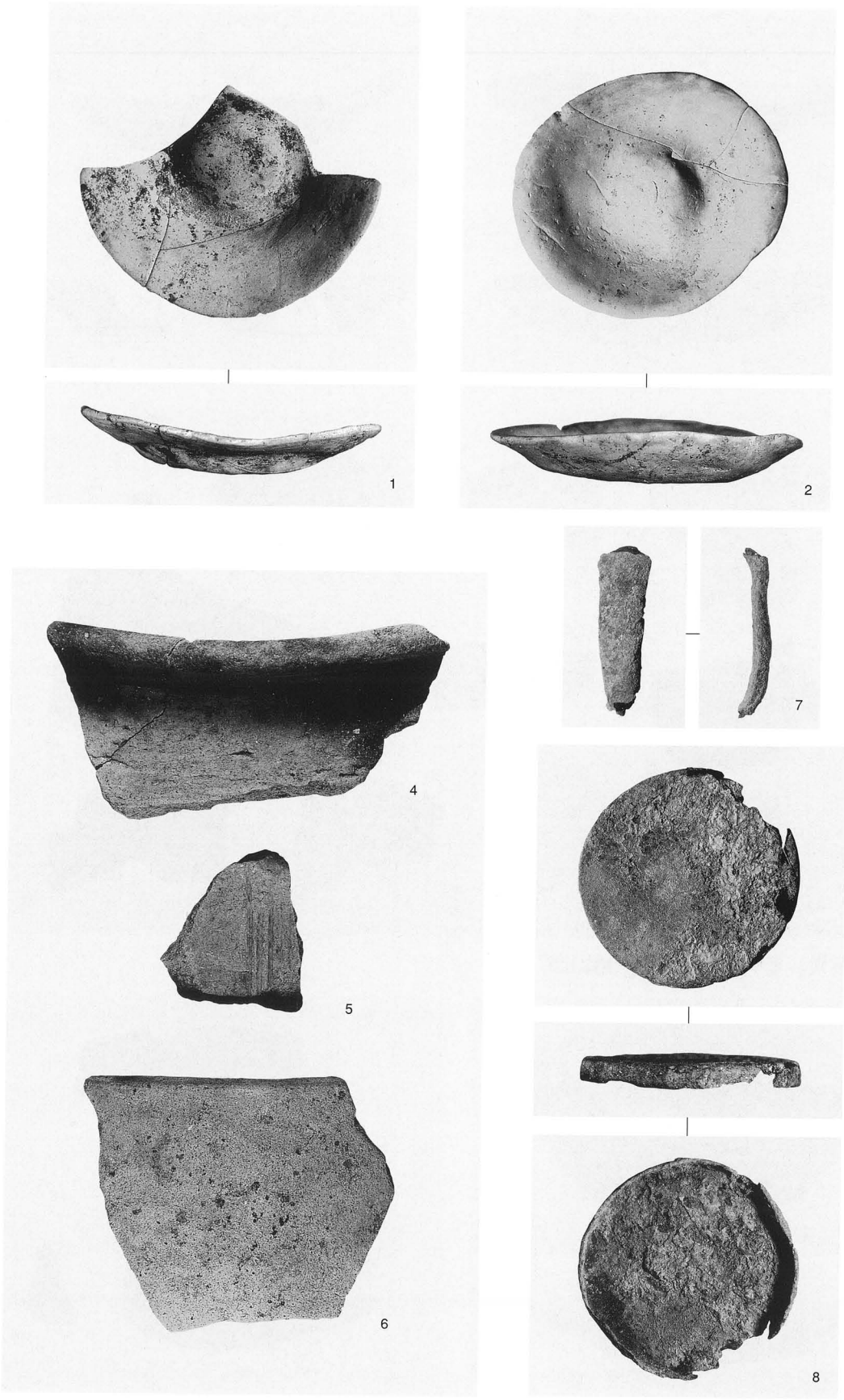




（1）土坑1出土遺物（第15図）



（2）土坑4～7出土遺物（第17図）



（1）井戸1出土遺物（第21図）